
エロ馬鹿男子と
閉じ込められた幼馴染を
ひたすら傍観していた俺

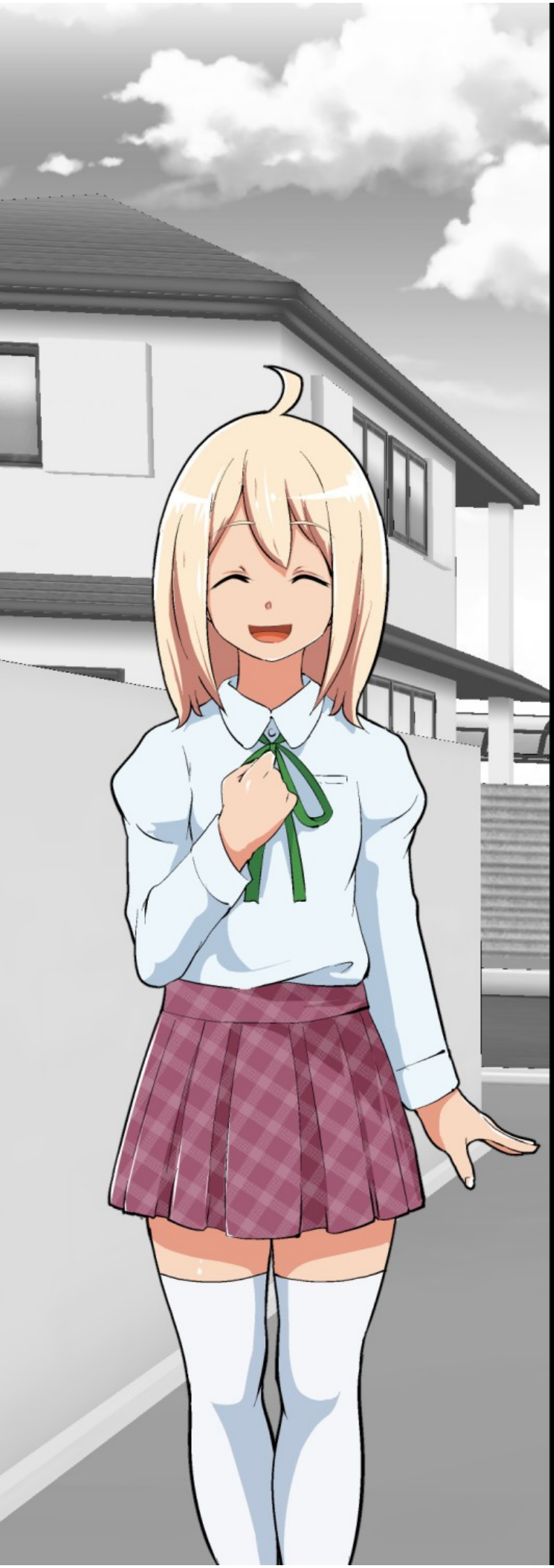


地元の学校へ通うごく普通の男子生徒、平野友馬（ひらの ゆうま）。

「友馬く～んおはよー。」



幼馴染の女の子、岩原美陽色(いわはら みひろ)。
二人は家も隣同士で小さい頃からずっと一緒だった。
当たり前のように同じ学校へ進学し、当然のように一緒に登校する。



年頃なので周りにそんな関係をからかわれることもあるが、友馬は悪い気はしなかった。みひろも同じ気持ちなら嬉しいなと思っていた。

みひろは大人しく控え目な性格ではあったが、誰にでも優しく決して傷つけるようなことはしないので、クラス女子からは妹のように可愛がられている。

優しすぎて勘違いさせてしまうのか、男子の隠れファンが割といるらしい。

みひろがクラスメートから大事に思われていることは嬉しいが、一番に思っているのは俺だと、自分がこれからもみひろを守ってやるんだと友馬は想っていた。

担任「えー、それじゃあ雑務係は岩原と下川ってことだな」

クラスで各委員や係を決めることになったがみひろは〝雑務係〟を任せられることになった。

放課後に教室の軽い清掃や教材の整理などをする、はっきり言ってただ面倒なだけの完全にハズレ枠の係である。

大体いつも最後まで残って、じゃんけんで負けた者がさせられるハメになるのがお約束だった。

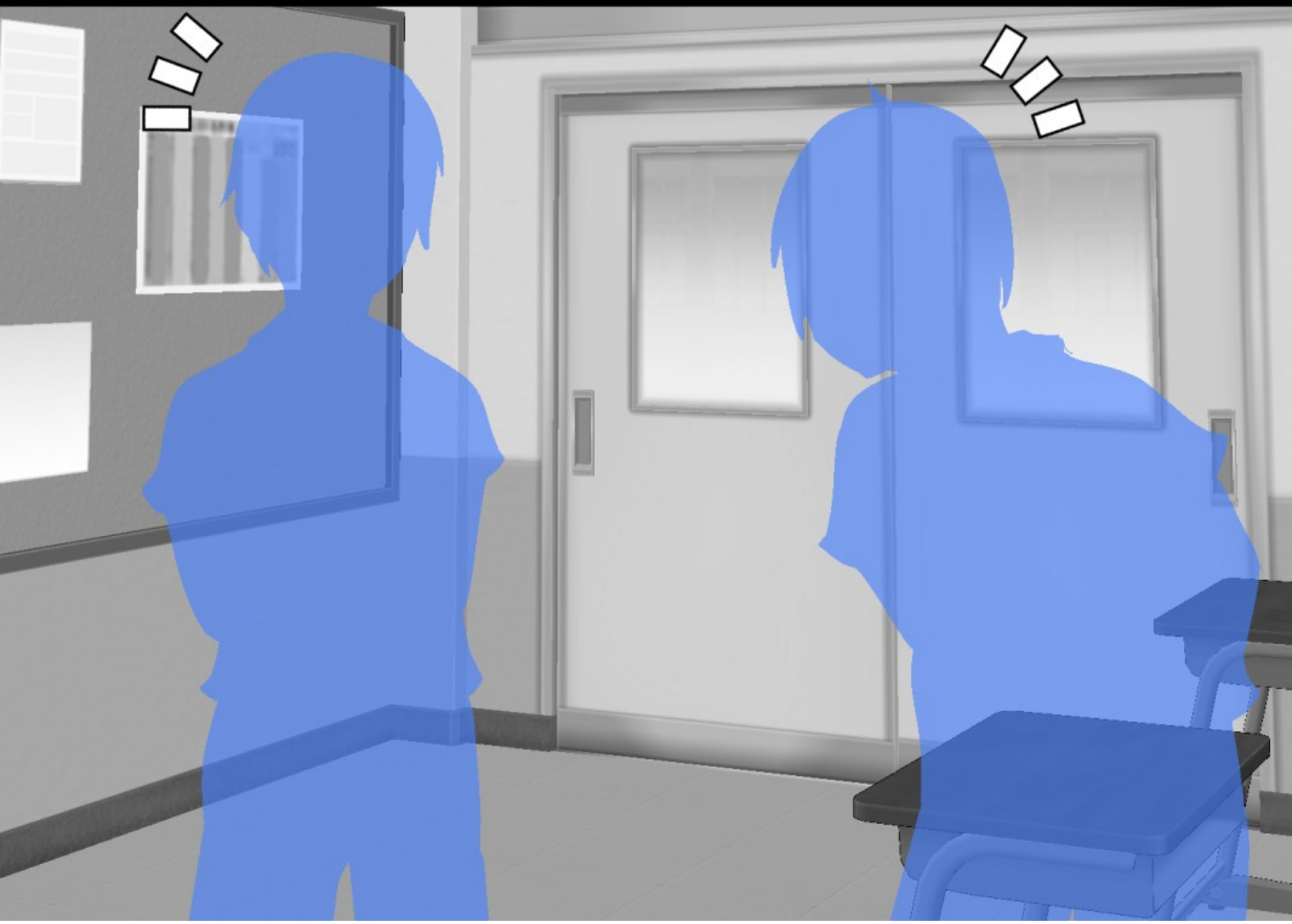


しかし今回は、みひろがどれを務めようかワタワタと迷っているうちにこんな形になってしまった。

そんなみひろを見かねて、いい恰好をしたいのであろう男子数名が「俺代わってもいいよ」と名乗り出たが、みひろは「優柔不断な自分が悪いんだしもう決まったことだから自分がやる！」と断った。

大人しいがいざとなると頑なになる所もある。

「え～俺雑務係かよ～マジかー！」



もう一人、みひろと同じく係を任せられた男子生徒。

下川よー助(しもかわよーすけ)。

毎週のようにエロ本やグラビア雑誌を持ってきては、没収されるというお約束を繰り返すエロ猿男子。

エロ馬鹿男子グループの中心にいる存在なので、やはり女子からは邪険に扱われている。

が、年頃の男子生徒であればそういった事にはもちろん興味ありありなので、男子ウケは割といい。

友馬自身もよー助を〝決して嫌な奴ではない〟と評価している(友達かと言われると口ごもるが)。



みひろ「し、下川くんよろしくね！面倒かもしれないけど頑張ろ？」

よー助「…へへ、岩原と一緒ならいいか！」

みひろ「ふふっ(笑)なにそれー」

よー助「ｗｗｗ」

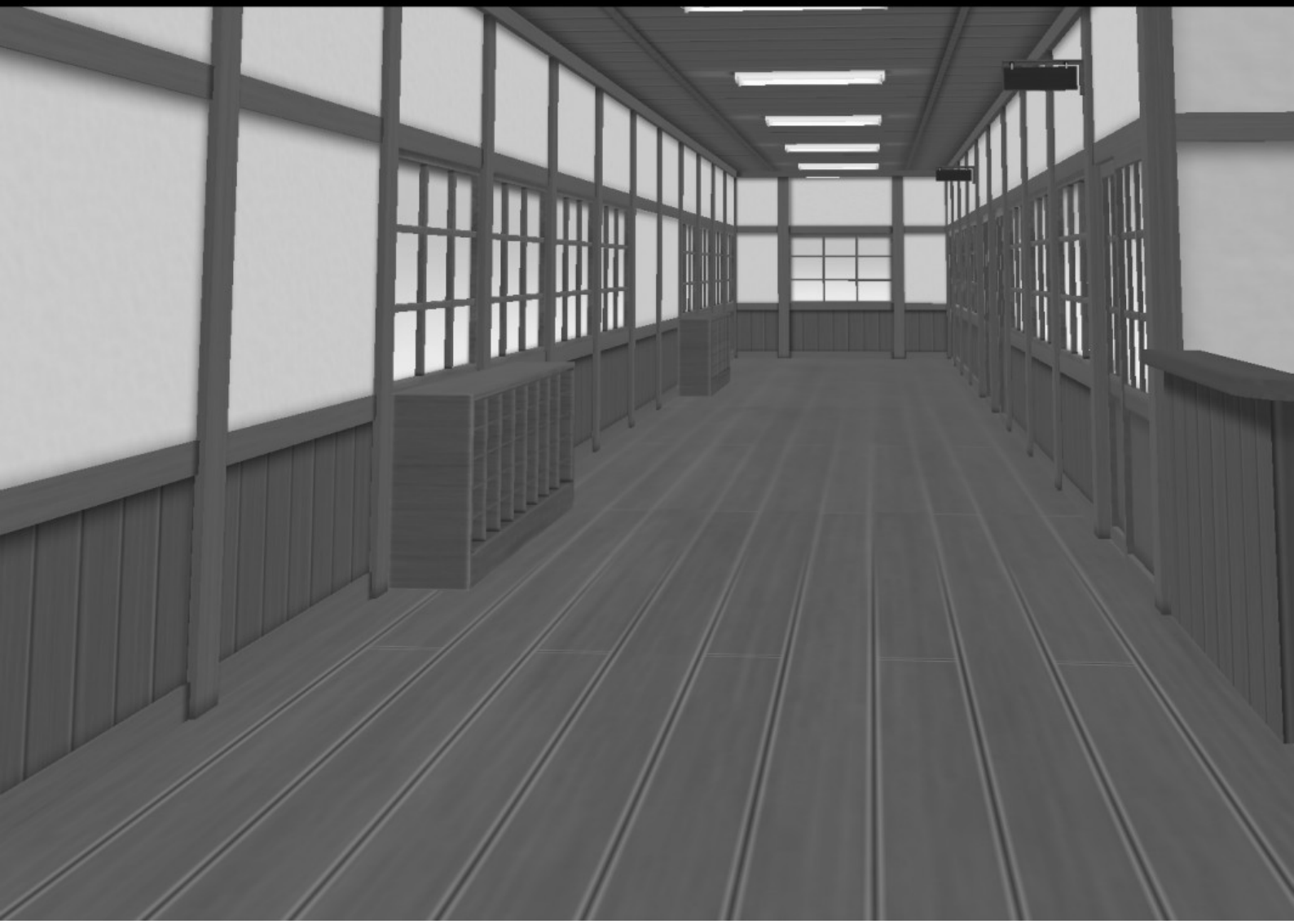
友馬「…」

みひろとよー助がそれなりに仲良さそうに話しているのを離れた席から見る友馬。

ちょっとだけよー助にムッとした。



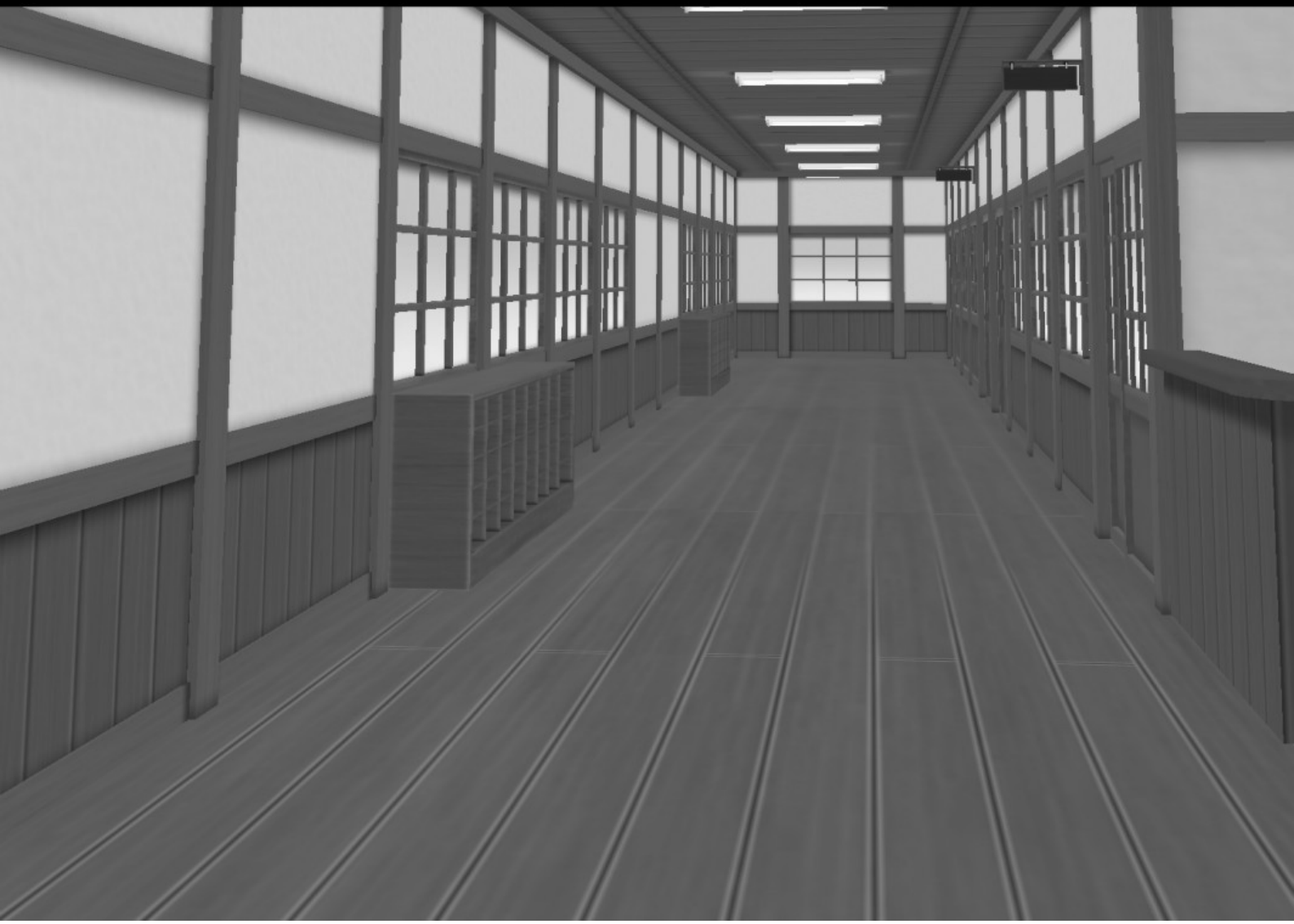
数日後の放課後、さっそく係の仕事を任せられるみひろ(と、よー助)。
使った教材を旧校舎の空き教室に戻しておいてほしいと頼まれたそうだ。
みひろと帰ろうと思っていた友馬はついでだし自分も手伝おうかと言ったが、係の仕事だからと断られた。
それなら終わるまで教室で待ってようと思ったのだが
みひろ「じゃあパパっと済ませちゃおうっか」
よー助「おぉ！でも岩原と二人きりでいられるならパパっとは済ませたくないなー」



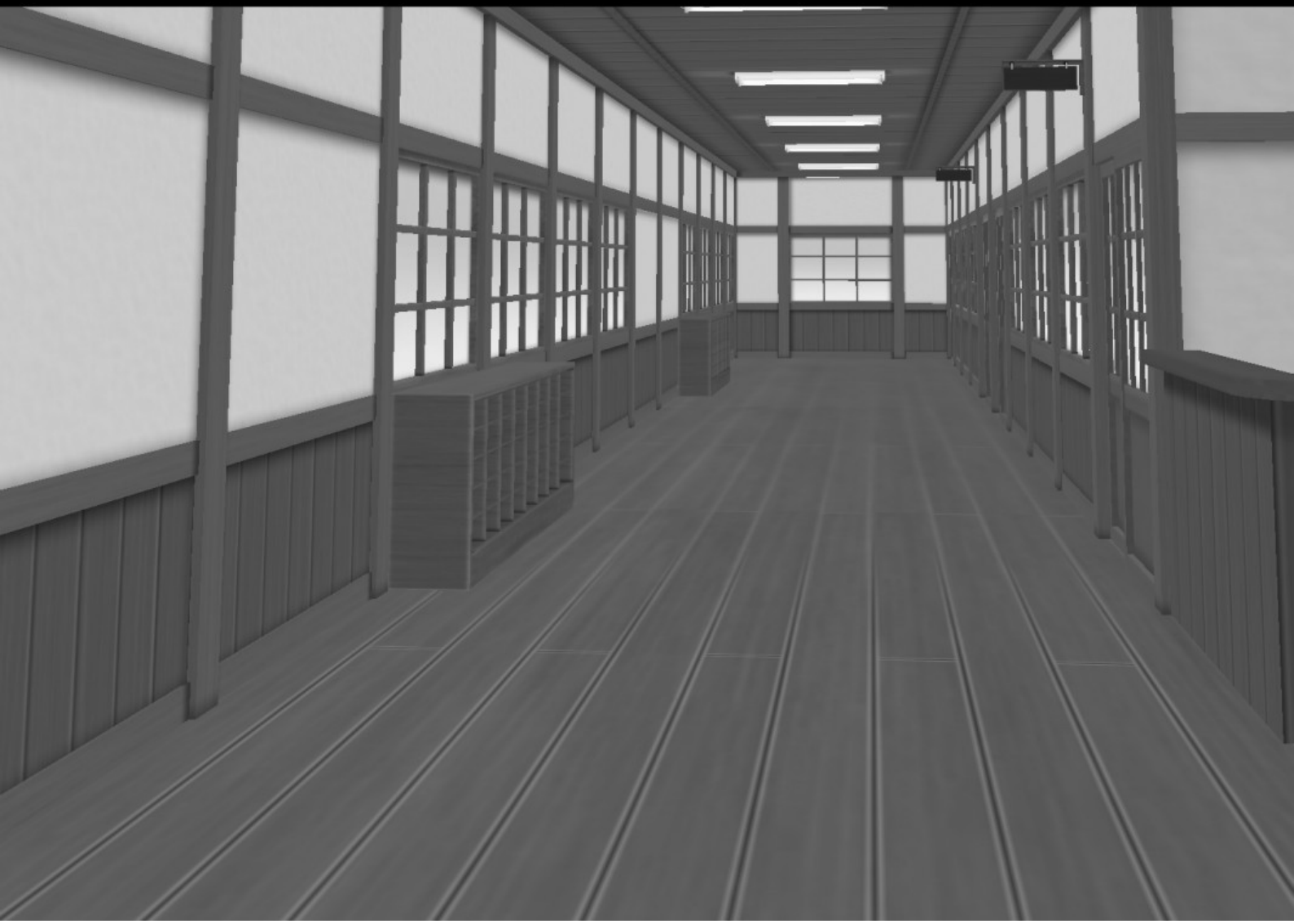
みひろ「もう、またそんなこと言って…(笑)」
よー助「ｗｗｗ」
友馬「…」

二人は教材の詰められた段ボールを各々一つずつ持って旧校舎の方へ向かった。
その二人の後を友馬はついていった。
無意識に近い行動だった。
放課後にもなれば生徒も教師もほぼ立ち寄ることはないであろう旧校舎。

そんな場所に二人きり。
別に何が起こるなんてこともないだろうが、それでも友馬は後をつけた。



みひろ「～～～」
よー助「～～～w」
何でもないようなことを話しながら旧校舎に入り空き教室へ向かう二人。
よー助が馬鹿らしいことを言ってみひろはそれを微笑んで聞いてくれている。
友馬はその後姿を遠めに眺めながら、気づかれない内に先に戻っていようとした。
これでついてきているのがバレたら自分の方が余程馬鹿らしいことをしていることになってしまう。
踵を返そうとした時。
二人の声が一切聞こえないことに気づいた。



距離が開いたため聞こえなくなったという訳でもなく、少し意識をそらしている間にピタッと聞こえなくなった。

友馬は何かを感じて再び旧校舎に自然と歩みを進める。もう気づかれてもいいという思いで。

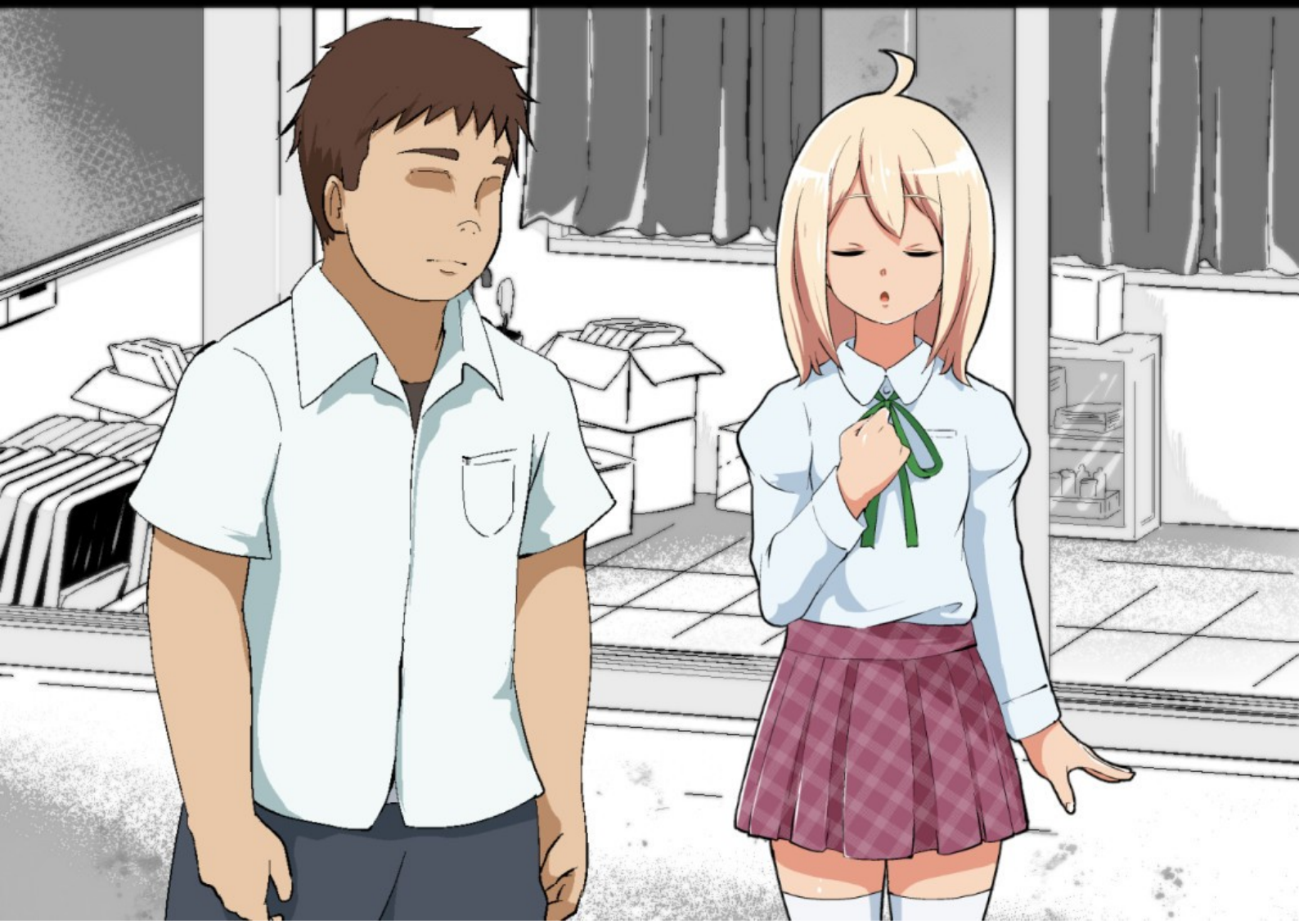
恐らくこのあたりの空き教室だろうと覗いたら、二人はいた。

横たわっている。

みひろは仰向けに、よー助はうつ伏せの形で。

驚いた友馬はすぐに駆け寄り、声を掛けたり軽く揺すってみたりする。

無事なようだった。



すーっすーっと小さく寝息を立てている。

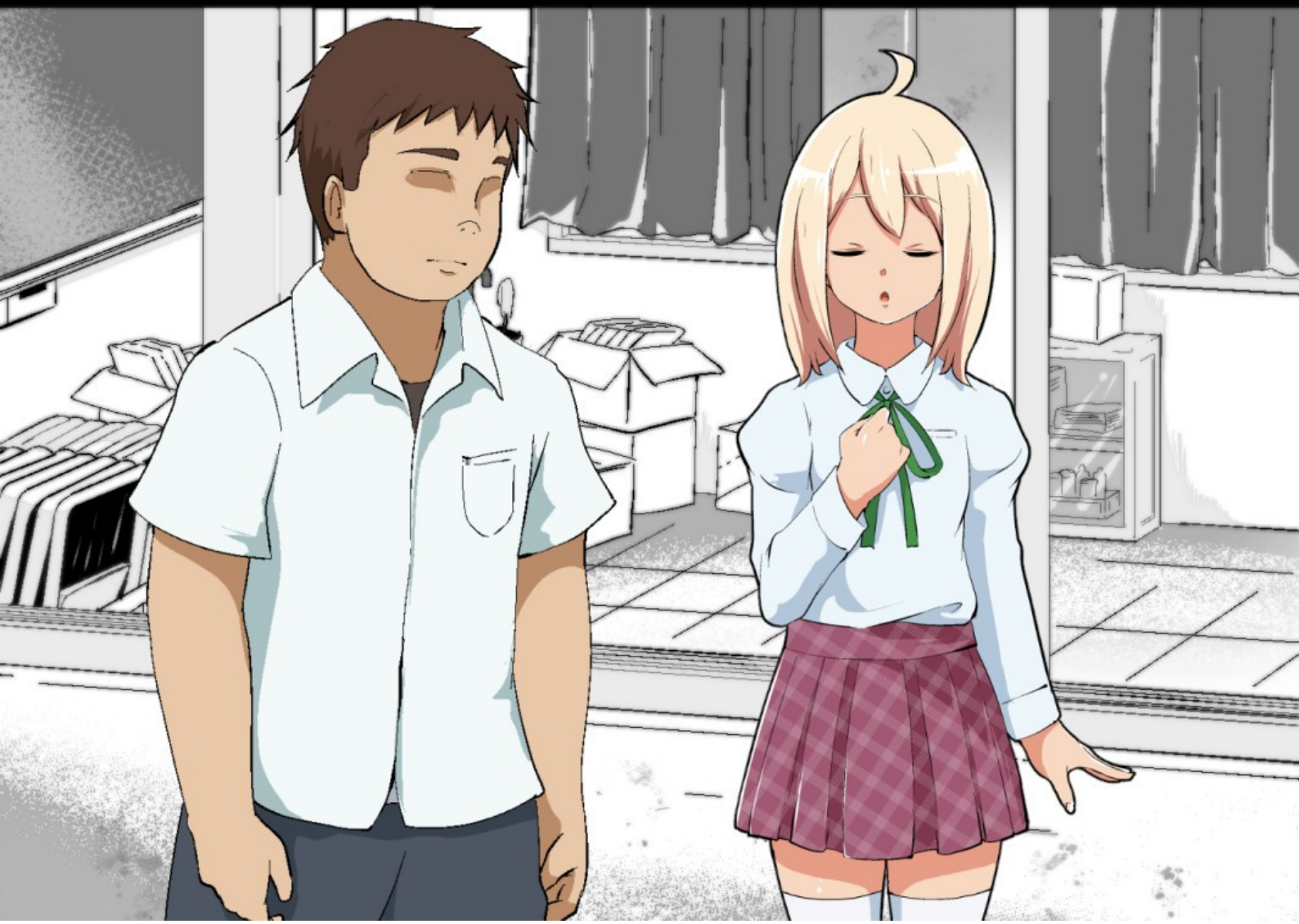
よー助も口を半開きにあけてクカーっと寝付いているようだ。

ホッとしたが、なぜこんなことになっているのか意識を切り替える。

何か眠気を誘発するようなモノが散布されていたのだろうか。

…もしかして自分がついてきているのに気づいて、ドッキリ感覚でこんなことをしているのだろうかとも思った友馬。

しかし、この二人が瞬時に口裏を合わせてそんなことをするとも考えられない。



色々頭で考えているうちに、意識がボウっとしてきた。

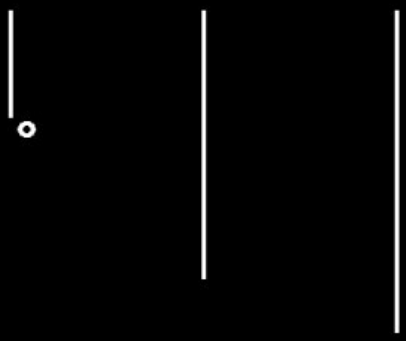
足に力が入らなくなり、尻餅をつく形でストンと座り込む。

瞼が重く自然と閉じてしまう。

友馬「…～」

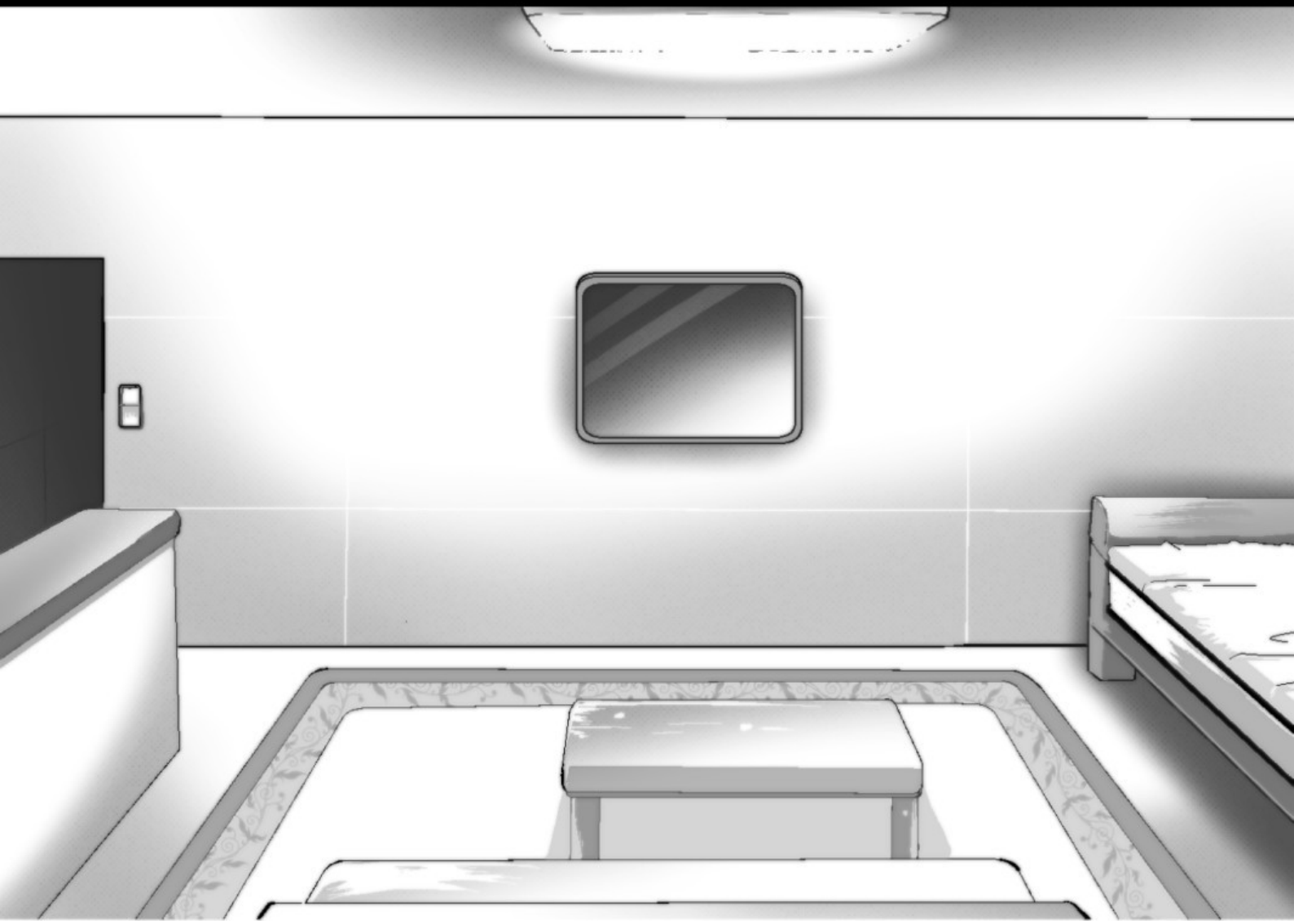
そのまま意識が遠くなった。





目を覚ますと友馬は壁も天井も真っ白なワンルームの床に仰向けに寝転がっていた。

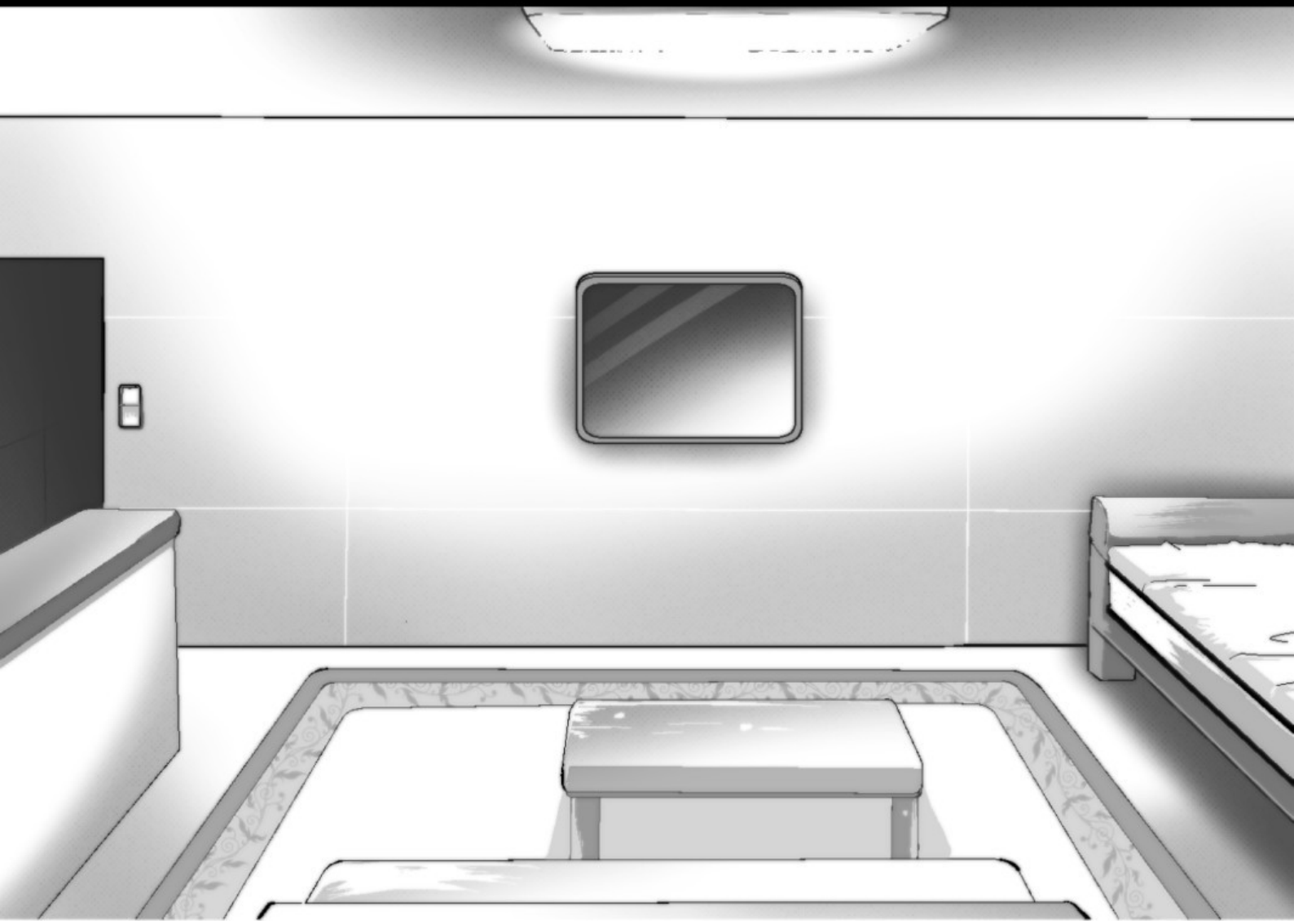
天井の蛍光灯がぼんやりと明るく、その光がやけに現実味を欠いていた。



状況がまったく理解ない友馬。
夢なのか現実なのか、その境目すら曖昧だった。

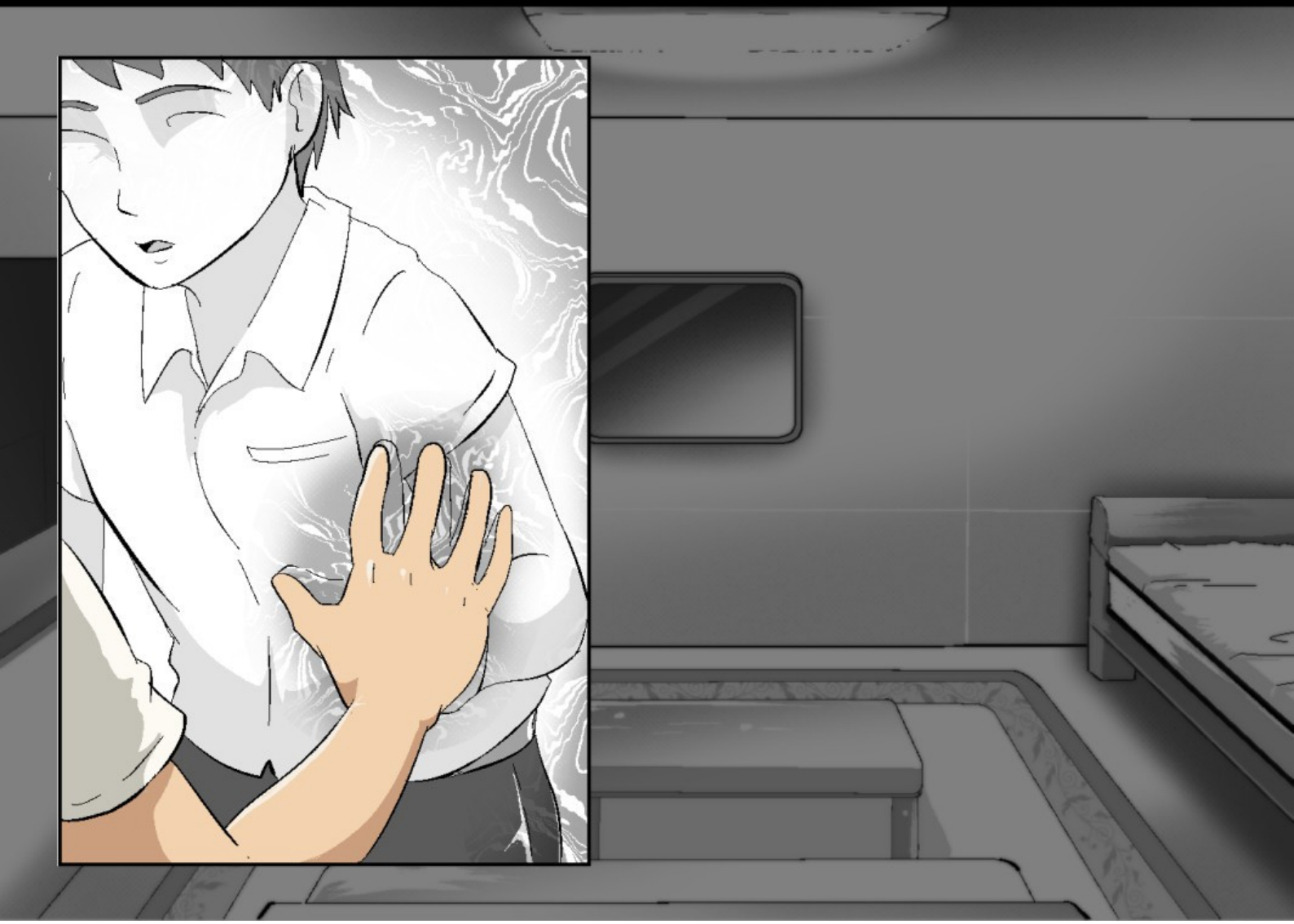
友馬「…！みひろ!!」
よく見たら向こう側でみひろが横になっていた。よー助もいる。
友馬は近づこうとした。

友馬「!!…痛って…！」
ガッ！と何かにぶつかった。



？？何もない…。
もう一度、今度はゆっくり歩みを進める。
手を前に向けながら。

友馬「…！」
明らかに手に何かが触れた感覚がある。
硬い何かが。
しかし目の前には何も見えない。何も目視できていない。
手でペタペタ触れてみるとそれは分厚いガラス面のようなものだった。
壁一面に張り巡らされていて、向こうに、みひろのほうへ行くことができない。



まったく訳が分からないが友馬はそのガラス面のような壁をバンバン叩いてみひろを起こそうとする。
まずみひろは無事なのか、それだけが心配だ。
よー助「んぐっ・・・」
みひろを起こしたかったのだが、よー助が先に目を覚ました。
よー助「…え？なんだ、ここ…？」
「い、岩原…！大丈夫かおい！」
よー助は近くで横になっているみひろに心配そうに近寄る。
こんな状況下であるのでよー助のそんな行動が心強く思えた。



友馬「下川！ここ、見えない壁みたいなものがあって通れないんだ」

みひろ「…ん」

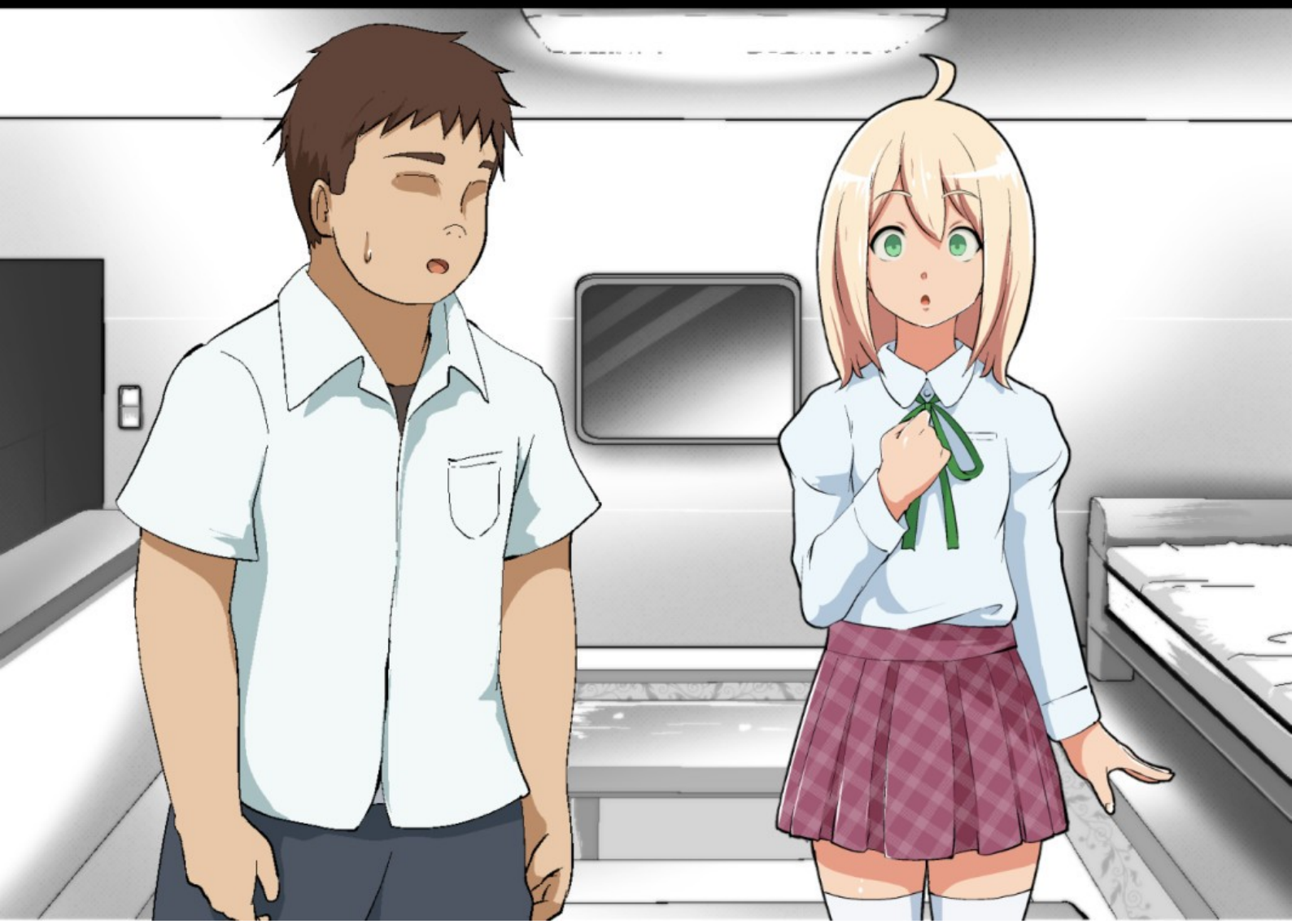
みひろが起きた。

みひろ「…下川くん？…ここは…」

友馬「みひろ！なんともないか！」

みひろ「え…？え…っ…なに、どういうこと…？」

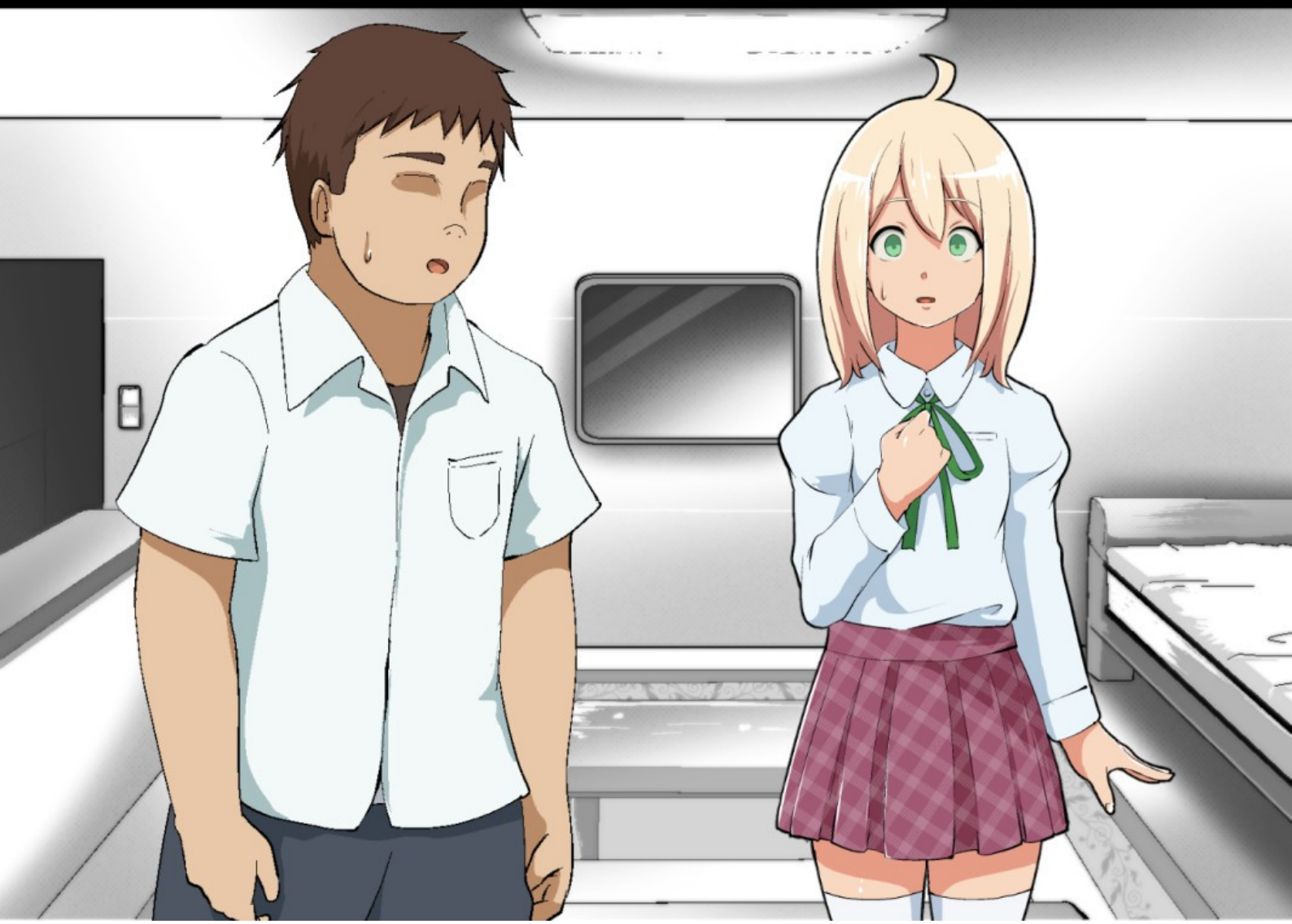
友馬も声をかけるがみひろは明らかにこの状況を把握できずに動揺している様子だった。



よー助も説明できるわけなくたじろいている。

とりあえずみひろも無事そうなのを確信した友馬は、今は出口を見つけることが最優先だろうと部屋を散策し始めた。

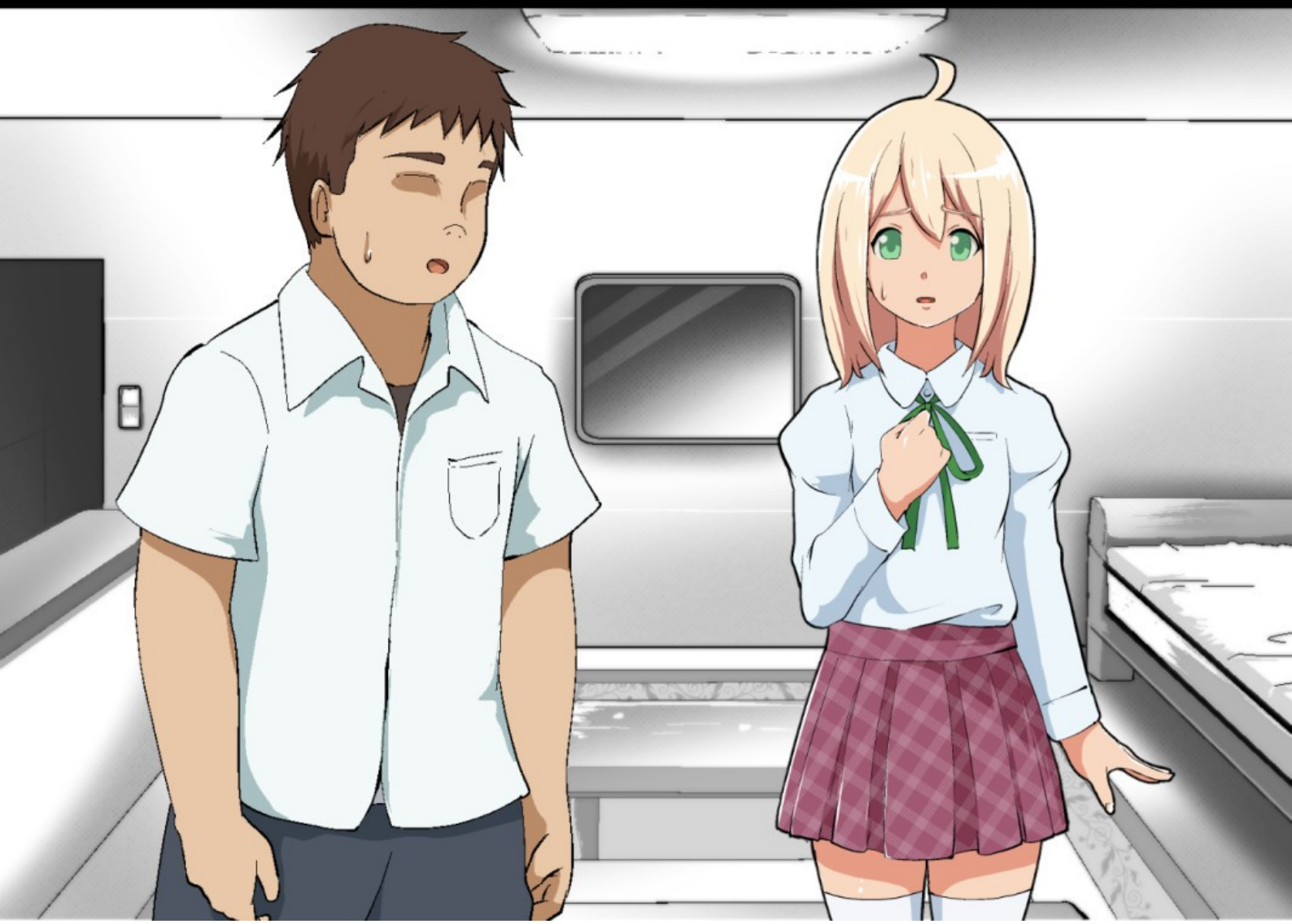
よー助も同じように向こうの方へ歩いて行ったようだ。



とにかく部屋中歩き回った。
どこを探し回ってもドアも窓もない。
出口が一つもない。
風呂やトイレといった最低限の設備はあり、電気も水も通っているようだった。
奥まったところに飲み物や食料、ティッシュなどが積まれた小部屋があったがそれ以外は無駄なものがほとんど置いていない簡素なワンルームだった。
生活環境は十分整っている。が、それだけ。
外部との連絡手段が一切ない。



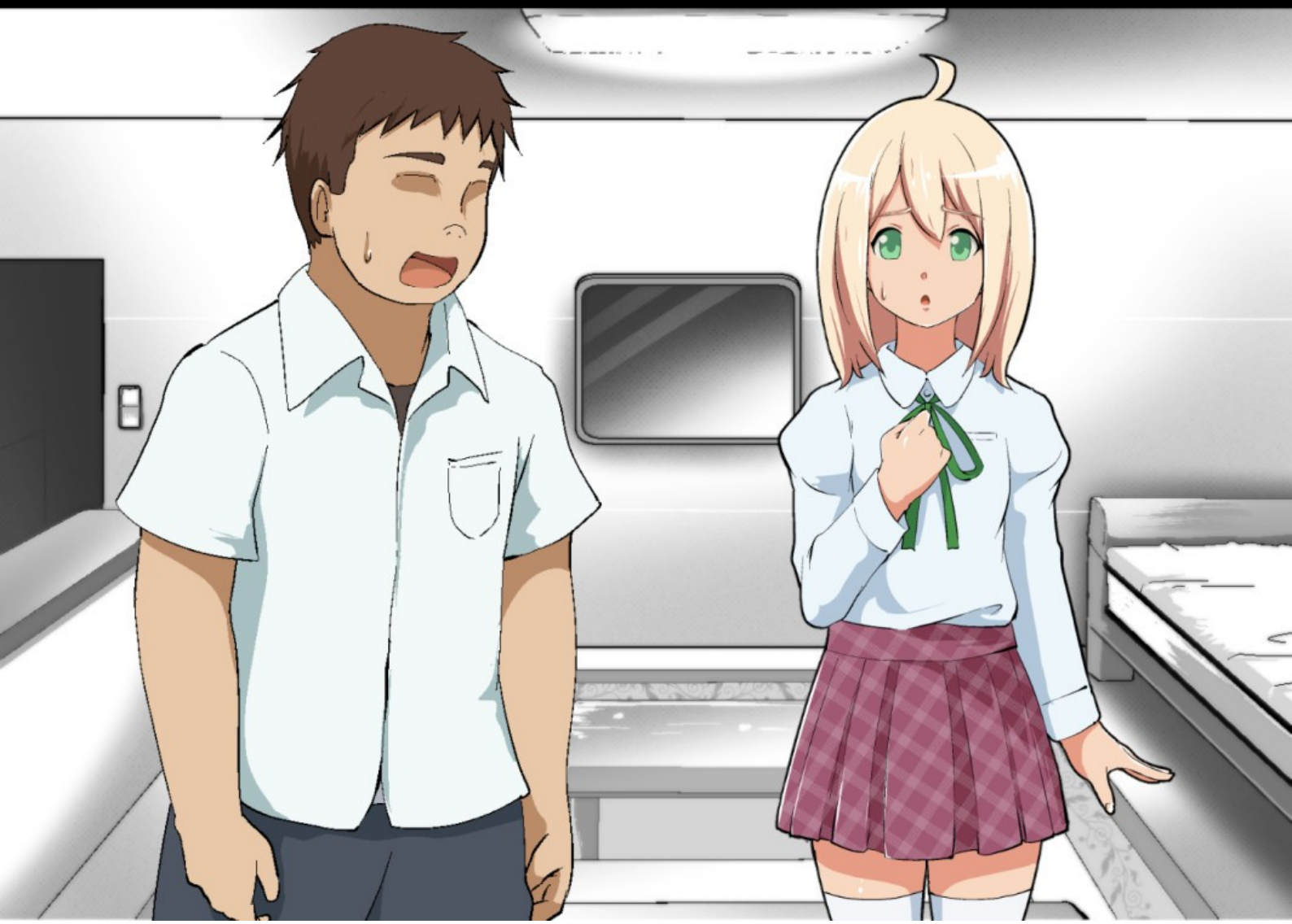
再び先ほどの部屋へ戻ると同じくらいのタイミングでよー助も戻ってきた。
恐らく、向こう側も同じような感じだったのだろう。
よー助「何が起こったんだよ…空き教室に教材置いて帰ろうとしたら急に眠くなって…」
みひろ「私も…」
よー助「…学校が俺らに内緒でなんかバラエティ番組の企画でも組んでたとか…なんて」
みひろ「う、うーん…だとしても私たちがターゲットになるのも目的が分からないというか…」



みひろとよー助がしばらく話している。
とにかく理解できない現状だ。

友馬「…」
…友馬がそれ以上にさきほどから不思議に思っていること。

友馬「二人とも…なんで俺のこと無視してるんだ…？」

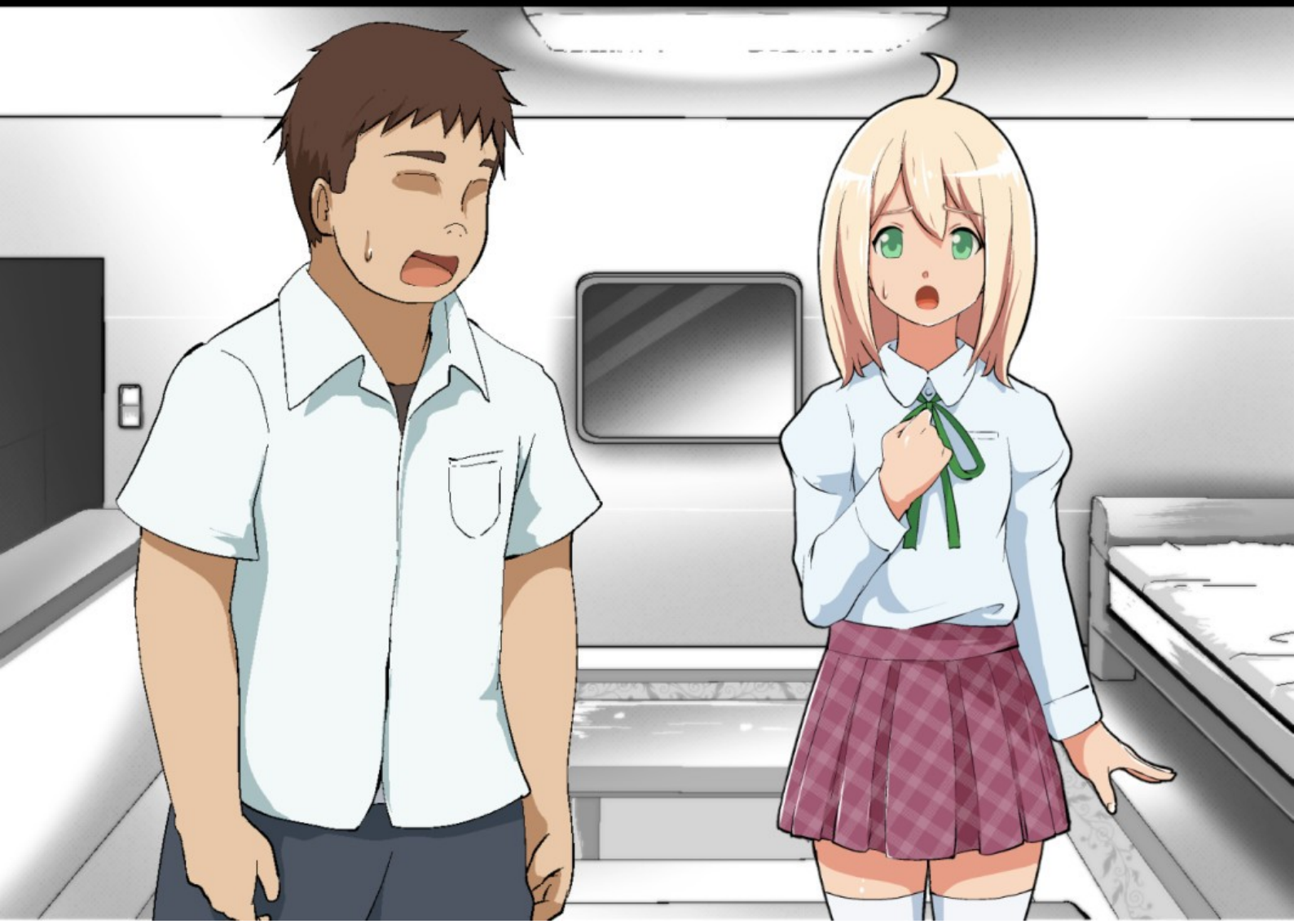


会話がかみ合わない、というより友馬の会話だけがまったく干渉されていない。
友馬は見えない壁をコンコン叩く。
まったく見向きもしない二人。
他にもいろいろ試してみた。

友馬「…！」

結果、この見えない壁は…正確には限定的に見えない壁は、

【みひろとよー助の二人にだけ友馬の姿が全く見えていない】

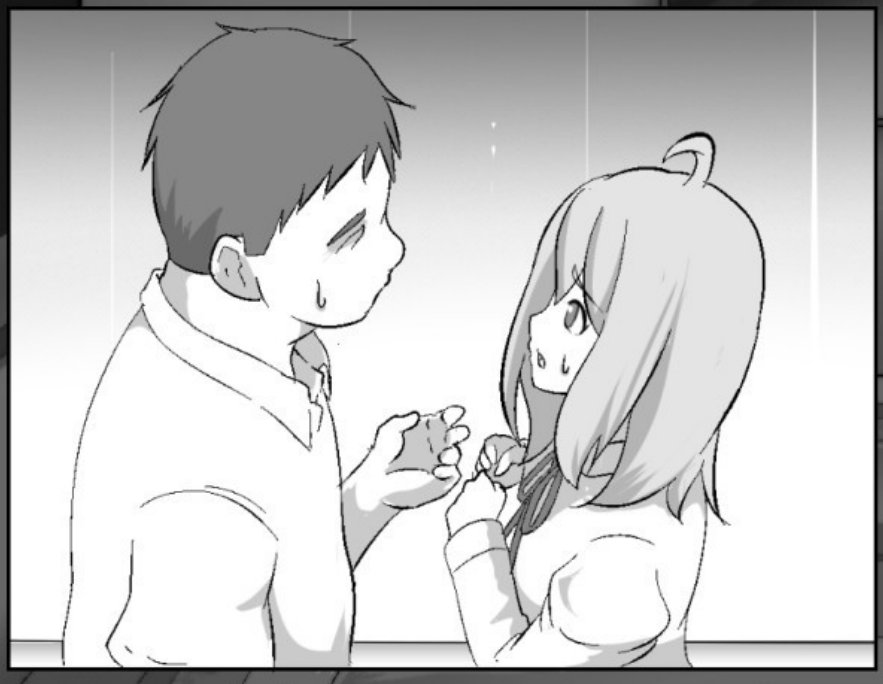


友馬からは二人のことも、二人のいる空間もしっかり確認できる。

しかし二人からはなぜか、友馬側が一切見えていないようだ。

友馬の目の前にあるのは壁一面の分厚いガラス張りだが、二人はただの壁としか認識していない。





その折、壁に掛けられたテレビモニターが急に点いた。

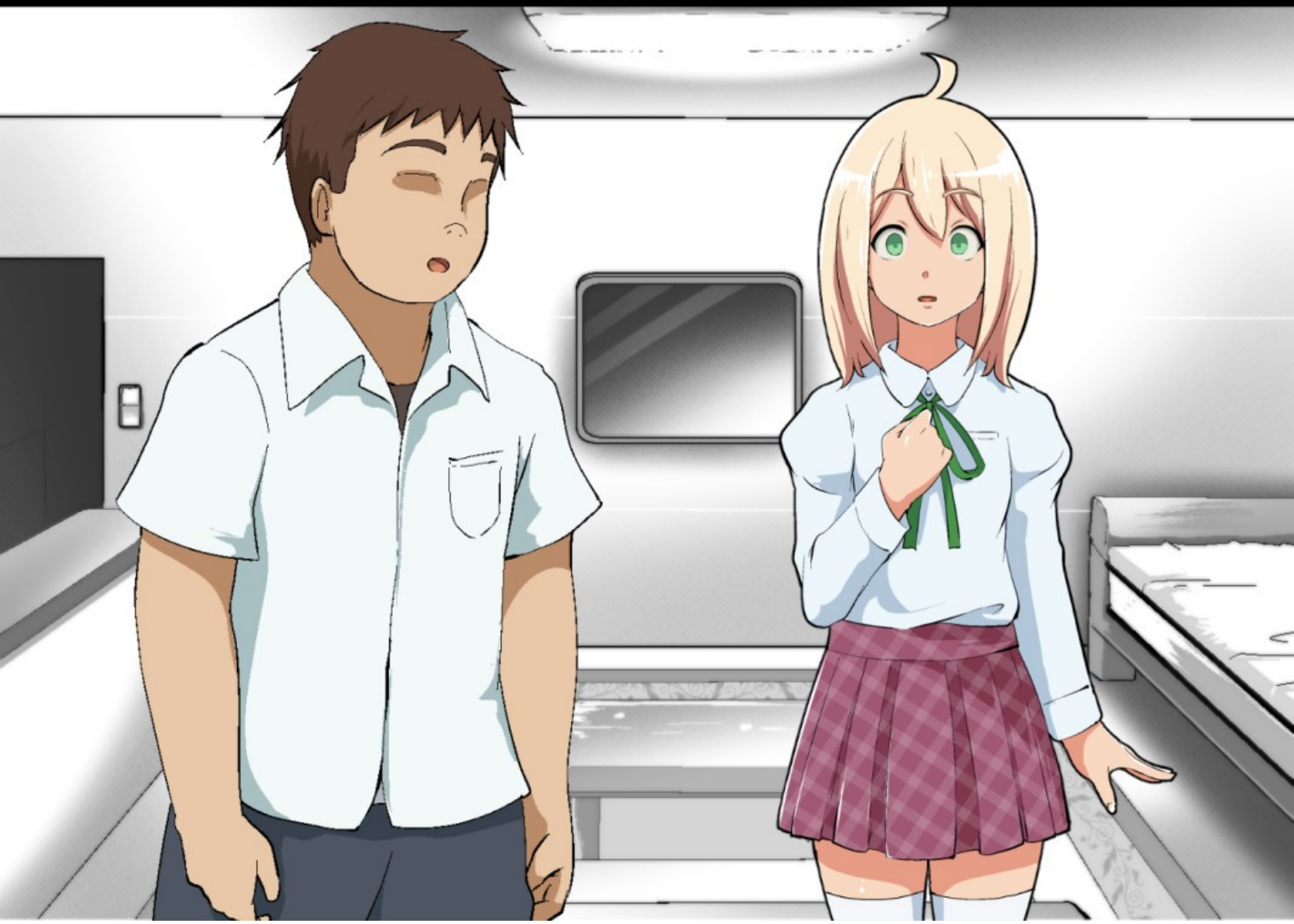
これ見よがしに、いかにも意味ありげに設置されていたモニターだ。

友馬とみひろたちの部屋、それぞれについている。

みひろとよー助はそのモニターに近づき、数秒の時間差で表情を変えた。

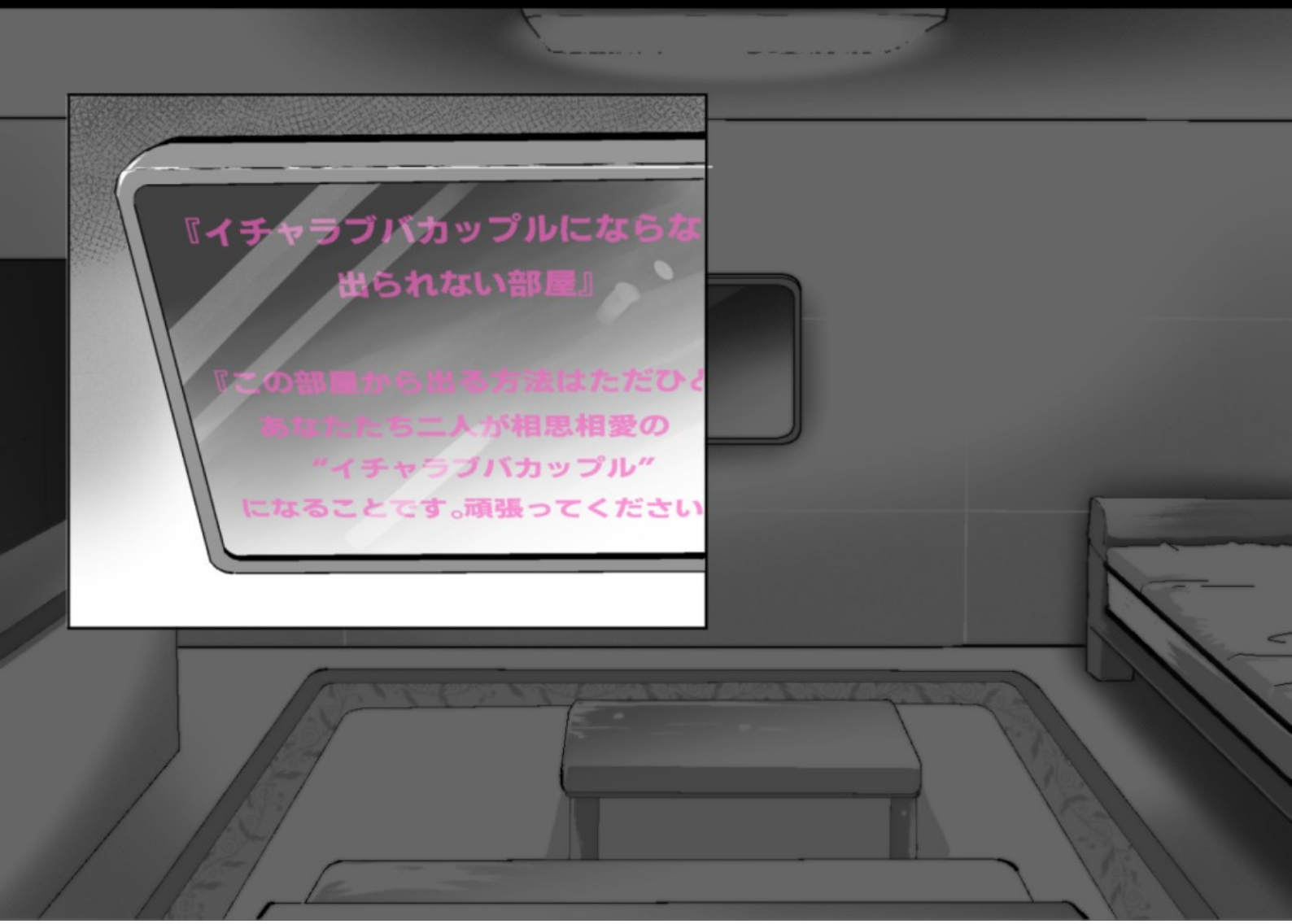
見るからに驚愕している。

友馬のいる位置からはどうにも見えづらかったので、自分の部屋のモニターを見ることにした。おそらく内容は同じだろう。



『イチャラブバカップルにならないと出られない部屋』

『この部屋から出る方法はただひとつ。二人が相思相愛の“イチャラブバカップル”になることです。頑張ってください。』

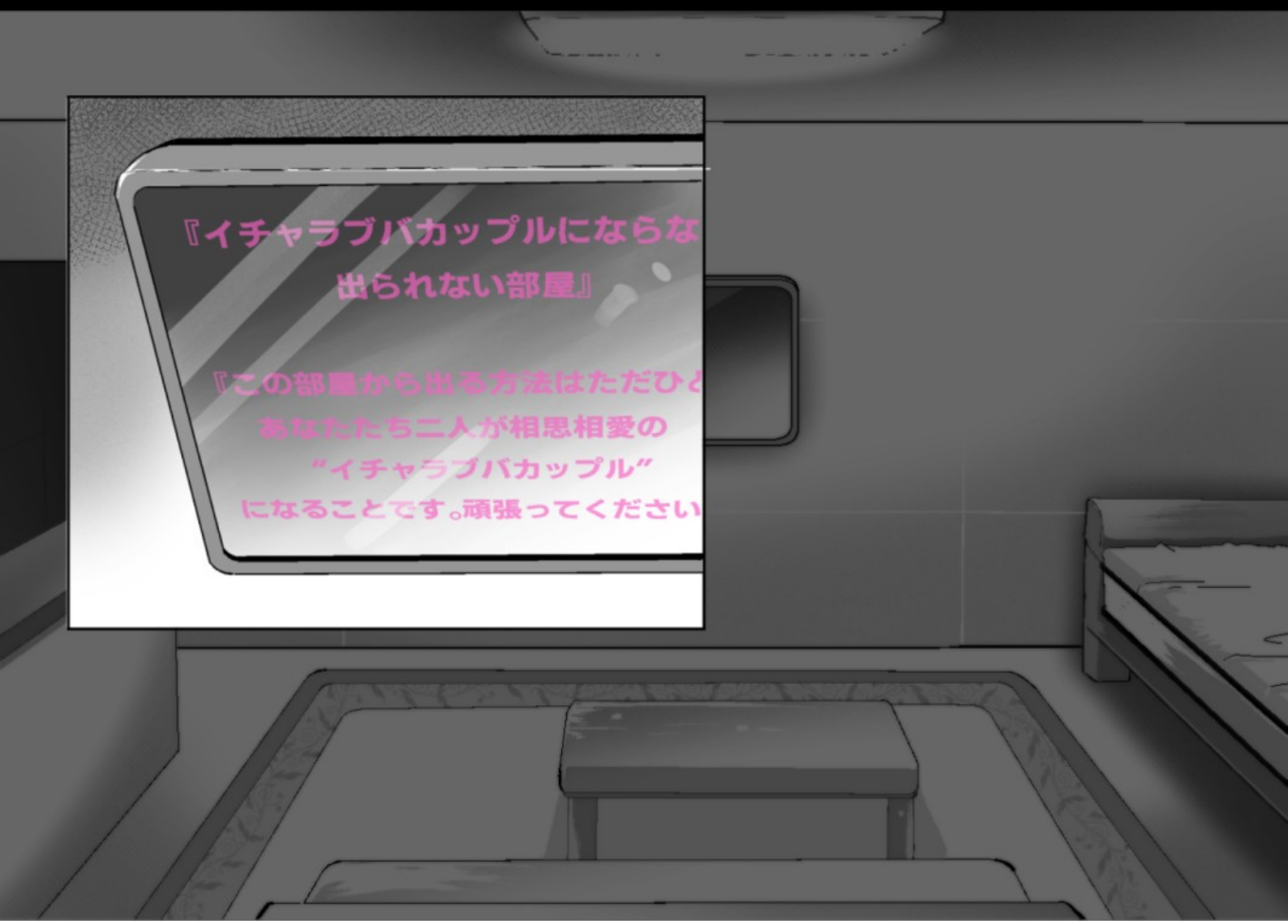


そうメッセージが表記された。
続けて追記される。

『〝イチャラブバカップル関係〟とは……』

・定義はありませんが、互いに心から相手を愛し合う状態になること
・心の繋がりであり、形としての繋がりでもあること

――――この二つの条件を満たすことです



表記されていたのは映像ではなくメッセージのみだった。

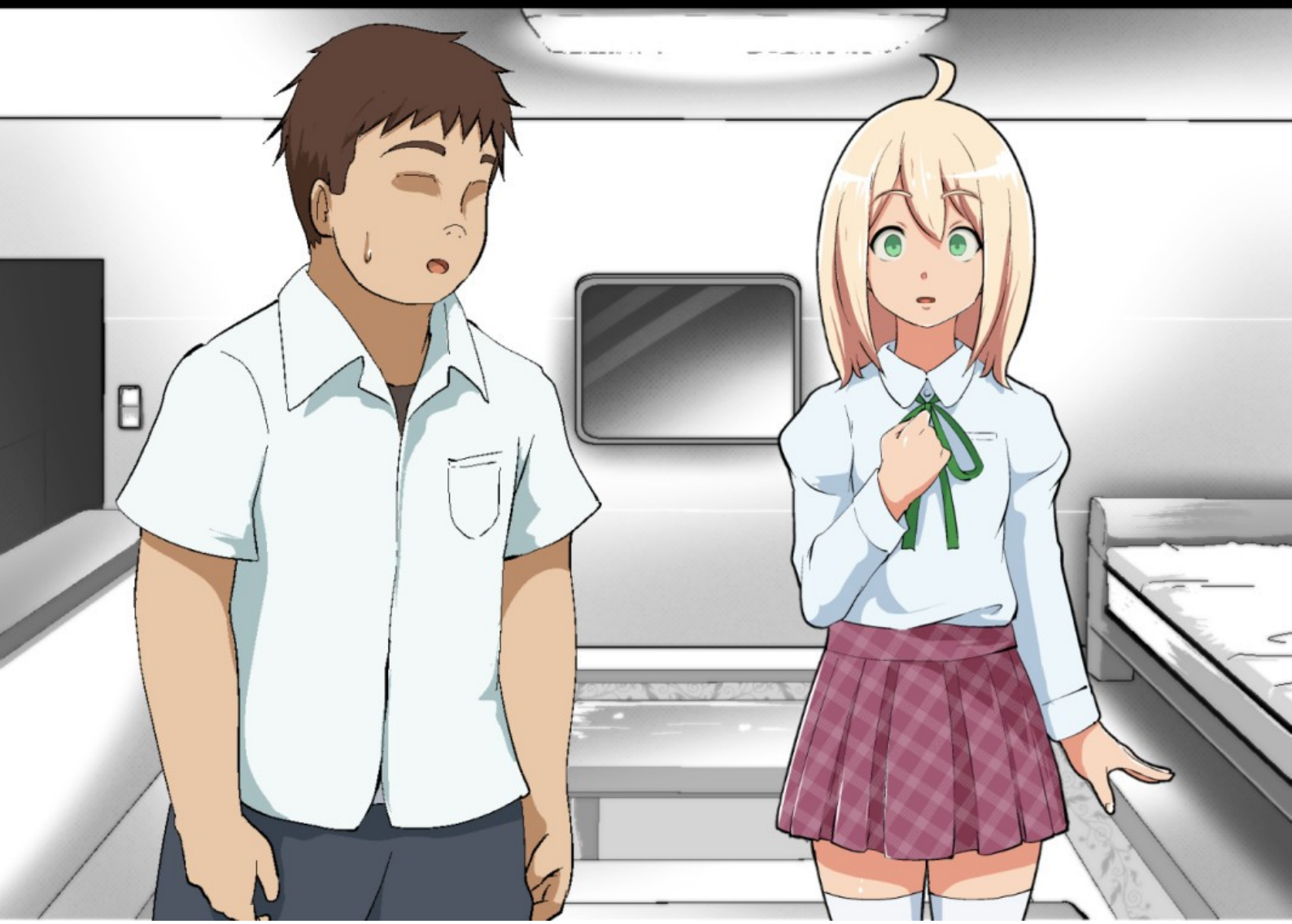
友馬はその内容を見て固まっている。

が、向こうから聞こえてきた声でハッと意識を戻す。

めったに声を上げることなんてない幼馴染の、控え目でありながら動揺しているのが明確に分かる声。

みひろ「イチャラブ…って、下川君…と？」

下川「…」



友馬はなんだかんだよー助に対して信頼は置いていた。

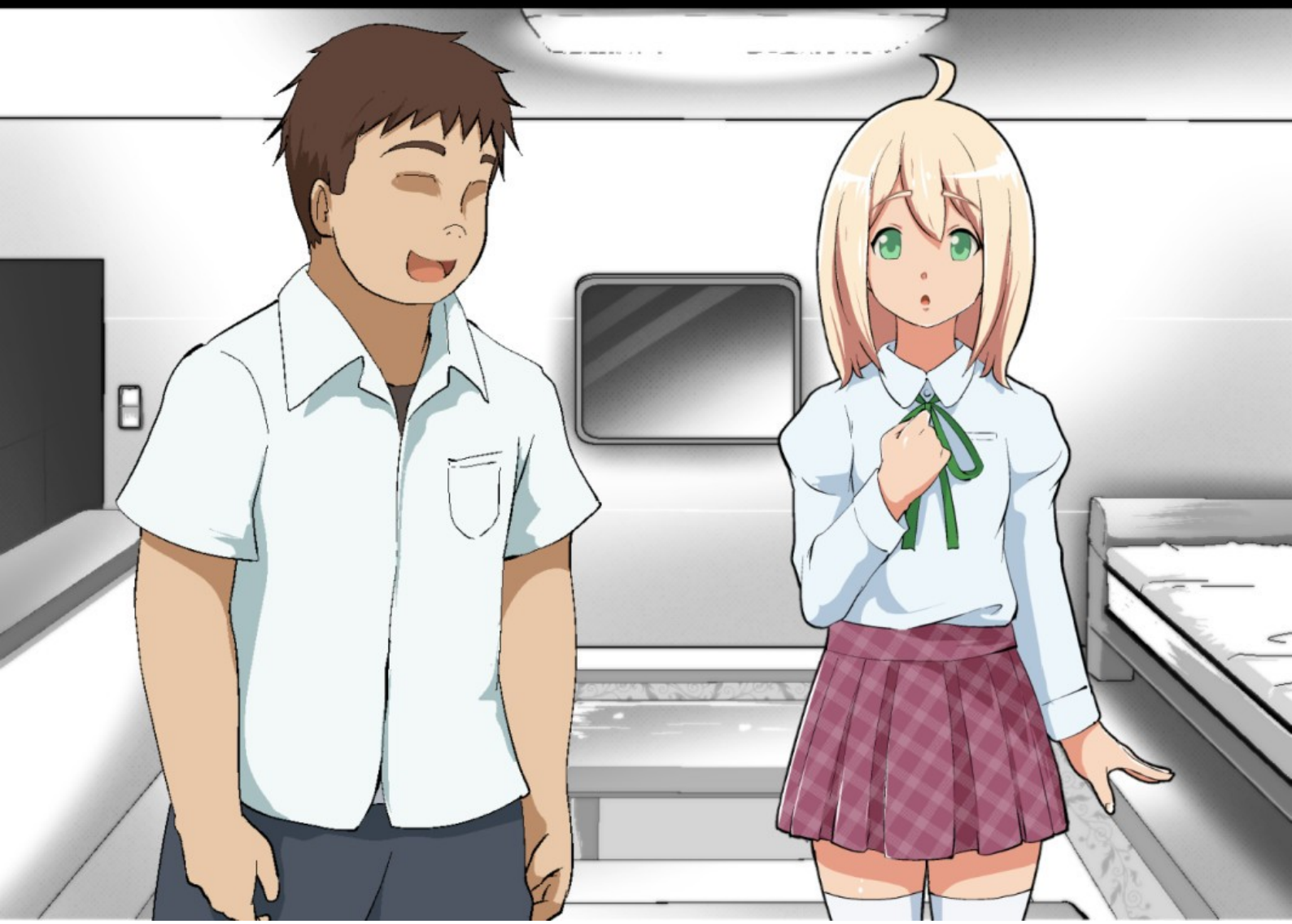
見えない壁をガンガン叩く。が、みひろはやはり一切気づかない。

よー助「・・・」

友馬「・・・！」

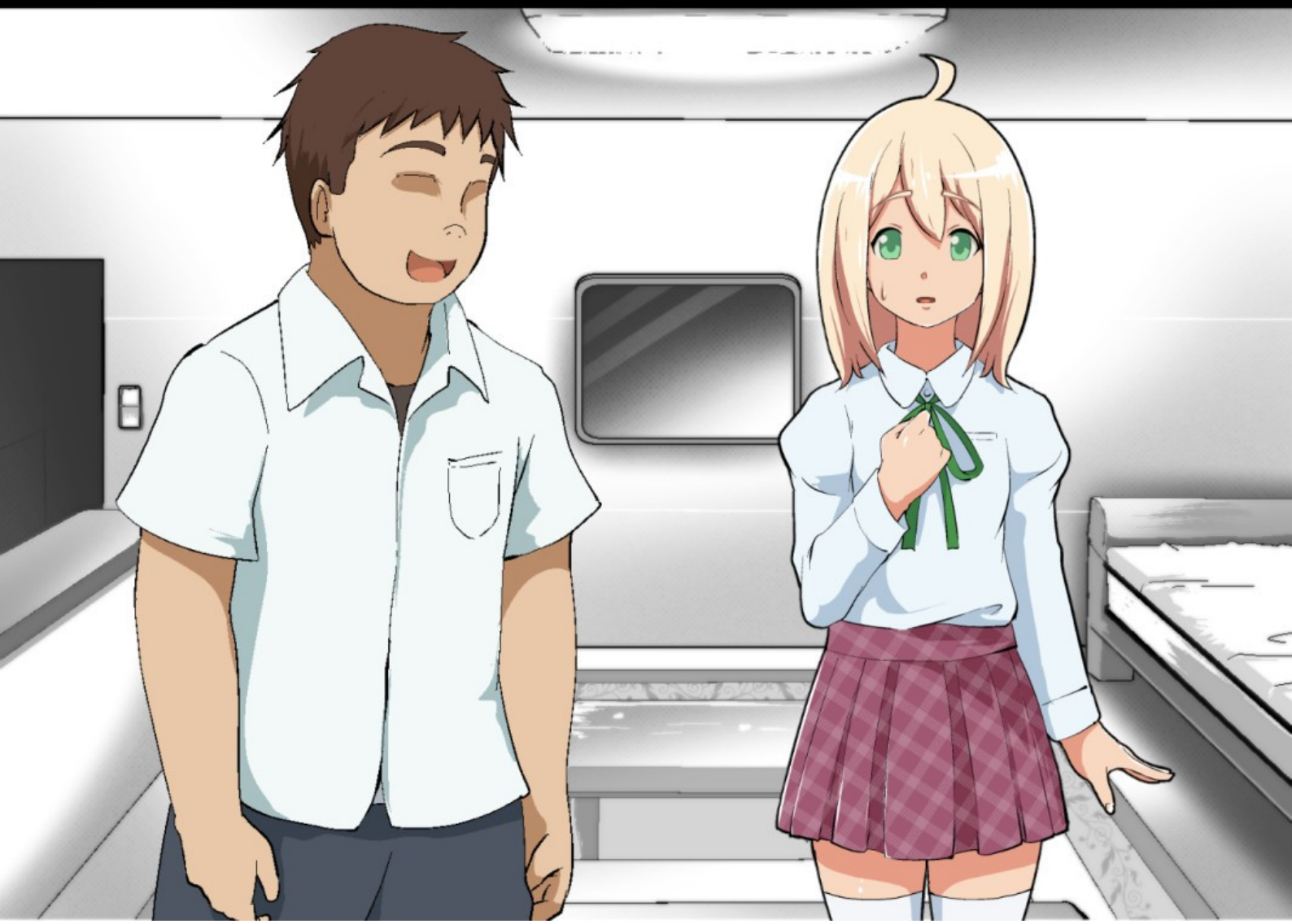
よー助が一瞬だけ小さくニヤッと笑ったような気がした・・・。

よー助「大丈夫だよ岩原、必ずここから無事に脱出しようなぁ・・・」



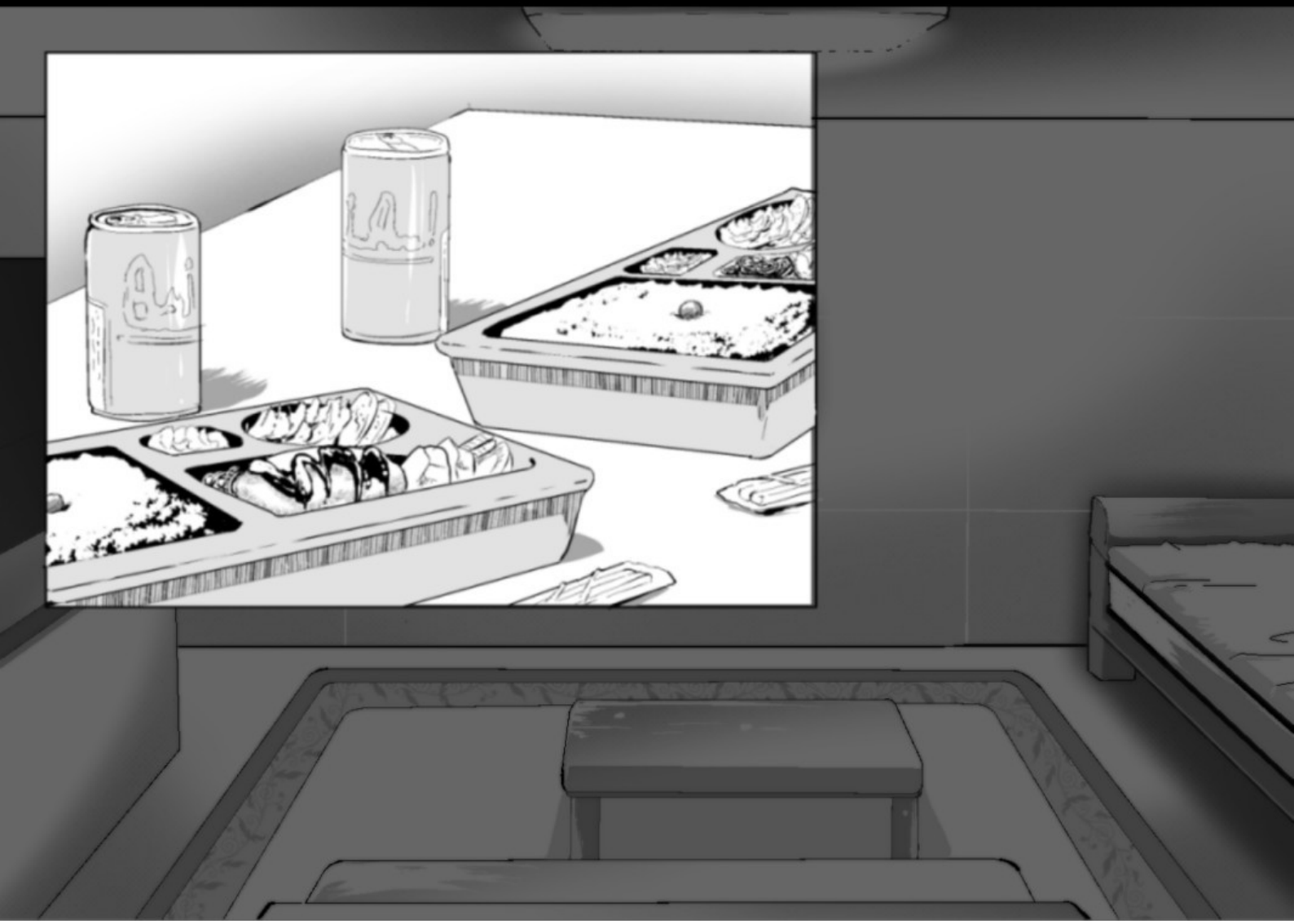
優しい幼馴染と工口馬鹿男子の疑似的な2人暮らし。

その様子をただ傍観するしかない友馬の奇妙な生活が始まった。



風呂、トイレ、食事、睡眠。
閉じ込められてはいるものの、人としての最低限の生活リズムを繰り返すと何となく落ち着きは出てくる。

よー助「岩原、そんな量で足りるの？」
みひろ「うん、下川くんこそよくそんな量食べられるね」
よー助「ははははｗ」
友馬「…いただきます」
二人が食べ始めるのと同じタイミングで友馬も食事につく。
意思疎通できなくてもなるべく同じ生活リズムをとる。



風呂もごく一般的なもので、ちゃんとお湯も出る。
洗面所には洗濯機が、ご親切に乾燥機まで置いてあったので風呂に入っている間や空いた時間に使っている。

みひろ「…下川君、私なんかがこんなこと言うのも自意識過剰みたいで恥ずかしいんだけど…」
よー助「あ、大丈夫！大丈夫!!絶対覗いたりとかしないから!!マジで信じて(笑)!!」
みひろ「う、うん！ごめんね失礼な事言って…！」



幼馴染の友馬から見てもみひろは十分に可愛いのだが、その自分の容姿を自覚しておらず必要以上に自身を卑下してしまう。

友馬「…信じてるぞ、下川」

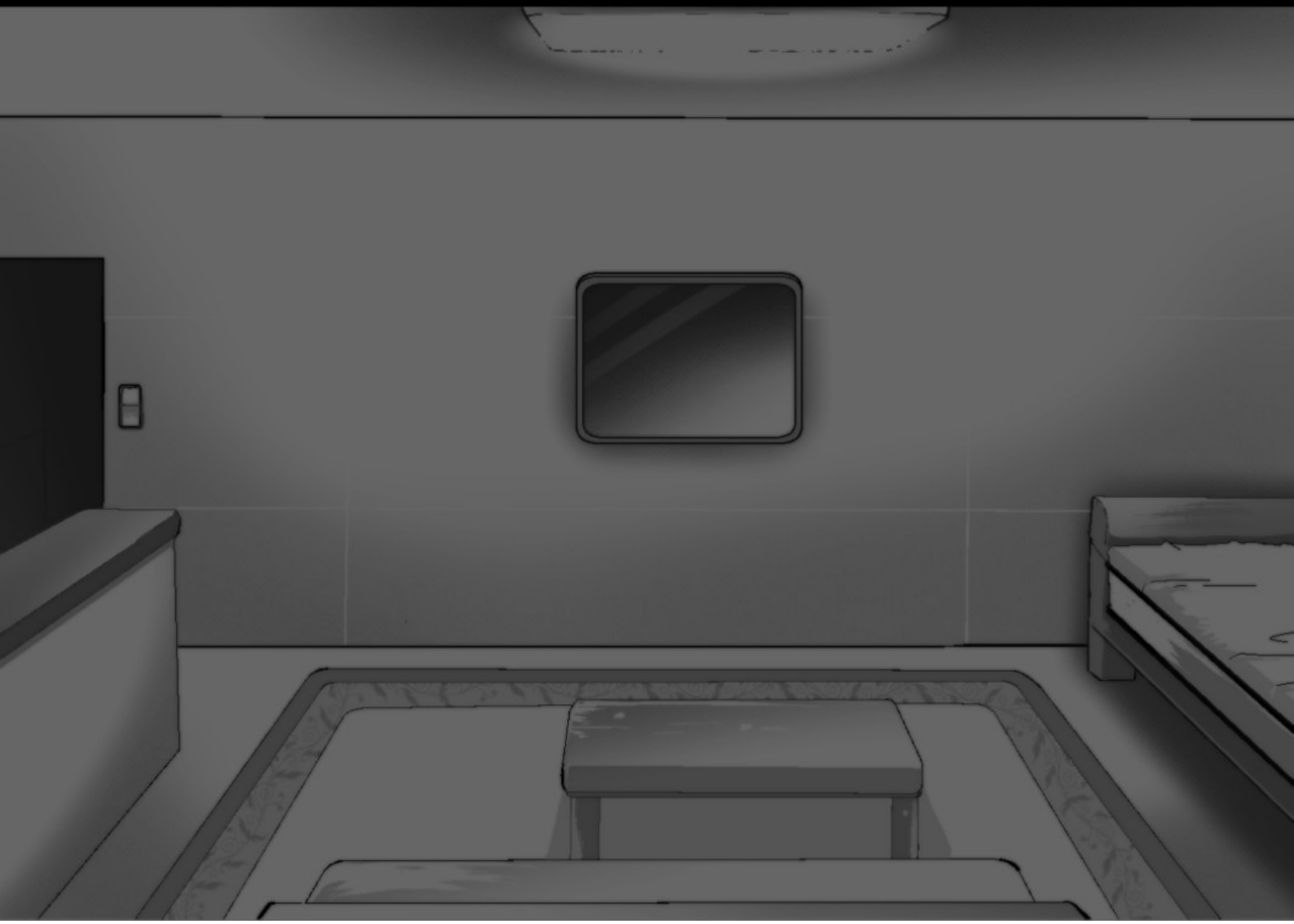
下川「～～♪」



寝る時はみひろがベッド、よー助がソファで寝ていた。

みひろは本当に自分がベッドを使ってしまっていいのかと何度も聞いていたが、よー助が「オレ敷布団派だから」「ベッドは逆に眠れないｗ」と言って押し気味にみひろに使わせた。

よー助なりに気を使ったのだろうか。



初めの頃は着の身のままで寝ていたが、探っていたら寝巻きを見つけた。

無地の特にこれと言ったデザイン性もないモノだったが、よー助はただでさえソファという寝心地の悪い場所で寝ていたので、せめて着心地くらいは快適でいたいのか抵抗することもなく着ていた。

友馬とみひろも続くように着替えた。

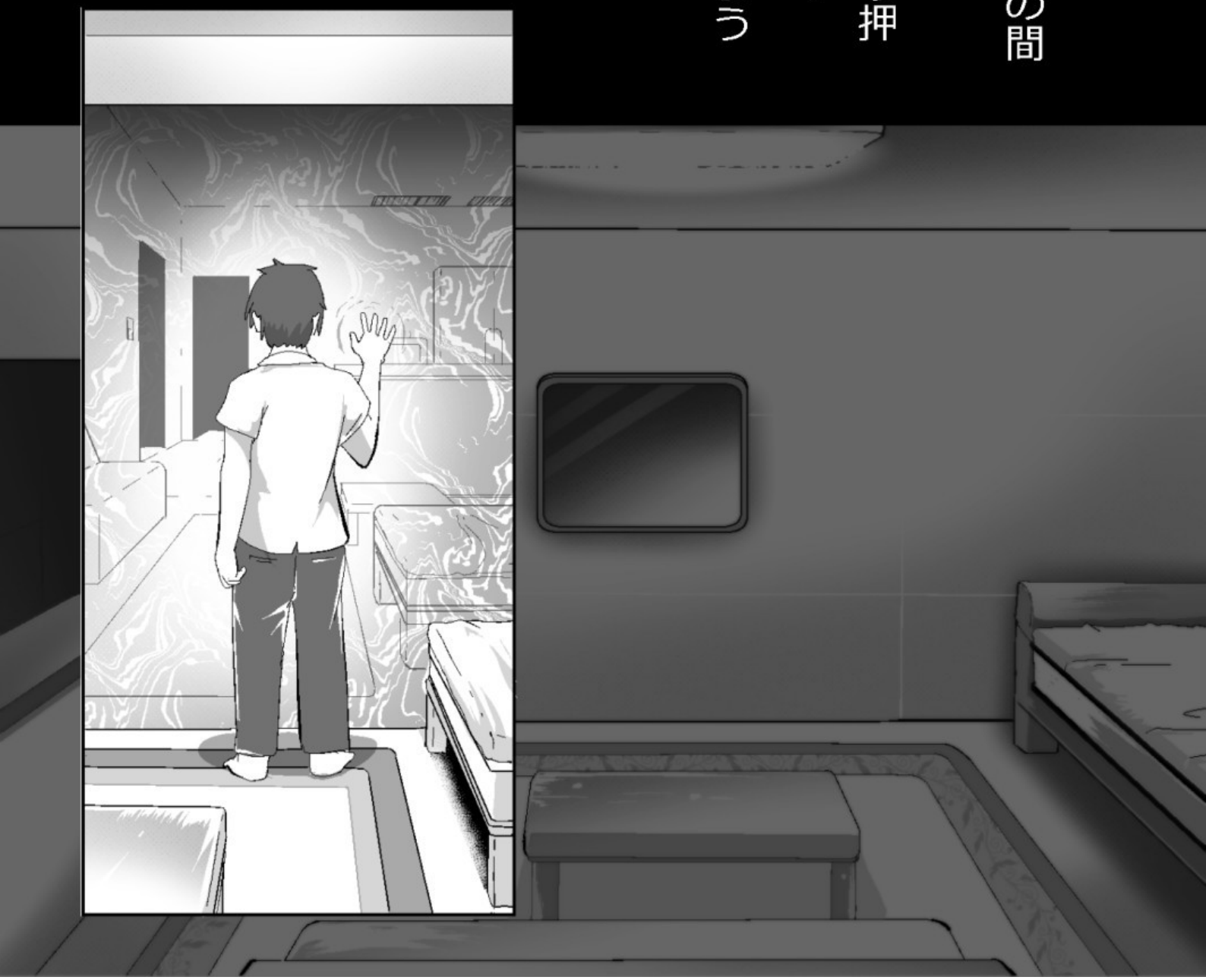
非現実的な状況下であってもリアルな生活感の繰り返しがそれとなく心をなだめていくのだった。



…が、友馬とみひろたちの部屋との間には変わらず、見えない壁がある。

壁一面を隅から隅まで小突いたり押したりしてみたが、何も変化はない。

ただひたすらに分厚いガラスのような壁でしかなかった。



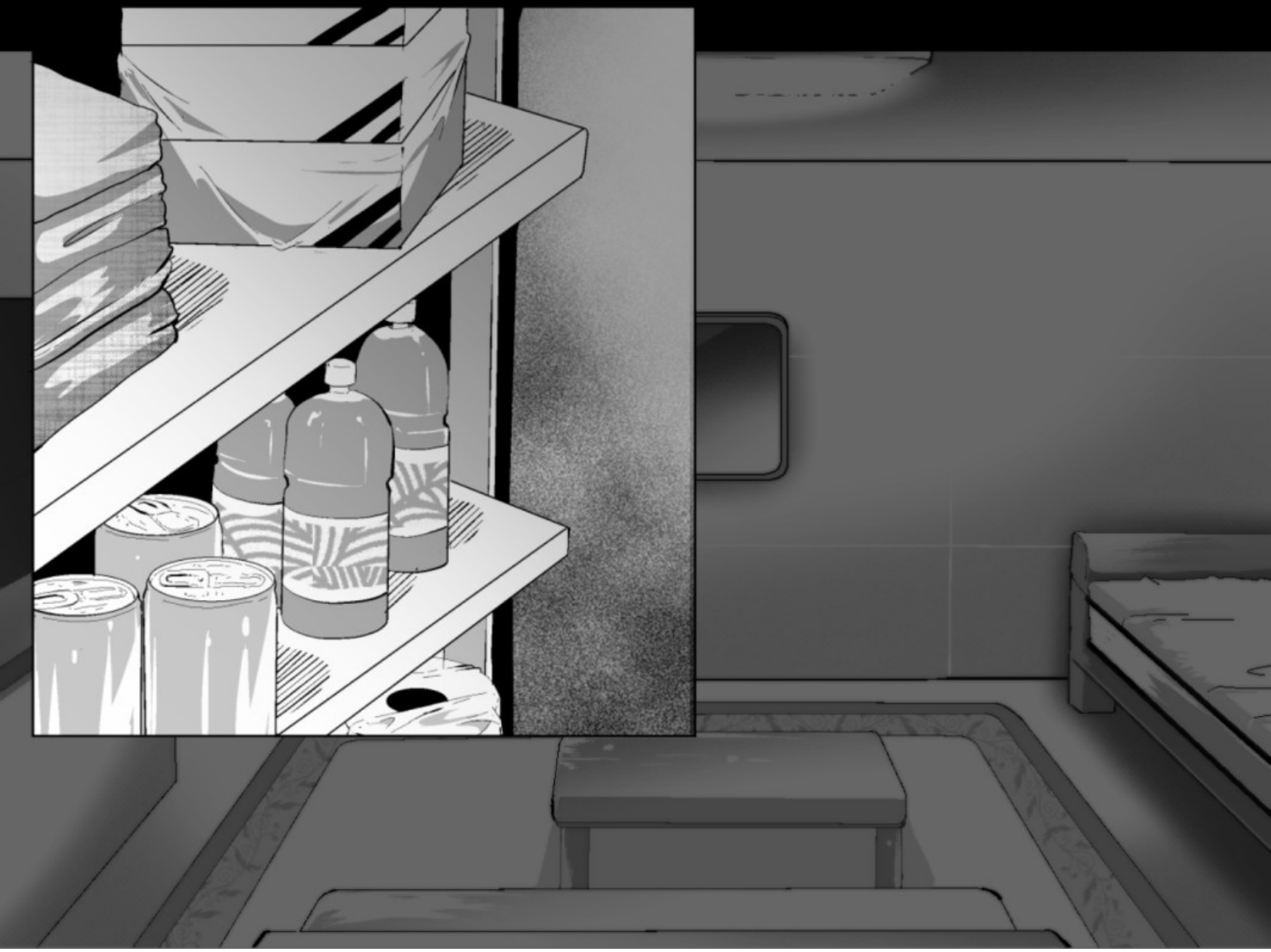
そして不思議なことは他にもあり、テイッシュや食料、飲料水などの消耗品はいくら消費しても時間が経つといつの間にか補充されていて、ゴミなどもいつの間にか消えている。

今さらだが空調も整っていて快適な室温だった。暑くもなく寒くもない。

娯楽と出口がないこと以外は不気味な程、生活環境が整い過ぎていた。

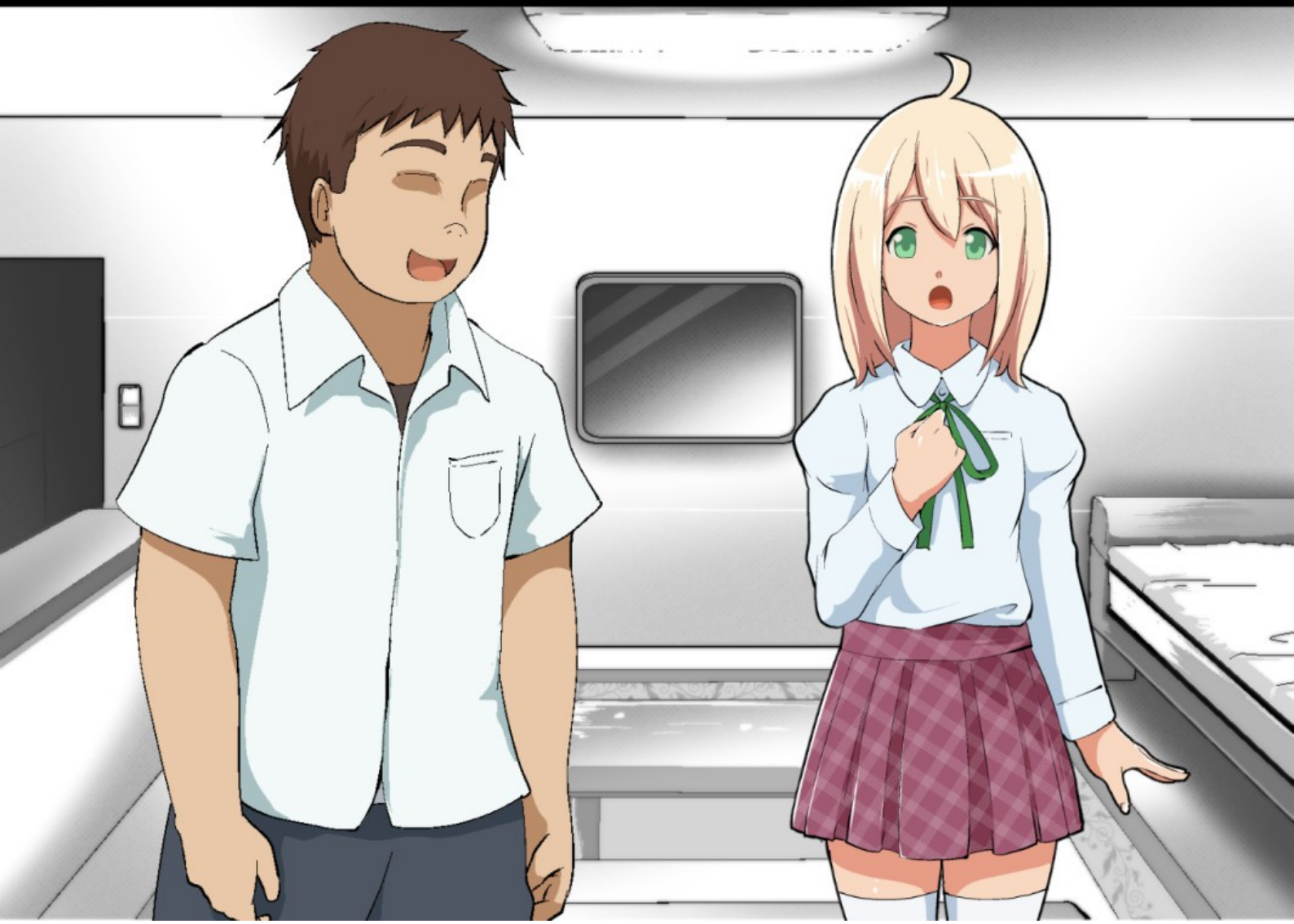
つまりは余裕がある。

だからこそ手持ち無沙汰に、することがないと感じてしまう。



みひろ「えー！本当に？」
よー助「3年内の範囲なら週刊○○の表紙飾ったアイドルの名前とスリーサイズ全員言えるｗ」

二人はとにかく会話していた。
話し相手さえいれば会話というコミュニケーションはできる。
密室での生活の中、そういった行為は大事だろう。
友馬も会話に参加は出来ないものの、二人のやり取りを聞いているだけで幾分気が紛れた。

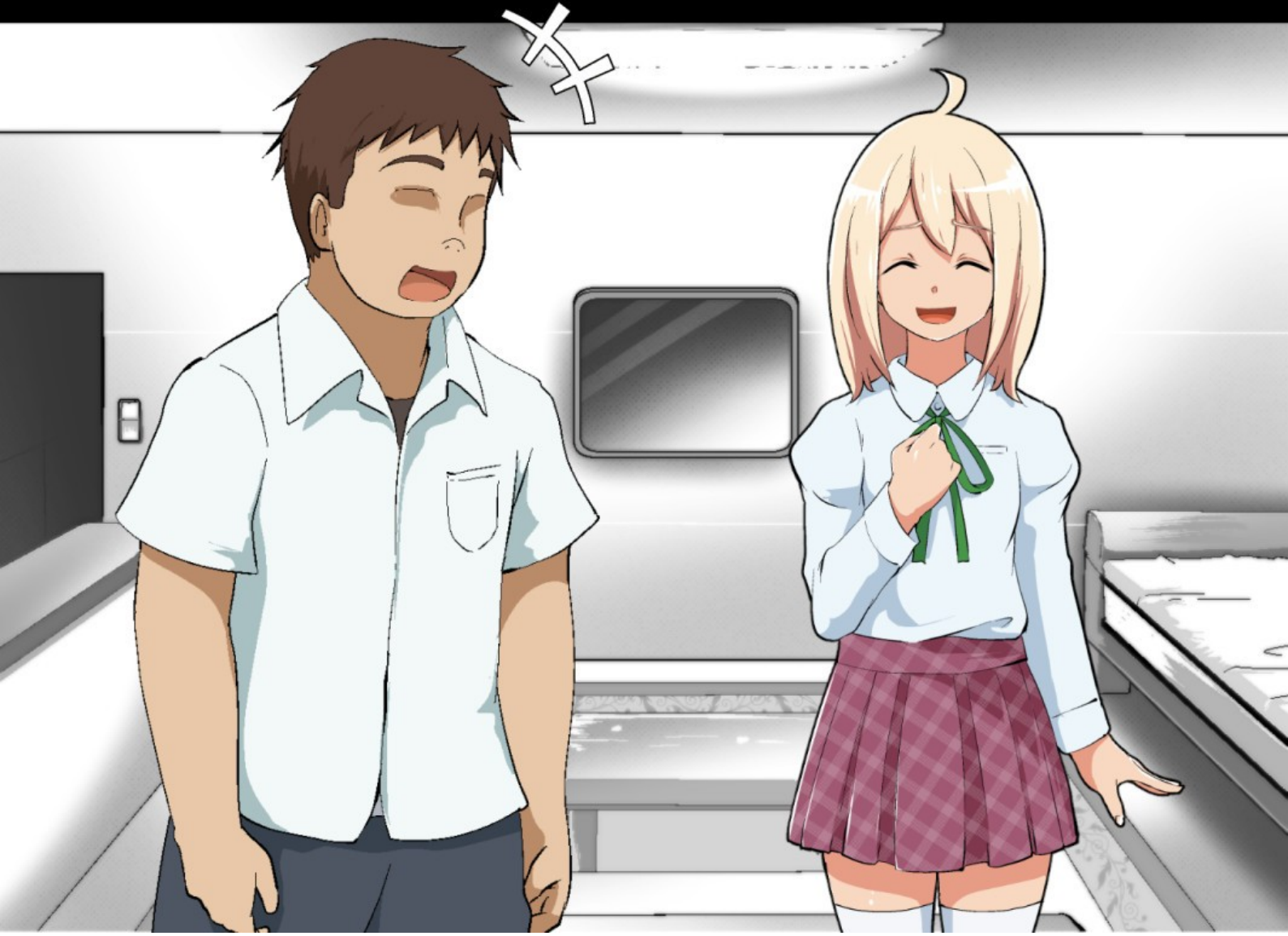


よー助「学年で一番胸あるのは確実に1組の中城だな」

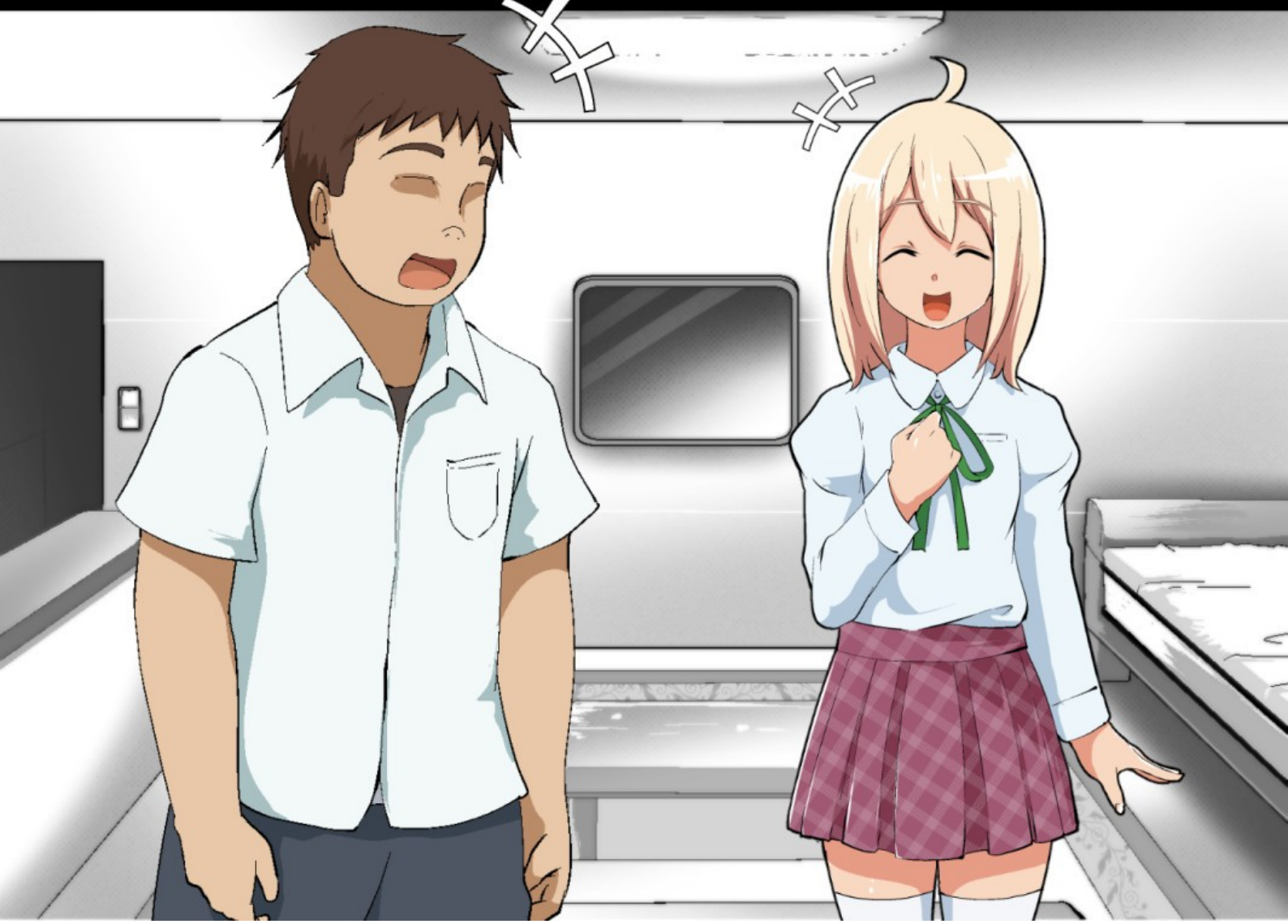
みひろ「も、もー！下川君またそういう話して…！」

よー助の話す話題は少し品がないというか、女子に話す様な内容ではないかもしれないが、みひろは結構楽しそうに聞いていた。

むしろこの状況ではそうしたバカらしいトークの方がいいのかもしれない。



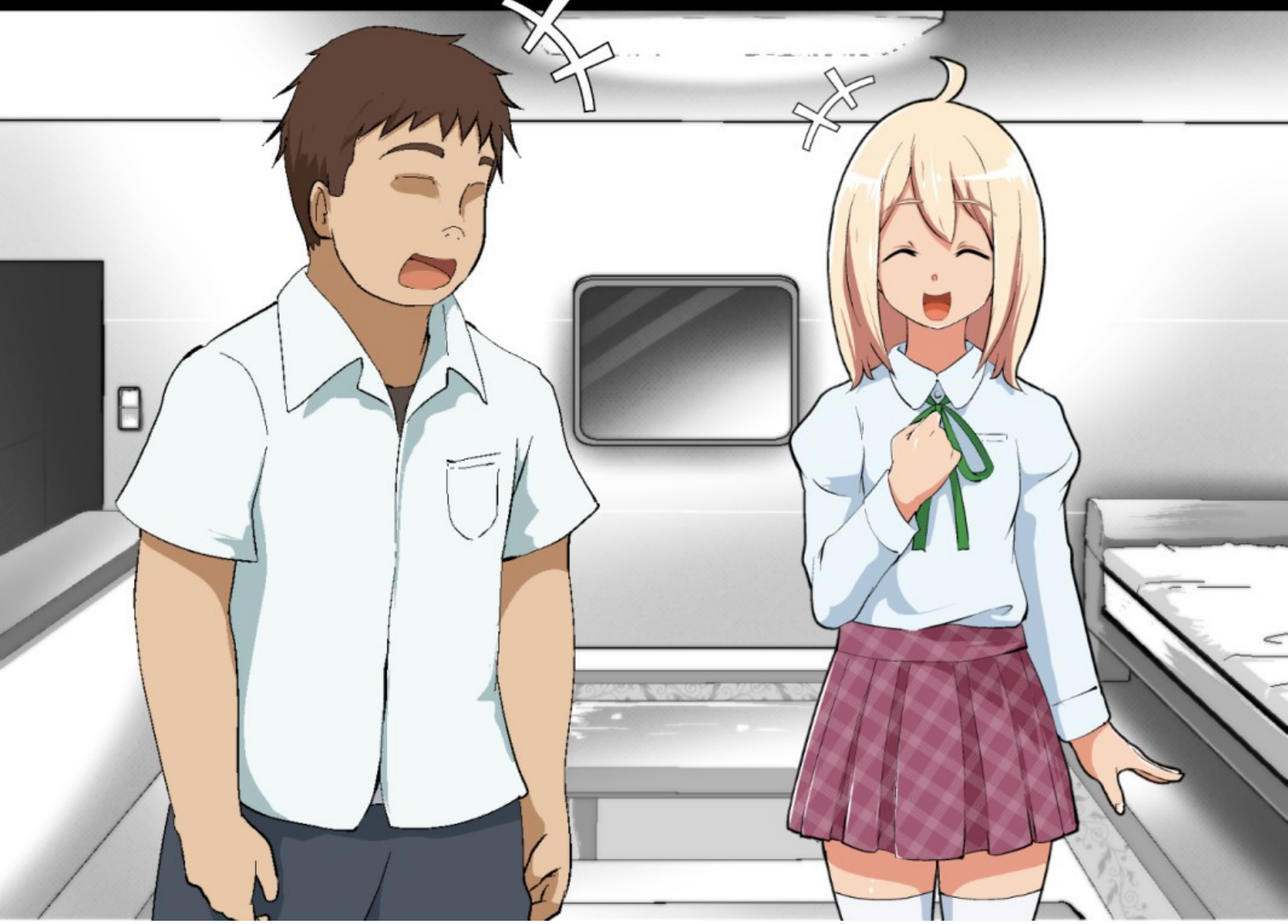
みひろ「…ねえ下川君」
よー助「ん？」
みひろ「正直ね…こんな場所で二人で生活しなきゃいけないなんて思ったときは…」
よー助「嫌だった？」
みひろ「……ん～っとね…その…」
よー助「絶対嫌だったじゃんその感じｗｗ」
みひろ「いや！違うよ！その…ふふっ(笑)」
よー助「おいｗｗｗ」
みひろ「(笑)」



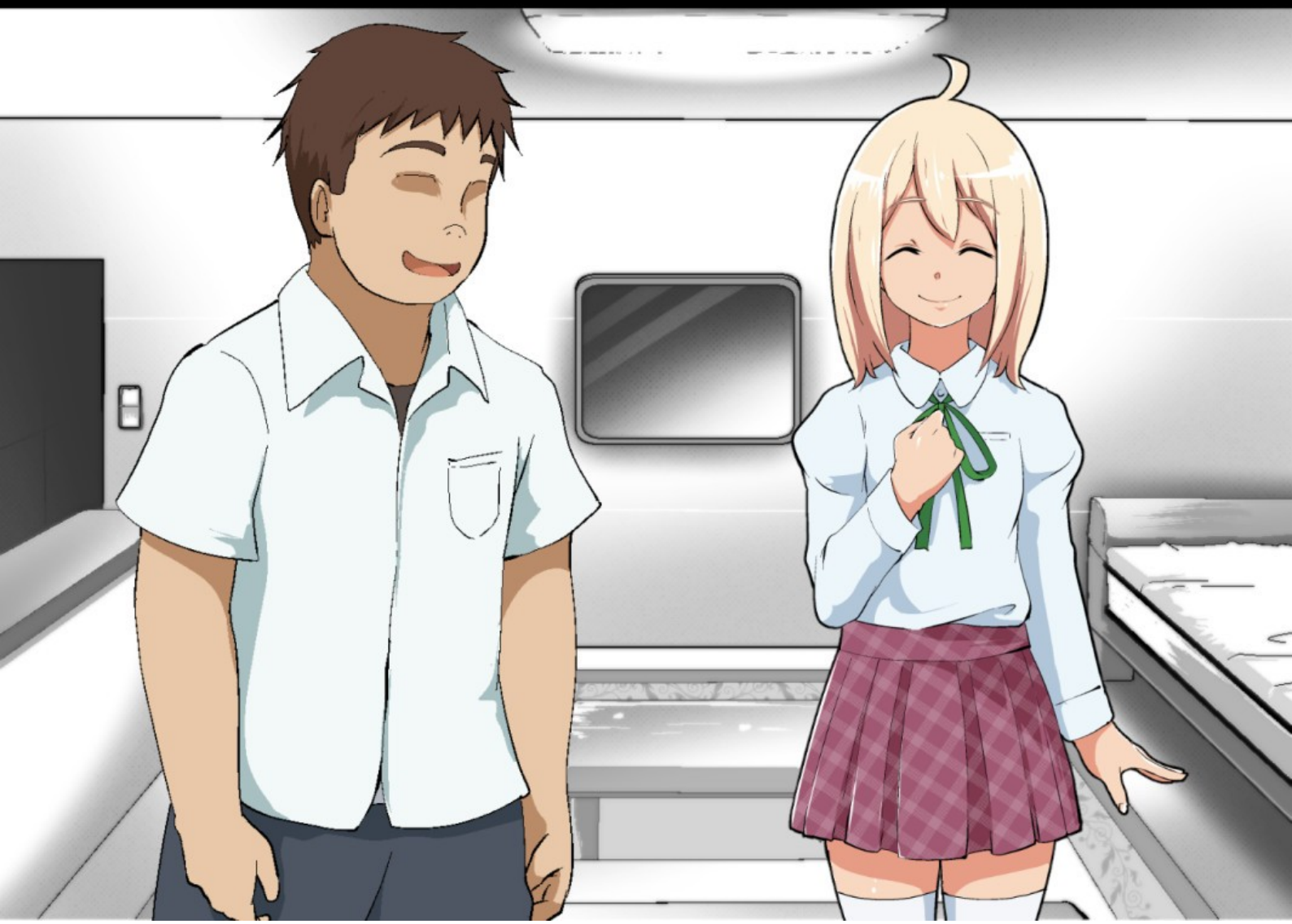
壁越しに見ていても二人はかなり距離が縮まっていることが分かった。

こんな環境であることも影響しているのだろうが、みひろは苦手だと思っていた下系の話題でもちょくちょくツッコミを入れながら聞くようになっていた。

よー助のこともてっきりみひろをそういう目でしか見ていないものだと思っていたが、自ら面白おかしく軽快なやり取りをして空気を軽くしていた。



よー助「…みひろ」
みひろ・友馬「！」
よー助「…ちゃん、って呼んでいい？」
「俺のことも名前で呼んでいいから」
みひろ「…」
「うん！いいよ」
みひろ「よー助くん♪」
よー助「へへｗｗｗみひろちゃーんｗ」

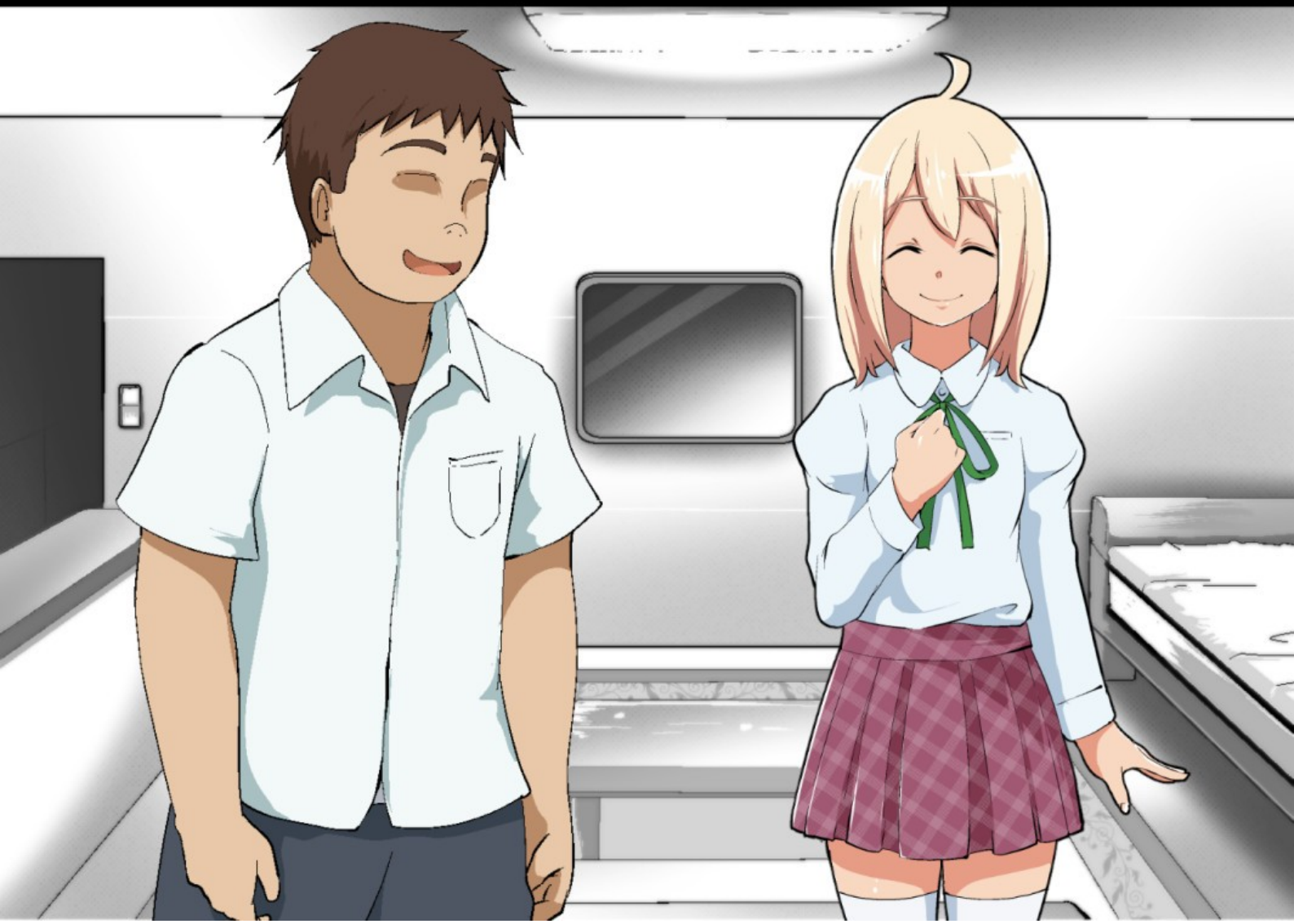


友馬「…」

…せっかく少しだけ上がったよー助の評価がまた少し下がった。

ちょっとだけ友馬はモヤっとしたが、こうしてお互いに信頼を築き上げていくのは大切な事だろう。

…それから数日が経ったある時、疑似的な共同生活を送る二人とその様子を傍観する幼馴染の関係は大きく変わることになった。



みひろ「よー助くんご飯一緒に温めちゃうけど、今日は何食べる？」

よー助「…」

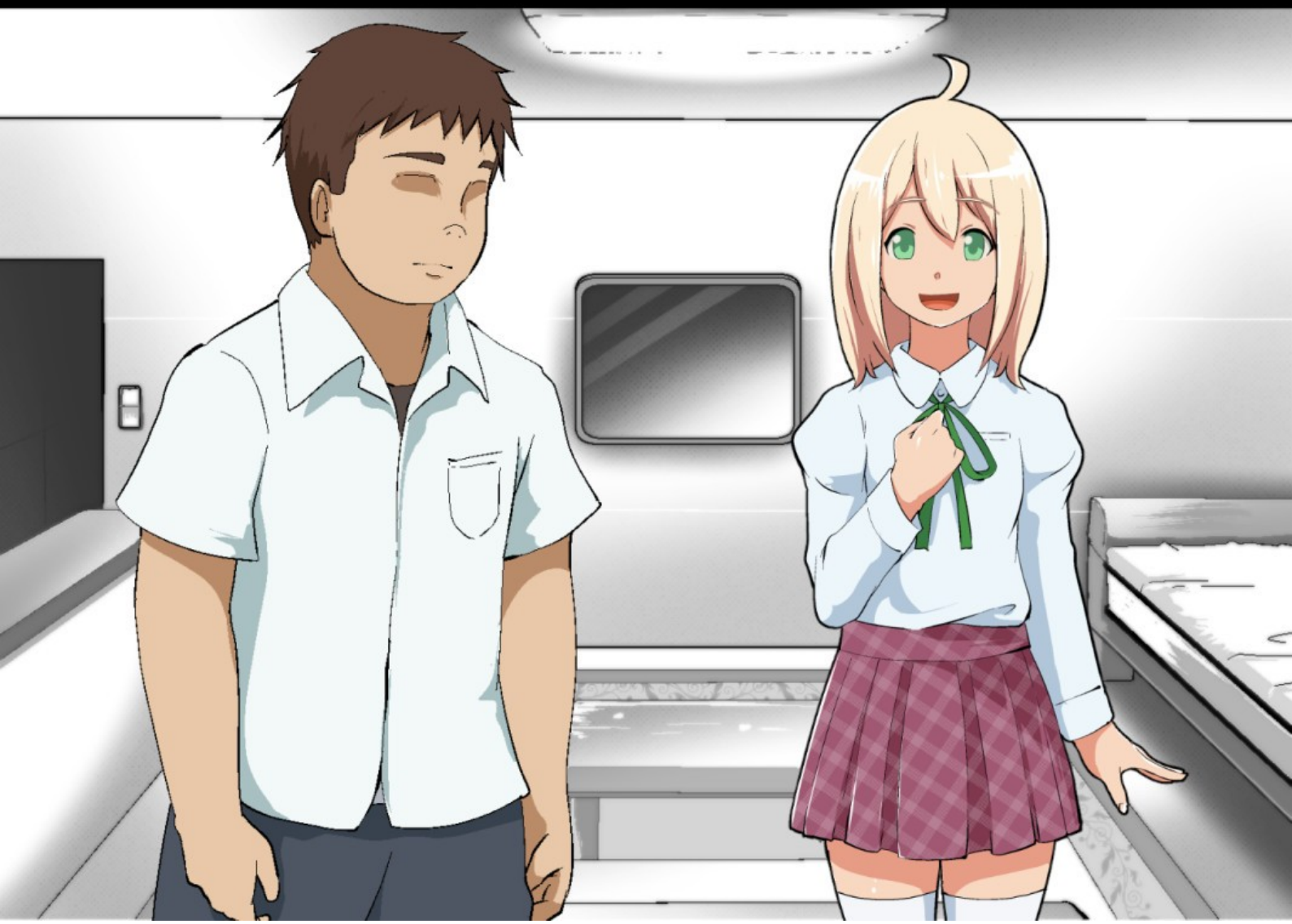
みひろ「？よー助くん…？」

友馬「…？」

昼の時間帯にみひろが食事の用意をしていた。

よー助に何を食べるか尋ねたが上の空だったのか返答がない。

その様子を見えない壁越しに見ていた友馬も不思議に思い壁に近寄る。



よー助は少し心配そうに寄ってきたみひろの両肩をいきなり掴む。
みひろ本人も、見ていた友馬も驚いた。
よー助「…」
みひろ「…？ど、どうしたのよー助くん？もしかして具合悪いのかな…？」
友馬「…？」
返事がない。
みひろ「…ま、またなんか変な事言う気でしょ～！クラスの女の子の○○なところ～！とか…」
よー助「…」
みひろ「…あはは」



空気に耐え切れず、みひろの方から茶化す様なことを言い出した。

が、それでもよー助の様子は変わらない。

友馬は胸の奥の方で何かざわつき出したのを感じた。

よー助「…具合悪いって言えば確かにそんな感じかな」

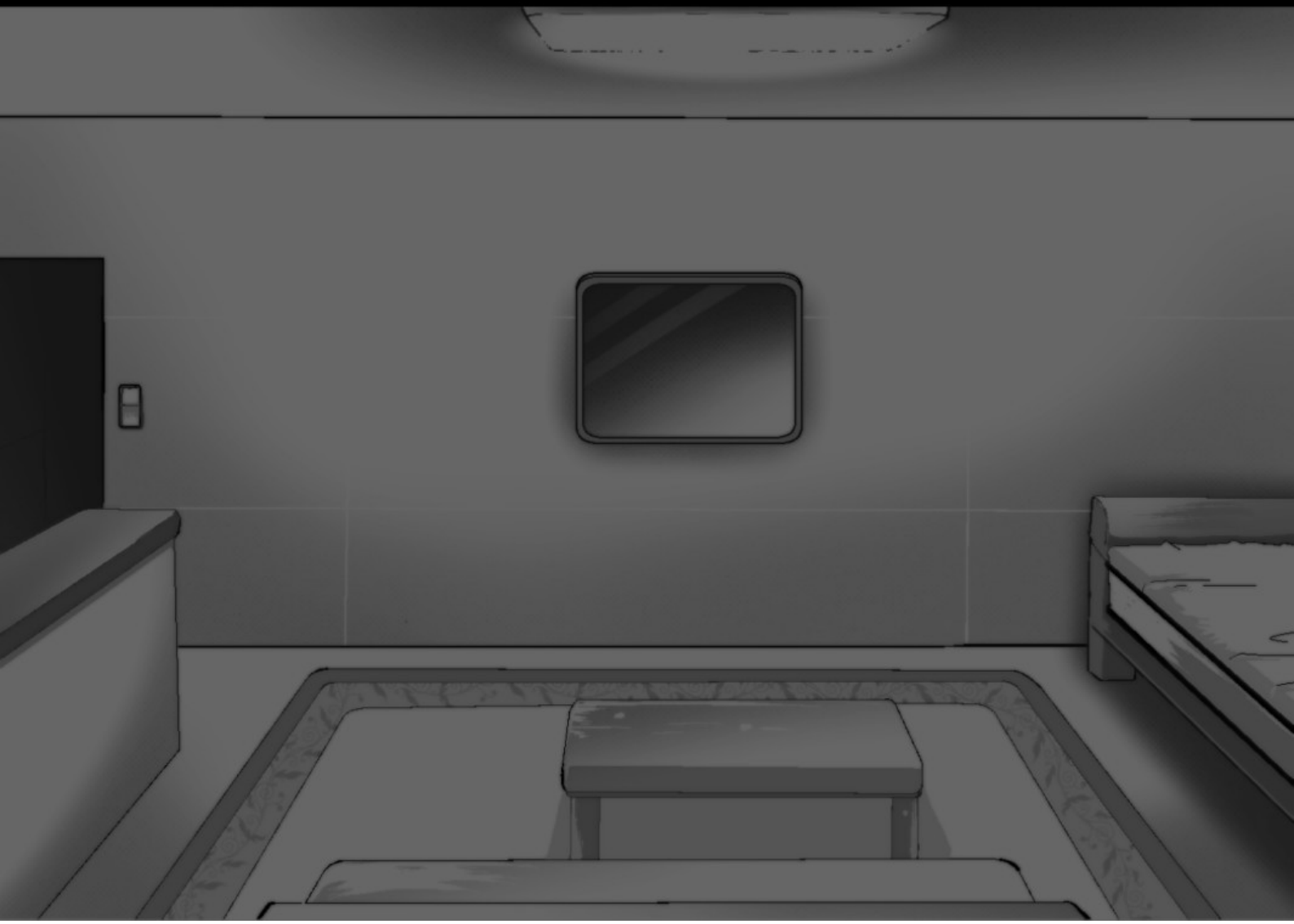
みひろ「え？…っ！」

友馬「!?」

ようやく口を開きボソッと何か言ったと思ったら、みひろの両肩に置いた手をそのまま背中に回して、ぎゅうっと抱き寄せた。



みひろ「え？え!?…なに？」
訳が分からず見るからに動揺しているみひろ。
余程軽いのかそのままひょいと持ち上げられた。
されるがままの形でベッドに近づいていく。
友馬「～～～！」
友馬は見えない壁をドンドン叩く。
みひろ！と幼馴染の名前を何度も連呼する。
同時によー助のことも同じように何度も呼んだ。



しかし、それはみひろに向けたモノとは真逆の感情を含んでいる。

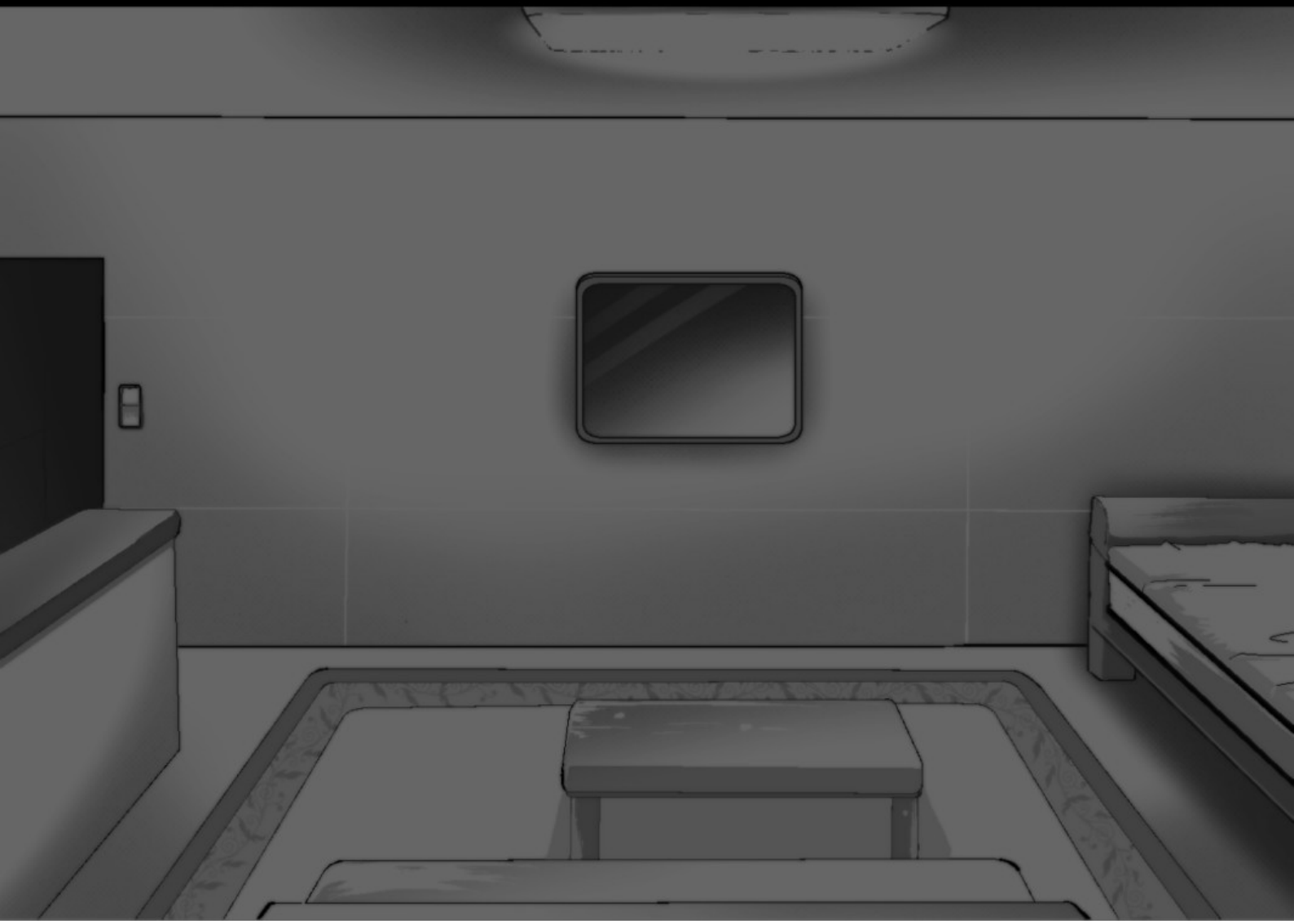
よー助への人として、同級生としての評価がすべて水に流れた。

…友達になれるかもしれないという思いもすべて。

よー助が何をするのか、友馬にはもう明白だった。

確実にそうなる。絶対に。

むしろ、この数日間耐え抜いていたことの方がすごいと、変な考え方をしてしまった。



みひろはベッドに放り投げられる形で横になっている。

みひろ「…よ、よー助、くん」

よー助「…みひろちゃん」

みひろ「い、いや…ダメだよ……やめて」

みひろ本人もよー助が今どんな感情でいるのか、これから何をされるのかを理解した。



みひろ「～～～～！～～～っ!!」

よー助「～～～」

二人が何やら喋っているが友馬の耳にはよく聞こえていなかった。

意識がボウっとしている。

どうもしようがない。

逃げられない密室。見えない壁。

そこにいるのに干渉できない。

守ってやることができない。



友馬「…」

もしここを出られたら、その時はみひろを強く抱きしめる。

傷ついた心が癒えるまでずっと。

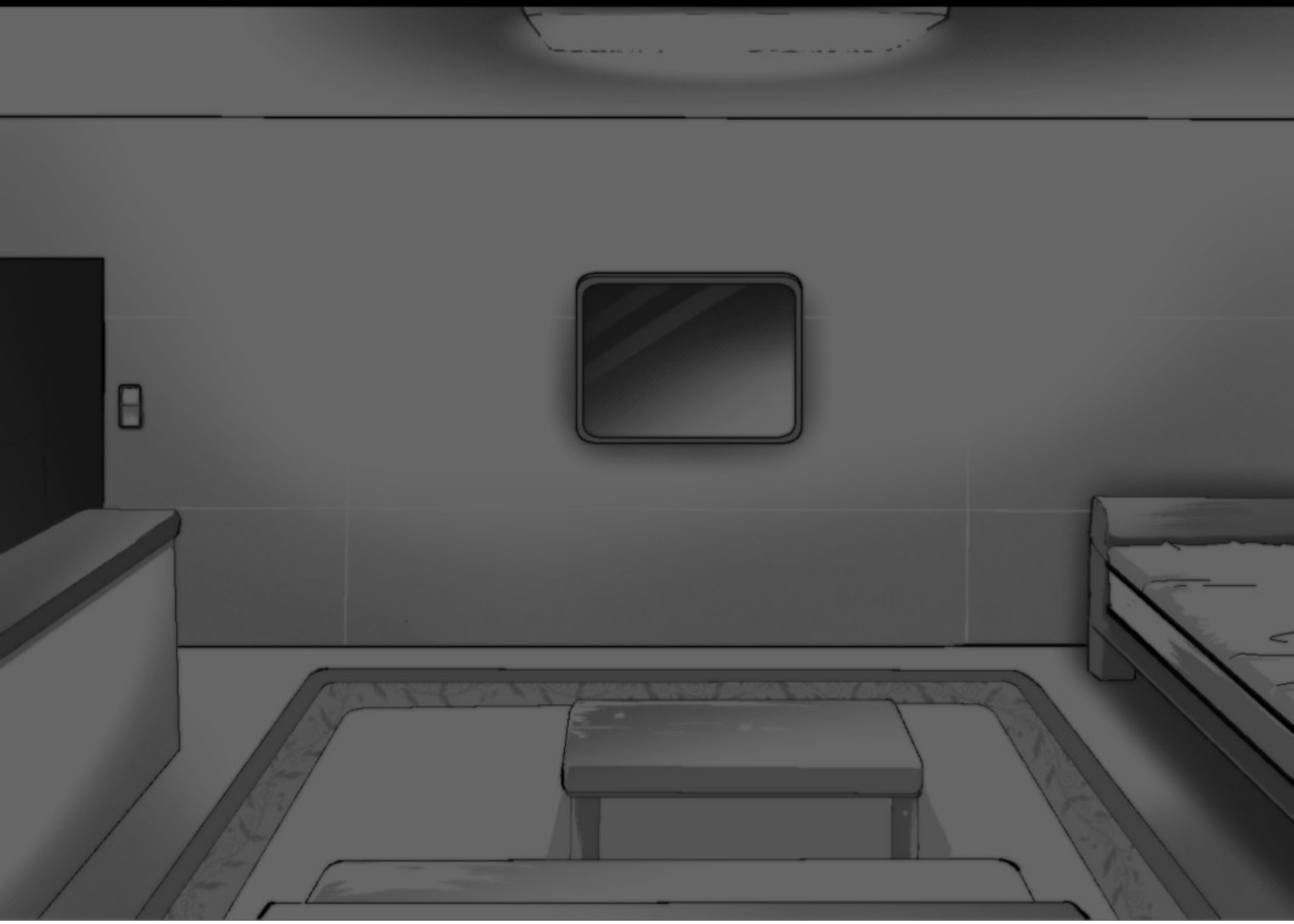
友馬は頭の中で、もうそんな後のことを思っていた。

そんなことしかできないのだった。

決して現実逃避ではない…と自分に何度も言い聞かせた。

みひろ「……友馬くん…っ」

よー助「…」



「ごめん!!」

みひろ・友馬「…え」

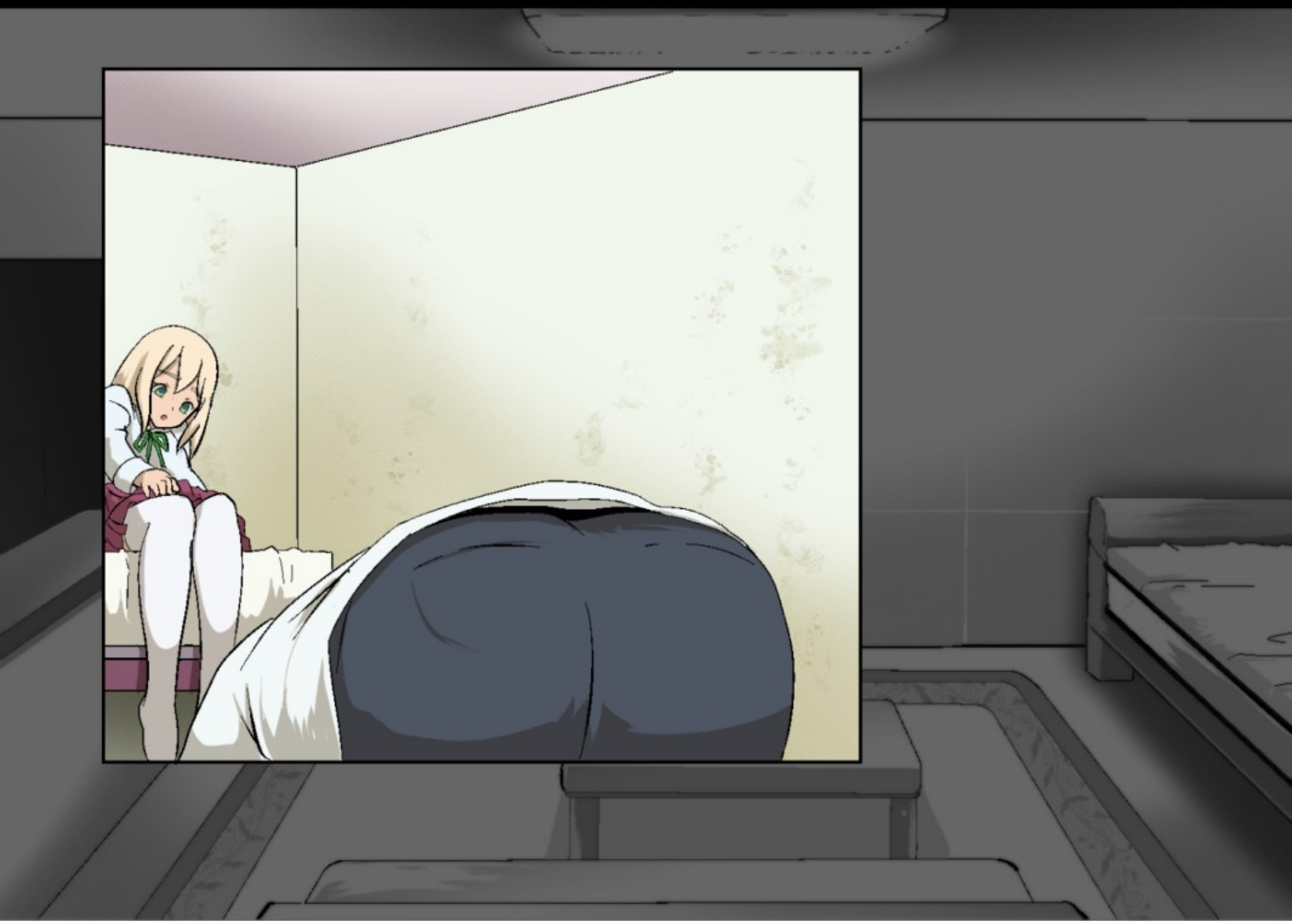
よー助「…ごめん!!」

よー助がもう一度同じ言葉を言い放つ。

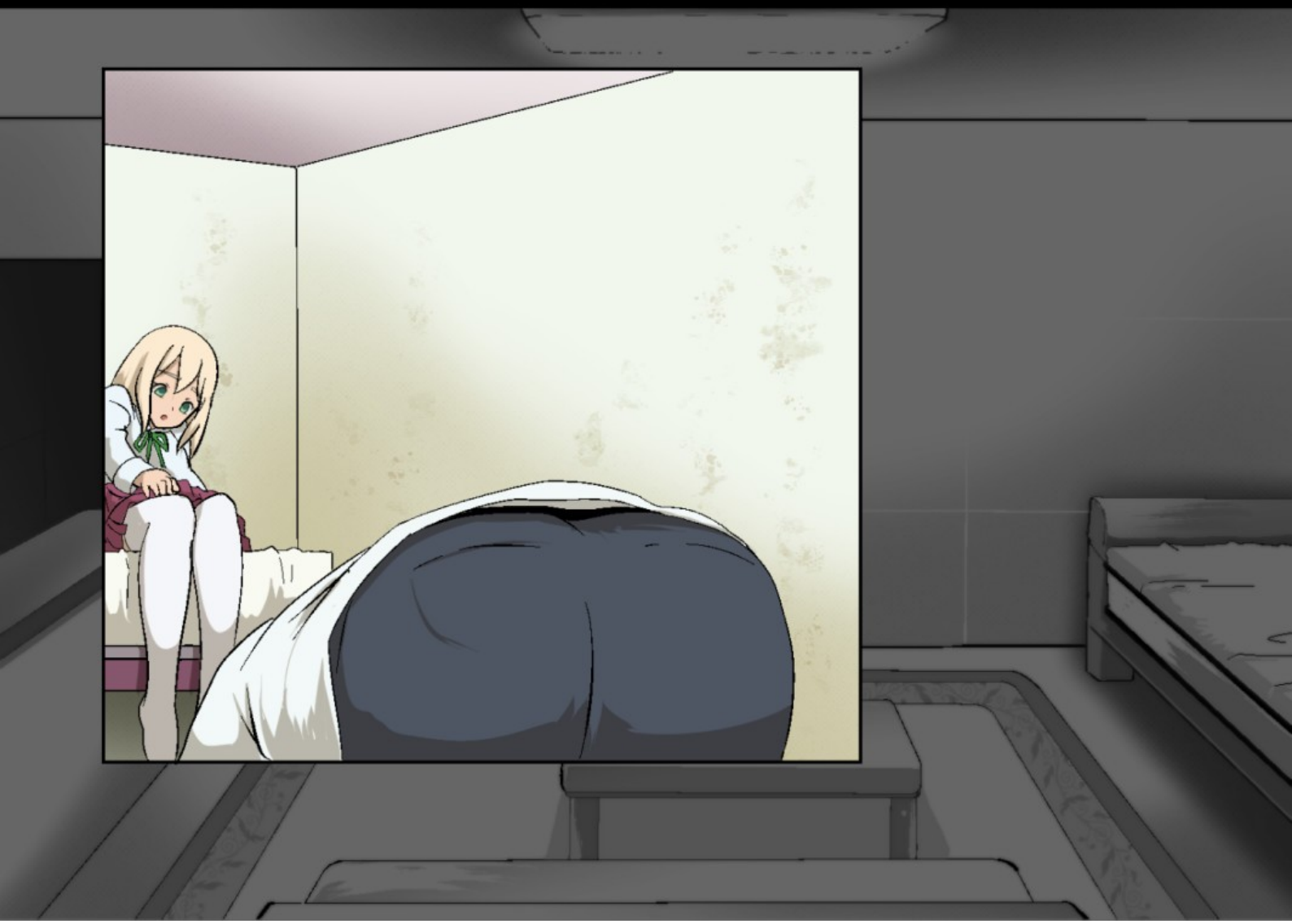
確かな言葉でごめんと言った。

よー助「…」

思いっきり土下座している。



みひろも友馬も事態がまったく呑みこめない。
しかしそのよー助の声にはしっかり精気がこもっていた気がした。
みひろはベッドから体を起こす。
みひろ「よ、よー助くん…？とりあえず頭上げて…ね？」
そう言ったがよー助は頭を下げたままだ。
よー助はその状態で思いをみひろに告げた。



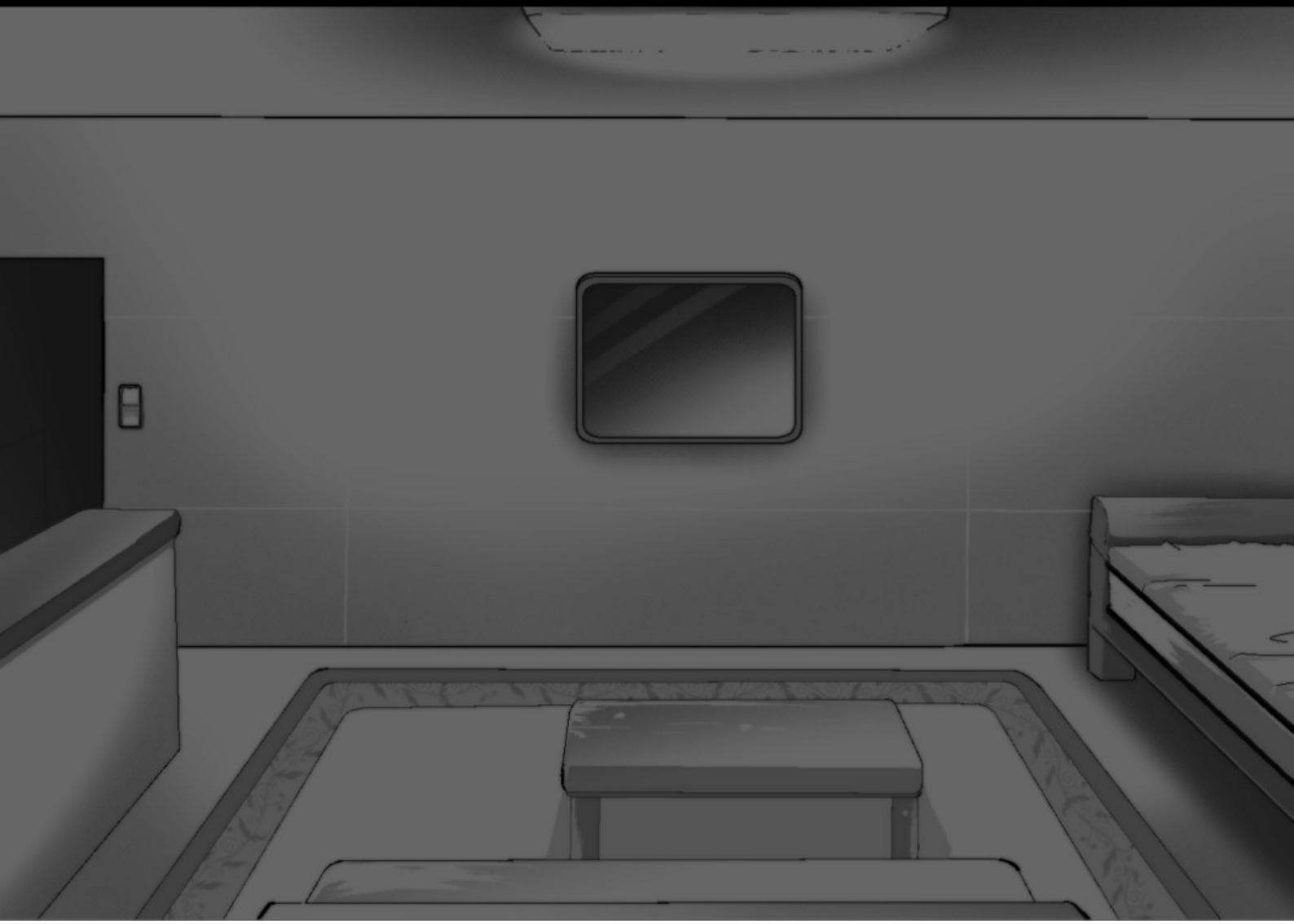
「こんな密室でみひろちゃんみたいな可愛い子と一緒にいたらどうしてもそういう気になってしまう」

「一緒に過ごすうちにみひろちゃんは本当に優しい女子なんだと思った。そんな子に向けてはいけない感情を抱いてしまう」

よー助「…なんとかギリギリ思いとどまれたけど…俺、最低なことしようとしてた…本当にごめん！」

よー助は床に頭を擦り付ける。

みひろはベッドから降りて、よー助の前で膝を下ろす。



みひろ「…よー助くん、思いとどまってくれてありがとう」

よー助「…」

みひろ「さっきは本当に不安だったけど、今は嬉しい気持ちでいっぱいだよ」

「よー助くんがこれはいけない事なんだって自分で気づいてくれたのが、私本当に嬉しいんだ」

よー助「み、みひろちゃん…」



よー助「ごめん…俺、こんなやつで！」
みひろ「大丈夫大丈夫♪結局こうやって何もなかったんだから♪」

みひろはニコッと笑いかける。
もうその表情に不安や恐怖といった感情はなかった。
友馬「…」
しかし、友馬は何か引っかかっていた。

みひろ「それに…よく考えたらむしろよく我慢してたというか…」
よー助「え？」



みひろ「…よー助くんが…エ、エッチなのは分かってることだったし…(笑)」

よー助「…お、おーい！」

「その通りだけど…ｗｗ！」

みひろ「…ふふっ♪」

よー助がいつものようなトーンでコミカルにツッコむ。

空気が軽くなったのが分かった。



みひろ「…ねえ、よー助くん」
よー助「ん？」
みひろ「男の子がどうしてもそういう気持ちを自分で抑えられなくなっちゃうのってね、友達の話なんか聞いてても何となく分かるの…」
よー助「…まあ、生理現象というか」
みひろ「…だからね、その…」

友馬「…あ！」



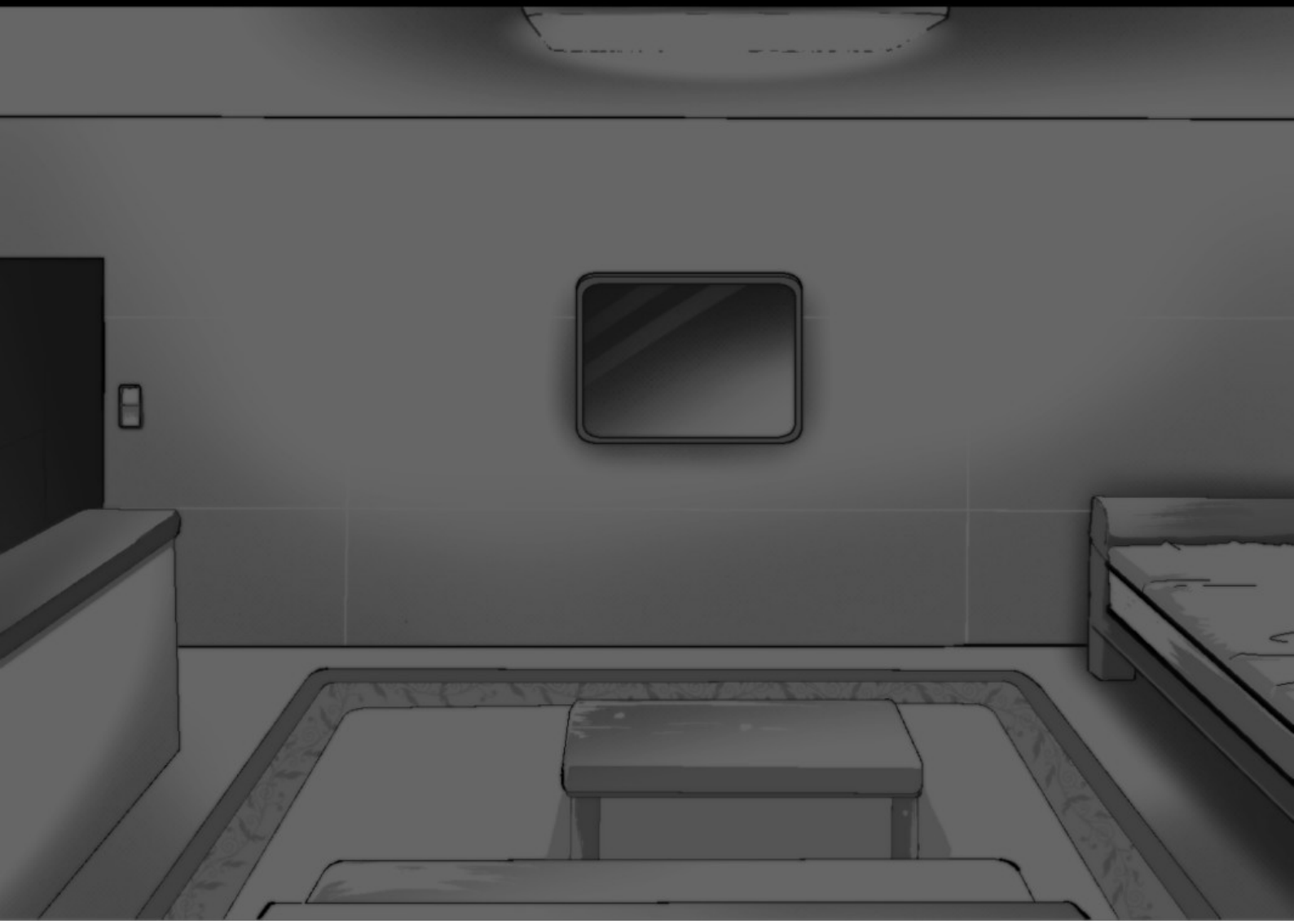
みひろ「ちょっとくらいなら…
そういうこと…エッチなこと、
してもいいよ…」



壁越しに傍観する友馬はよー助の口角が僅かに上がったのを見てしまった。

友馬はよー助の企てていたことを完全に理解してしまった。

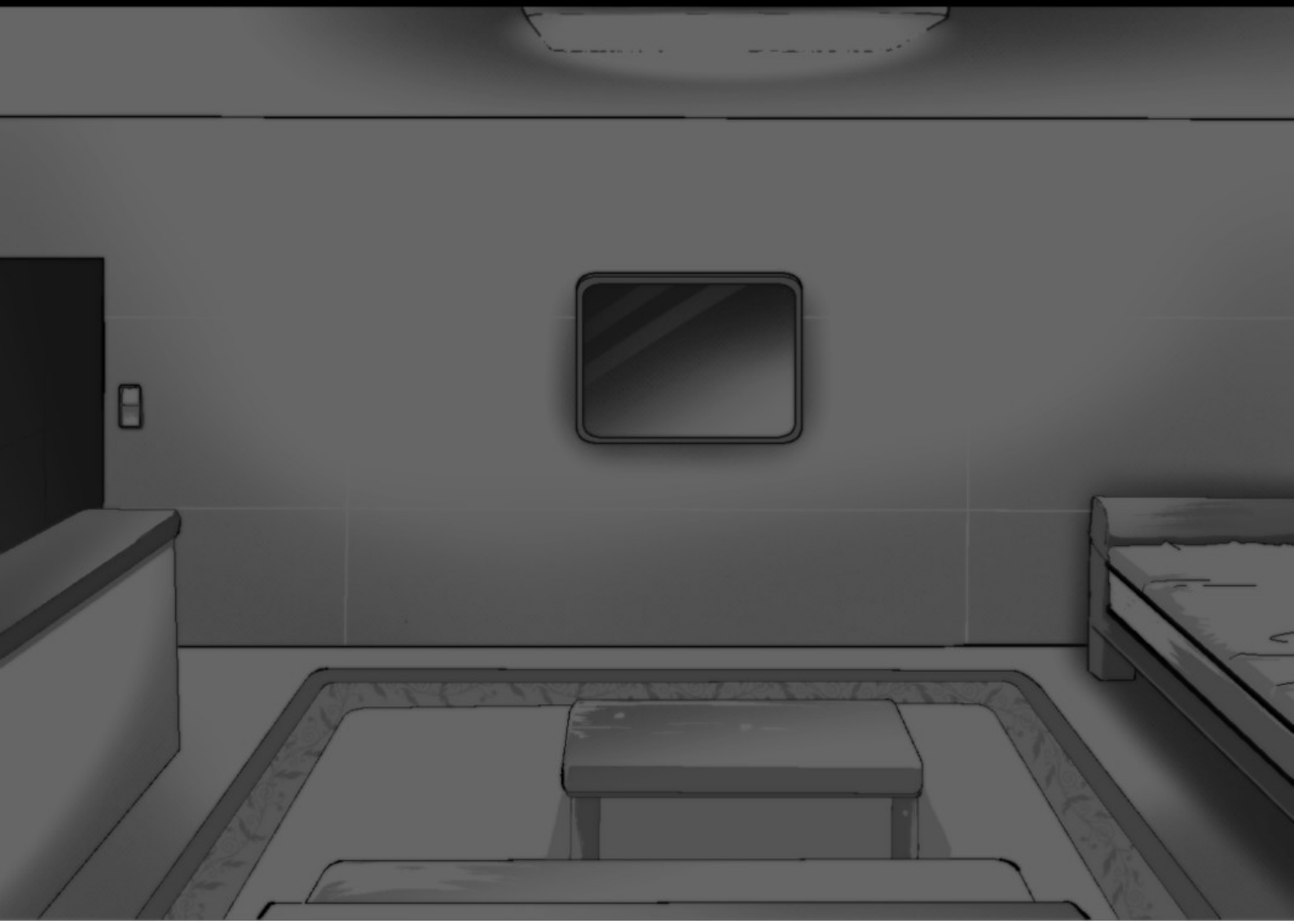
初めからこうなることを分かっていて、あんな行動をしたのだ。



…一度、理性を抑えきれずにみひろの身体を求めようとする
しかし直前で自制心を働かせて何とか思いとどまる…フリをする
そして心の内を打ち明ける

…そうすれば優しいみひろなら、全部許してくれる
自分の意志で踏みとどまってくれたことに心を動かす

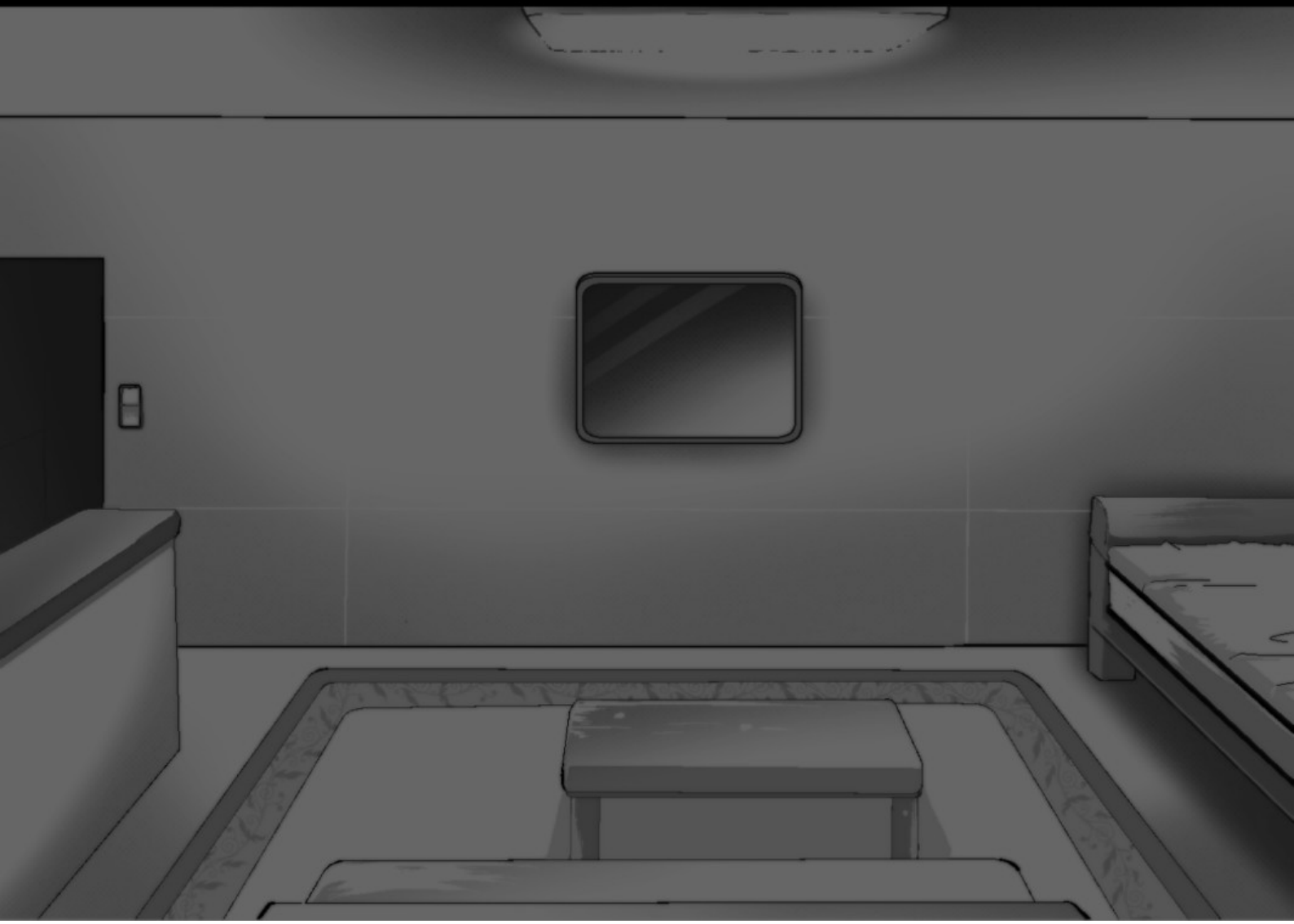
そして、拒絶したはずの相手の要求に少しだけ答えてしまう



岩原美陽色という優しすぎる奴なら
そうしてくれるはず、と確信をもってそ
んな行動を起こした。

結果として、その通りに事は動いた。

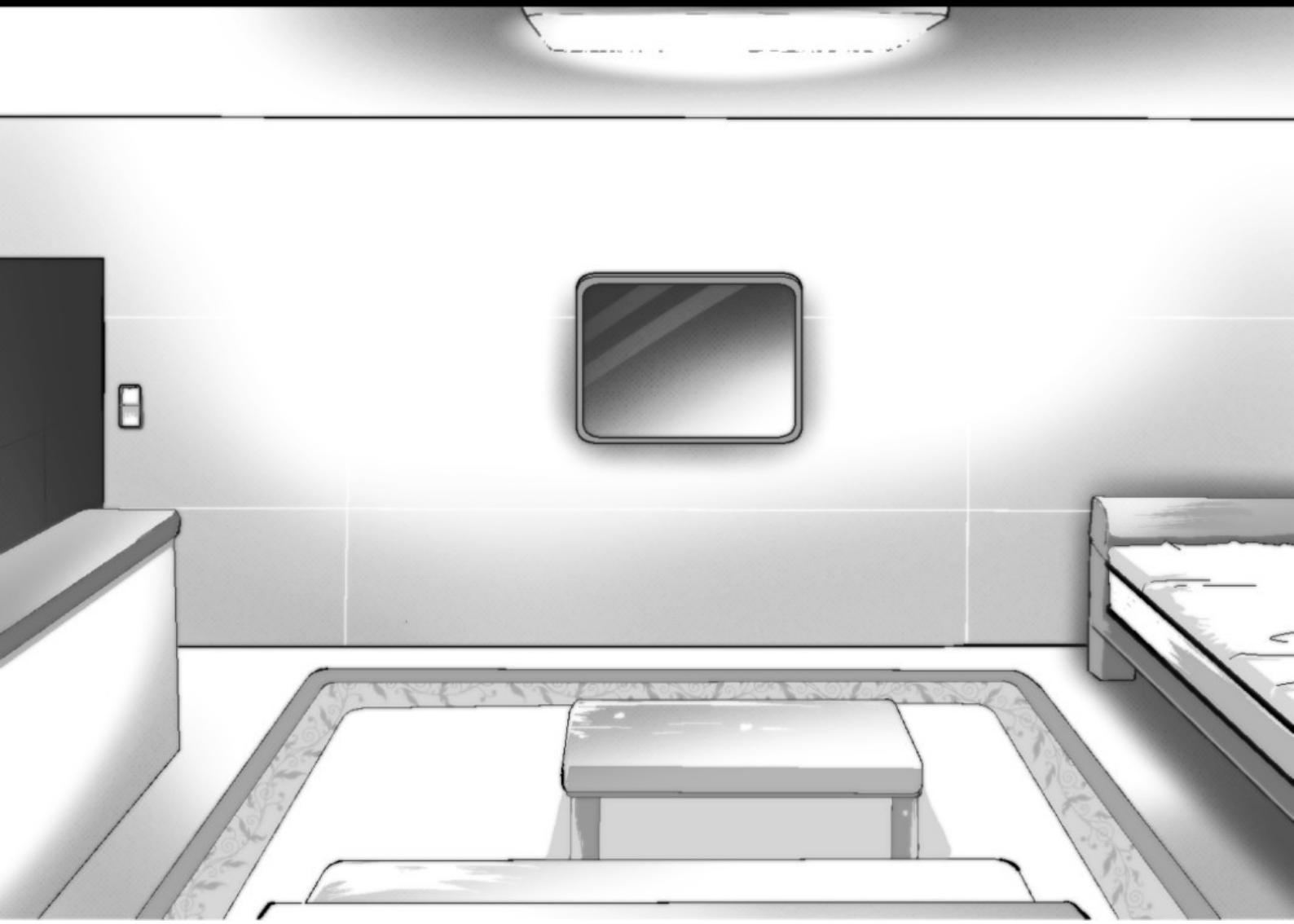
エロ馬鹿男子グループのリーダー格、
下川よー助の策略通りに。



「「じゃーんけーん…！」」

見えない壁越しに二人はじゃんけんをしている。

負けた方が裸になるという罰ゲーム付きで。



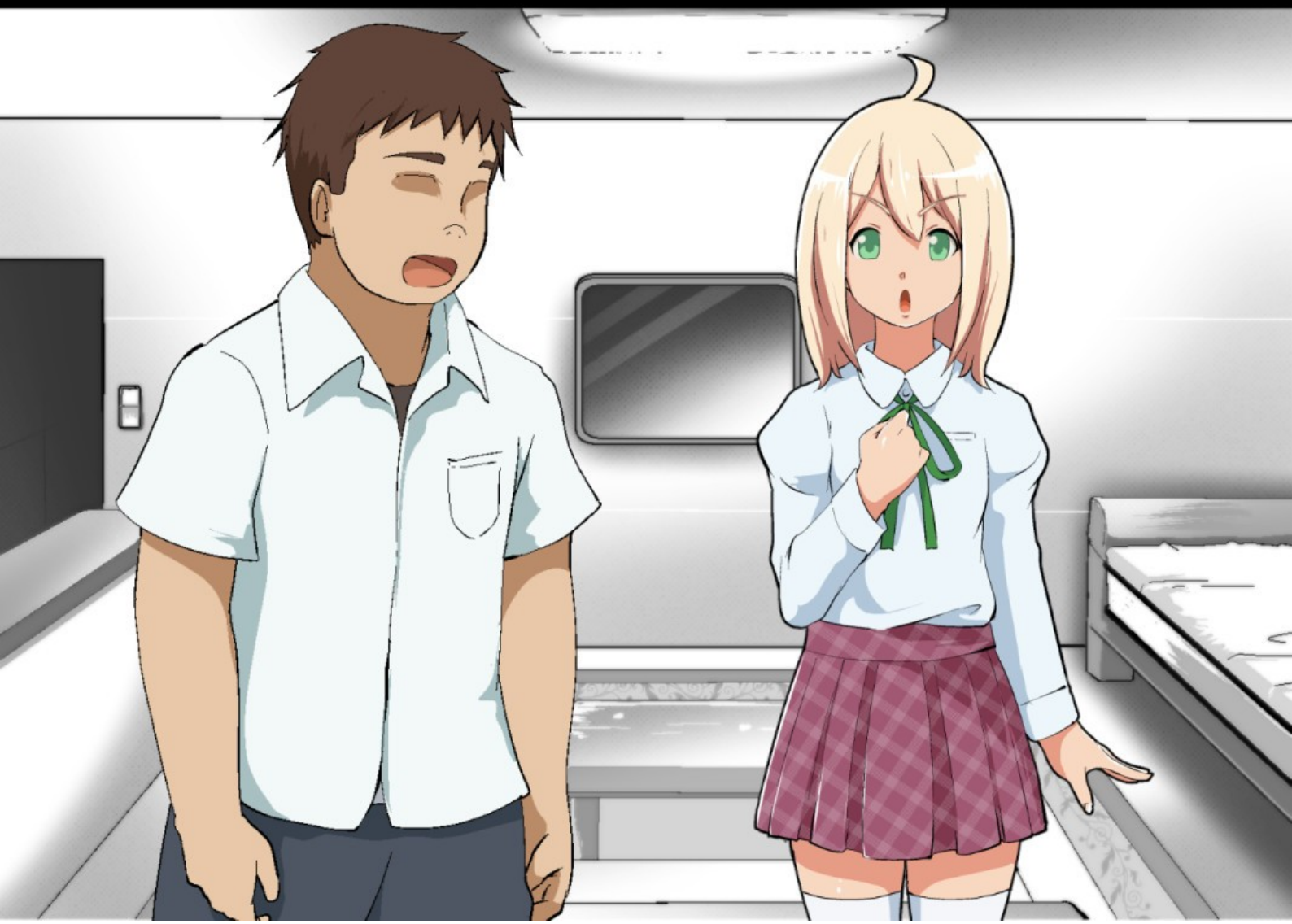
その行為はどう考えても〝ちょっとエッチな事〟の範囲には留まっていない。

しかし二人の間にはフワフワとしたほろ酔い状態のような空気が漂っていた。

みひろも年頃の女子であり、恥ずかしいとは思っていてもそういったことに少なからず興味はある。

僅かに表したみひろの異性への関心を、よー助は上手く煽り立てる。

決して行き過ぎないラインで茶化したりコミカルなトーンであくまでも遊びの延長のような感覚で事を進める。



みひろ「あ、いまちょっと遅出しだったような…！」

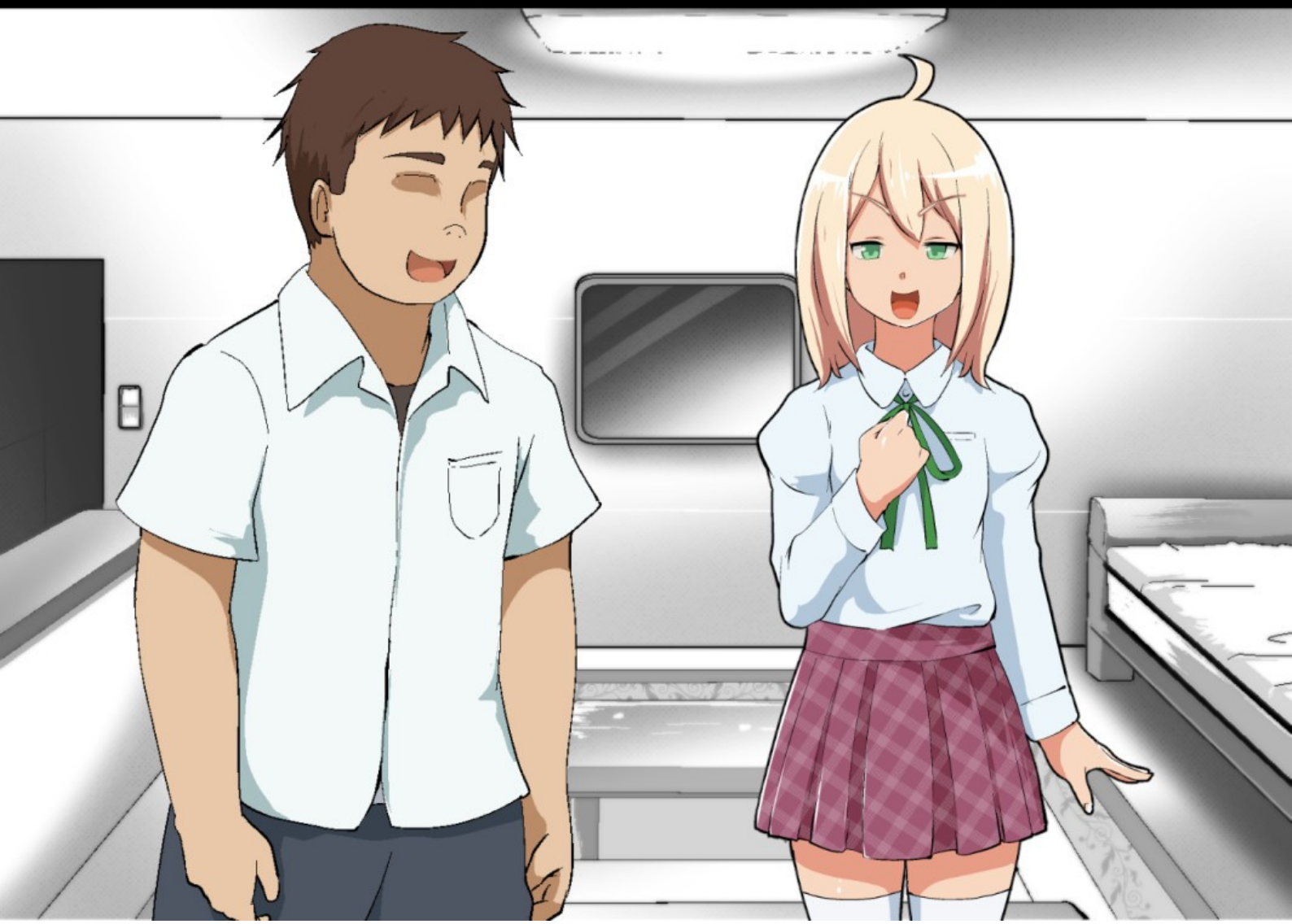
よー助「いや、そんなことないってｗ」

腹の内を打ち明けて、ある意味本当の距離を縮められた二人。

幼馴染は〝エッチな事〟という今まで恥ずかしいこととしか認識していなかった行為を体験する。

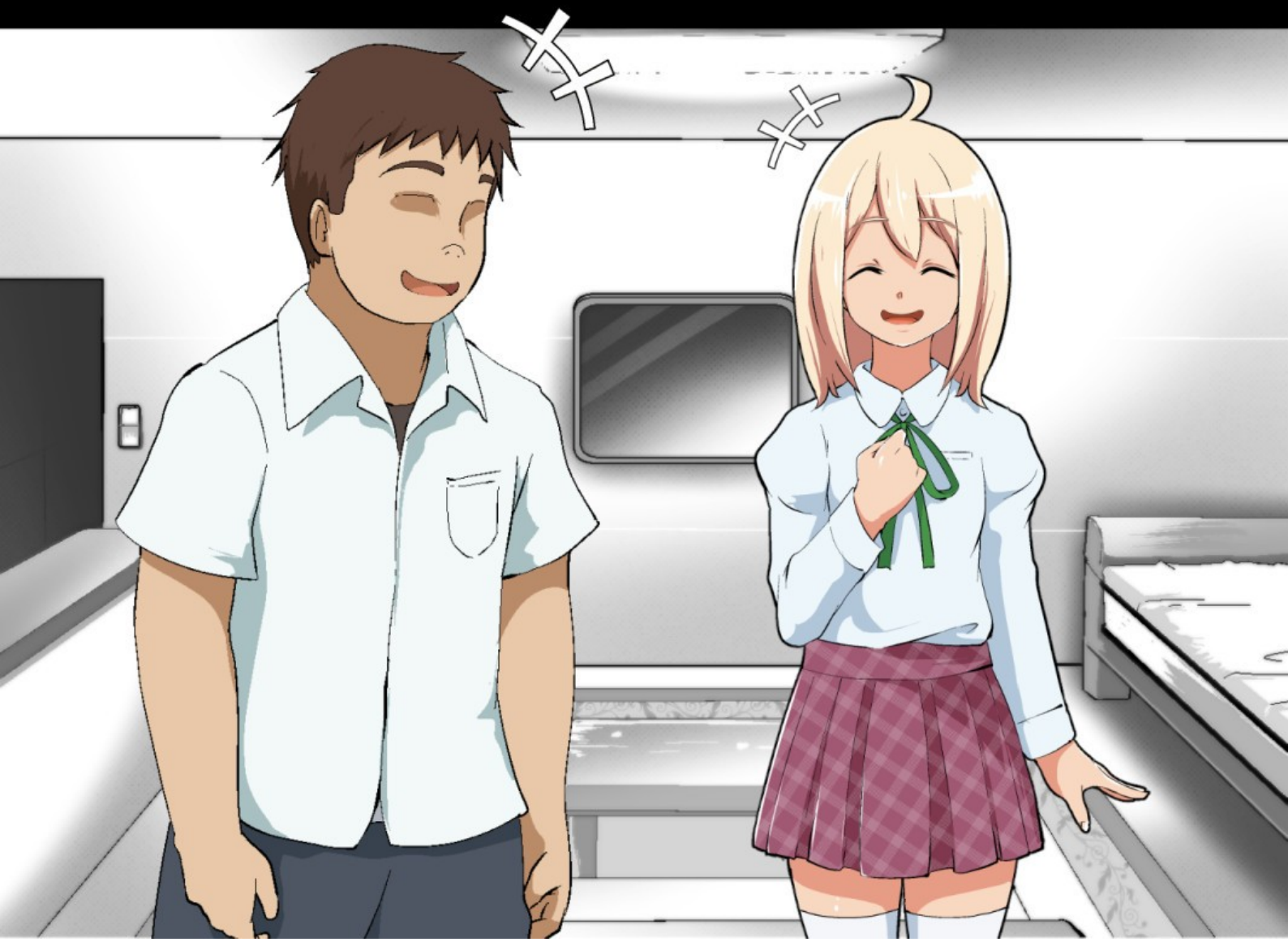
相手はクラス一のエロ馬鹿男子、下川よー助。

だからこそ気張らず、畏まらず自然な形でこのような状況を展開できた。



密室での生活は精神的に窮屈な状態でもあったのだろう。

みひろは感じたことのない解放感で気持ちが変に浮ついてしまっていた。



結局二人とも裸になった。

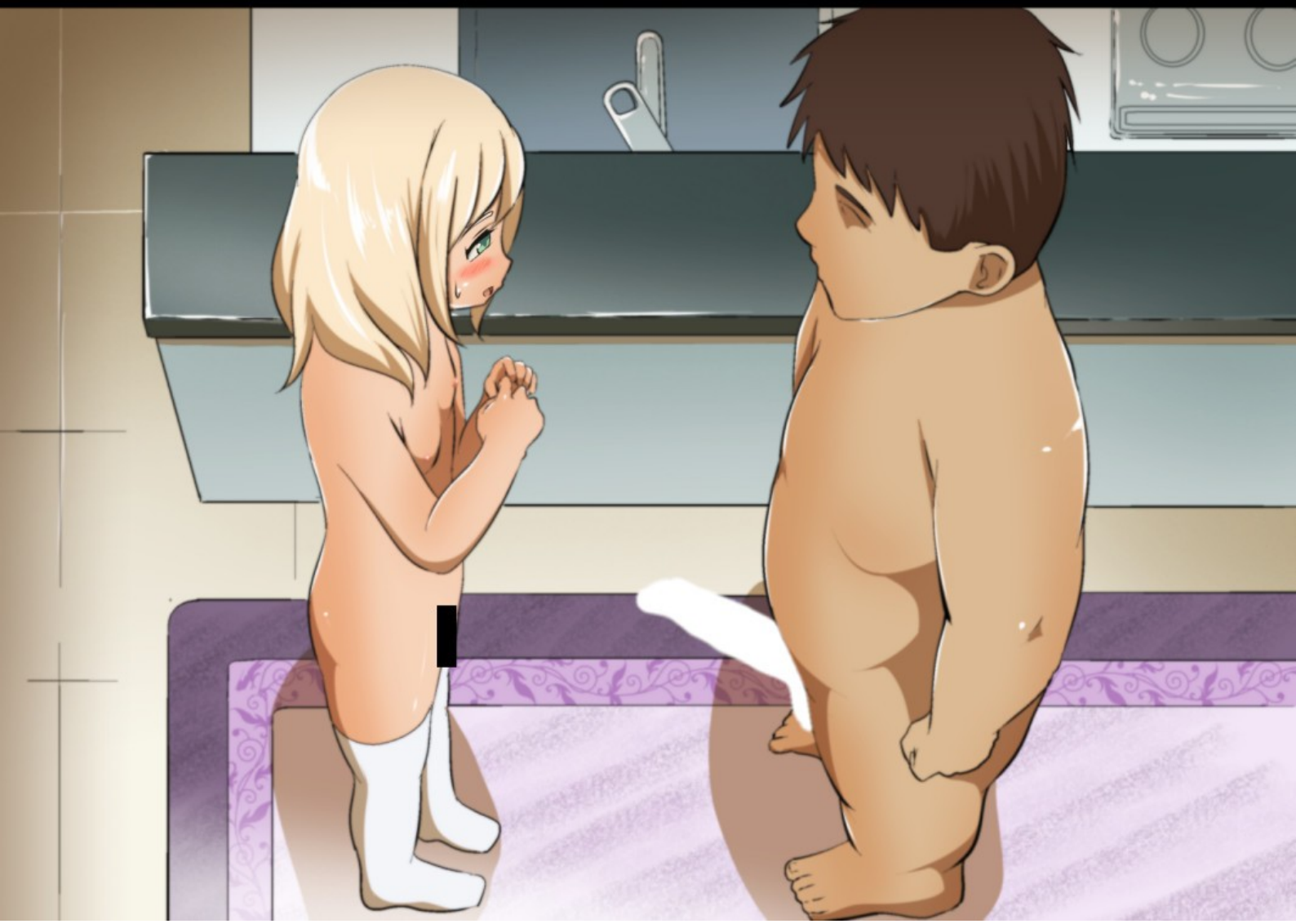
正確にはみひろは白ニーソだけ履いている。よー助の指示で。

よー助「うぉお…ニーソ全裸…」

みひろ「…な、なんか裸より恥ずかしいような…」

よー助「…」

みひろ「ど、どうしたのよー助くん…？あんまり見られると恥ずかしいよ…」



よー助「…みひろちゃん、思ったより恥ずかしがらないね」

傍観している友馬も正直思っていたことだ。

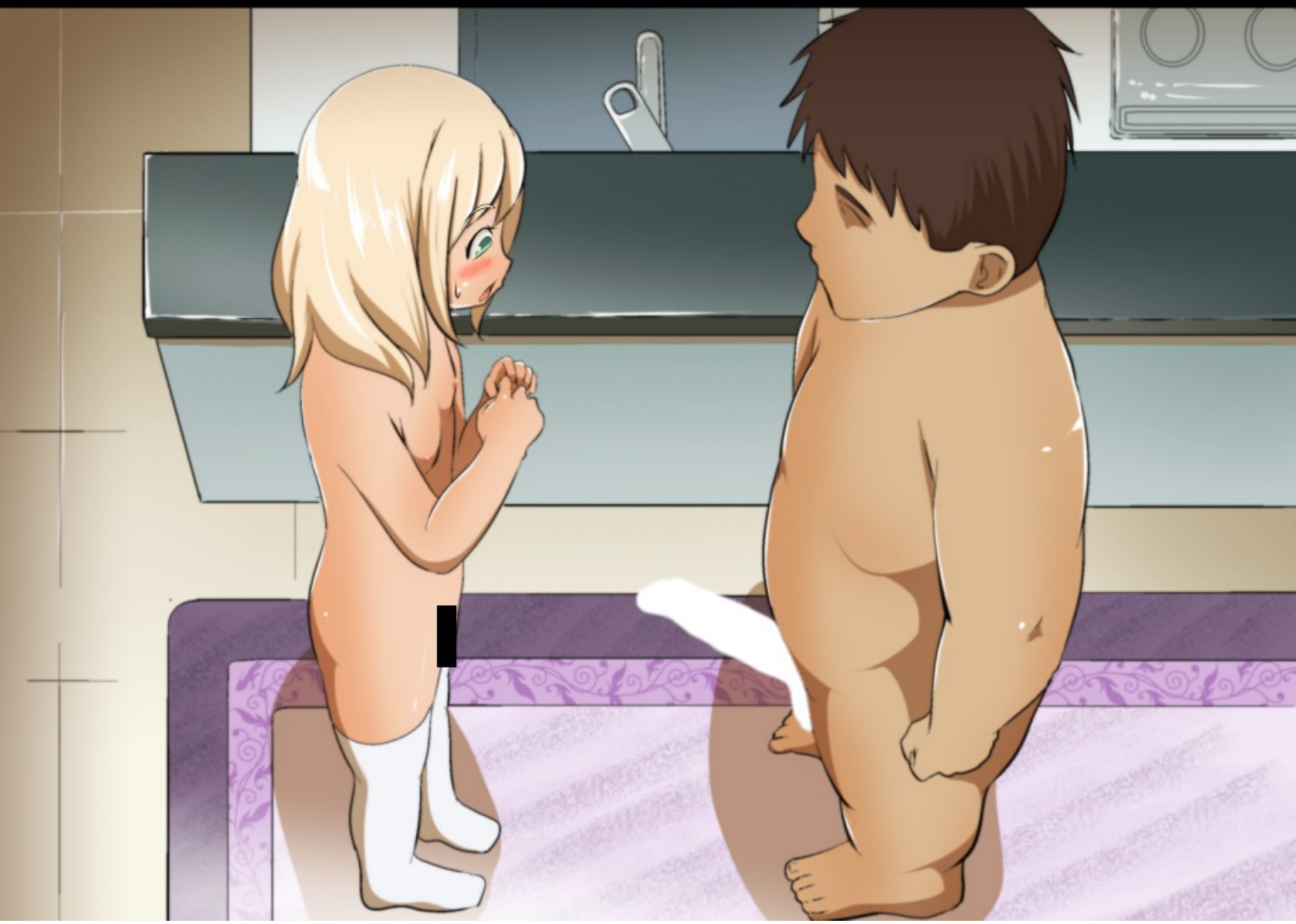
恥ずかしそうにはしているが、よー助が服を脱ぐのを確認してから自身もほとんど躊躇することなく続いた。

みひろ「…す、すごいね」

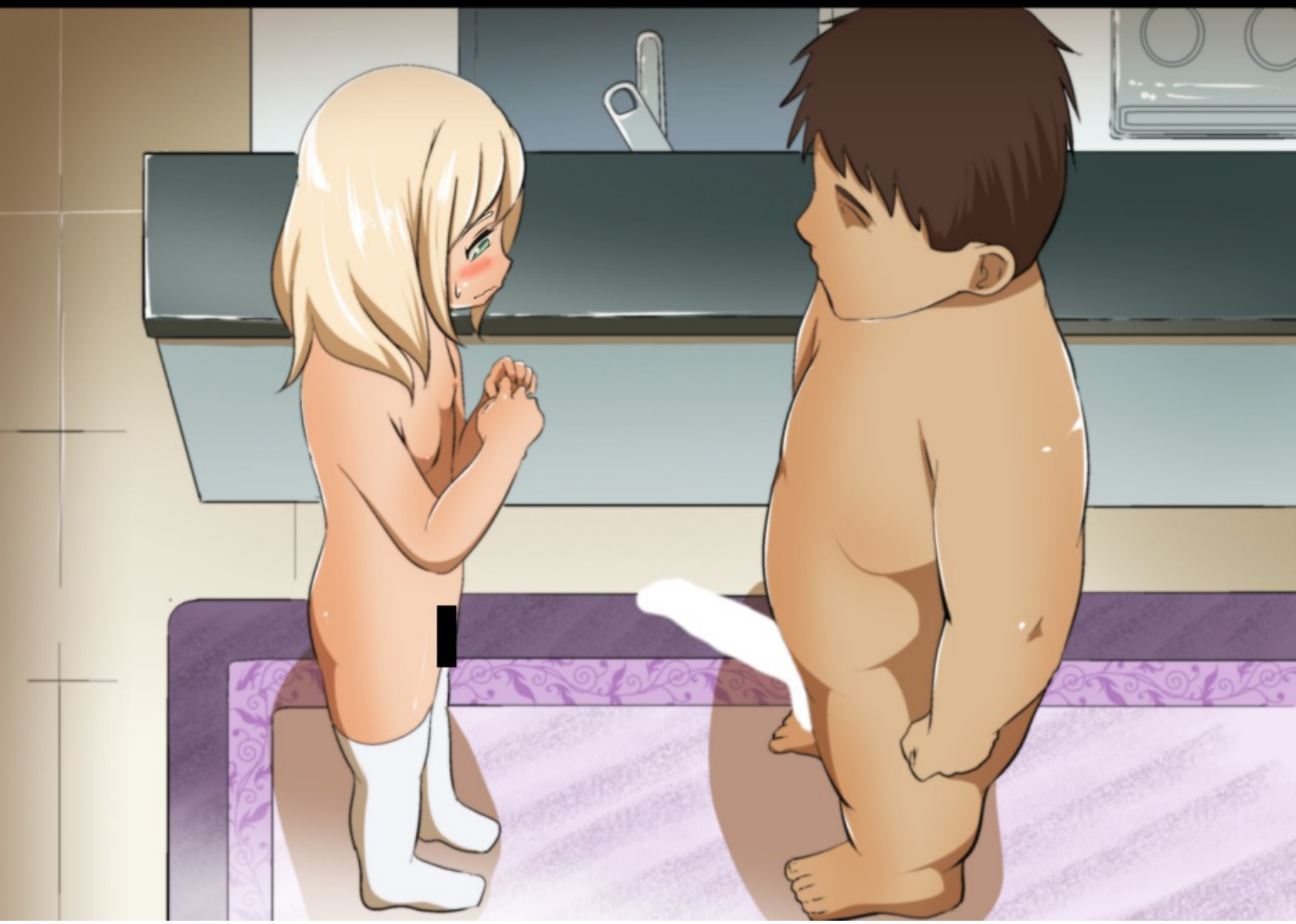
よー助「ん？何が？？」

みひろが何に対してそう言ったのか、よー助は分かってはいたが露骨にとぼける。

みひろ「…お、おちん、ちん…」



語尾が小さくほとんど聞こえなかったが確かにみひろの口からその言葉が出た。
よー助はもう一回言ってとせがんでいた。
友馬も実のところ心の奥底でざわつくモノがあった。
あのみひろの口からそんな言葉が出たことに。
みひろ「…おちんちん」
みひろもみひろでよー助の要求に素直に答えようとする。
よー助「俺のちんこどう？」
みひろ「どうって…言われても」



よー助「見たままの感想言ってみて…」

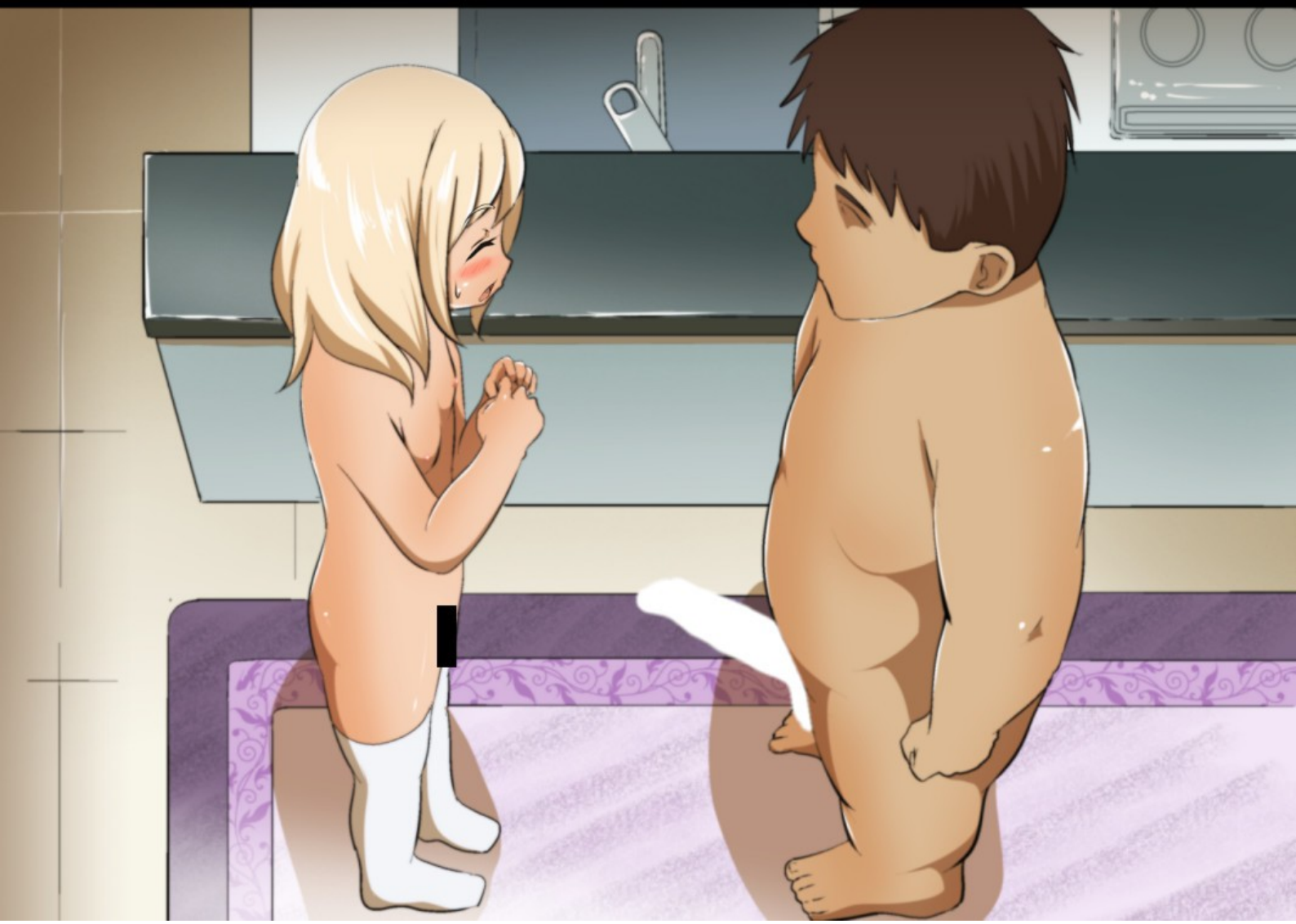
みひろ「…長い、かな」

よー助「誰のナニが長いの？」

みひろ「よ、よー助くんの、おちんちんが…長い」

友馬はよー助の思うがままに進められるこの状況を、ただ見ているだけでどうすることもできない。

が、みひろにそんなことを言わせたがるよー助の気持ちも、ちょっとだけ理解できてしまうのが何とも言えなかった。



みひろ「うわ…！近い…」

友馬（みひろ…）

みひろをベッドに仰向けに寝かせて、その頭を脚で挟み込むような形でよー助は跨っている。

みひろが驚いた通り、目の前によー助のソレがそびえ立っている。



よー助「ふっ…ふっ…、ふっ…」

みひろの眼前で握りこんだソレを必死に扱いているよー助。

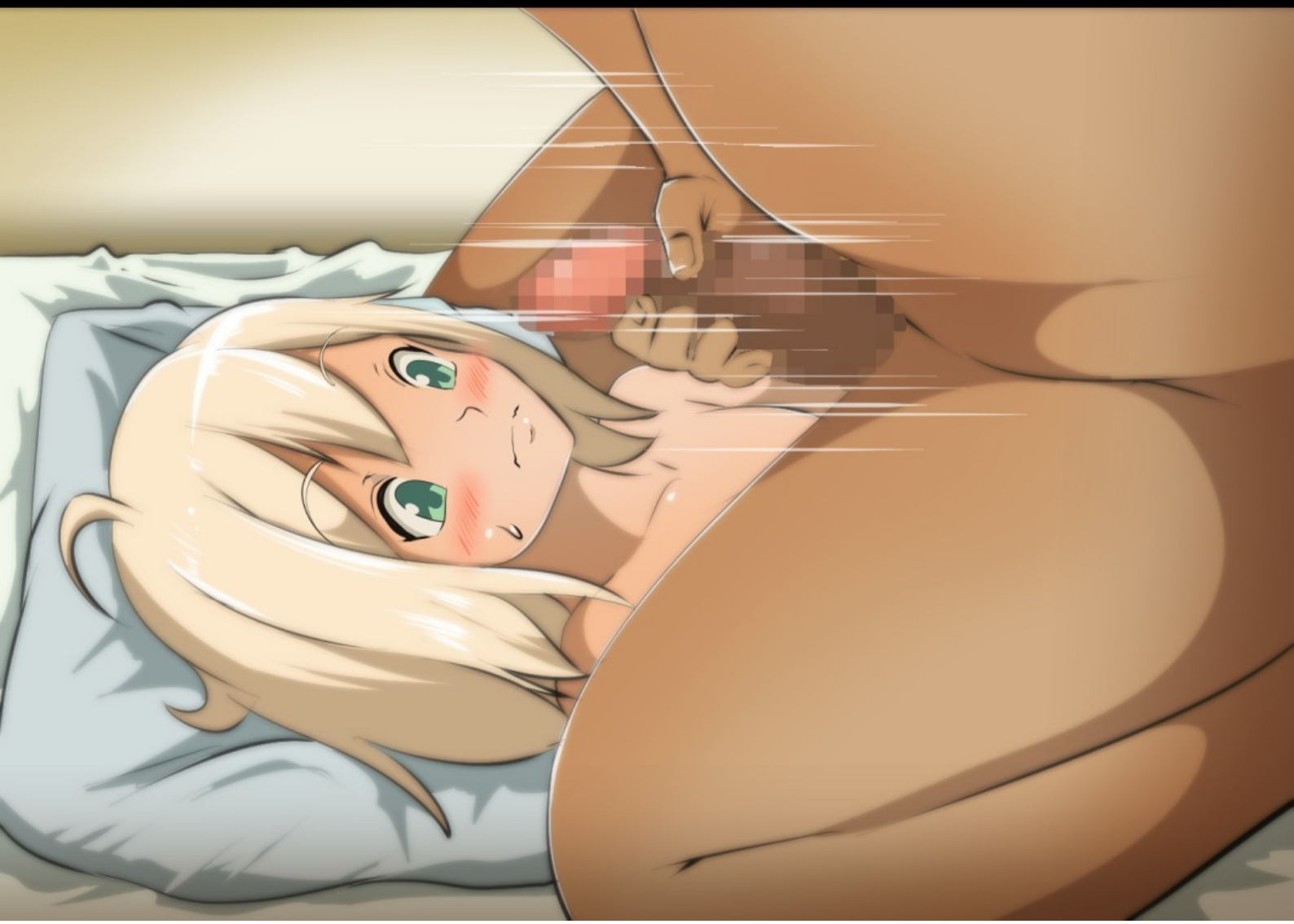
横になっているだけでいいからと言っていたが、思いっきり自慰を始めた。

馬乗りされているので身動きが取れないみひろはただその様子を観察している。

もうどう見ても〝ちょっとエッチな事〟ではない。

が、みひろはその行為を受け入れている。

頬が紅潮し、汗をじんわり浮かべた表情で目の前のソレを興味深そうにマジマジ見ていた。



今のみひろにとってはエロい事をしているというより、経験のないことに対する関心の方が大きいといった感じだった。

よー助「応援してみて？」

みひろ「お、応援？…何を？？」

よー助「分かってるでしょみひろちゃんｗムッツリだなｗｗ」

「ちんこがんばれーとか(笑)あと褒めたりしてみて！お願い!!」

みひろ「えぇ……ぅ…」

「お、おちんちんがんばれぇ～…」

「長いおちんちんかっこいいぃ～…！」



よー助「ぉう…ふっ…ふっ…」

みひろにそんなことを言わせながら扱き続けるよー助。

段々そのペースが速くなっていったと思ったら急に果てた。

果てたと同時に生理現象として排出された白濁色の粘液。

それは目の前にいたみひろの顔に思いっきりかけられた。

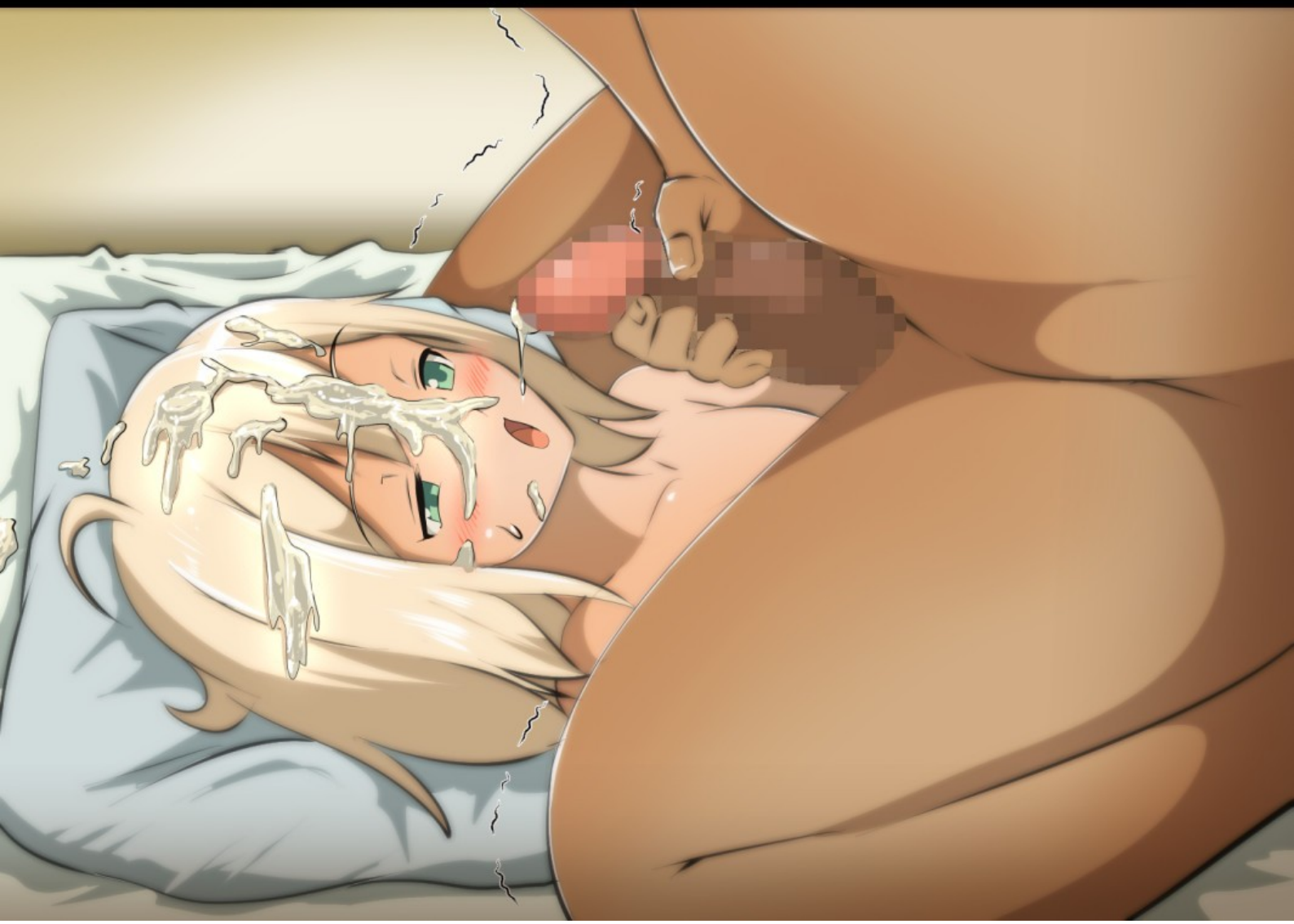
というより、イく瞬間によー助は自身のソレをグッと下に向けて意図的に狙った。

よー助「ハァハァ…あ！みひろちゃんごめん!!あんまり気持ちよすぎて調整出来なかった！」



みひろ「ん…大丈夫。なんともないよ」
　みひろもその行為を見るのはもちろん初めてなので、男がどれほどまでその行為を制御できるものなのかを知らない。
　よー助にそういわれたら、そういうものなのかと納得するしかない。

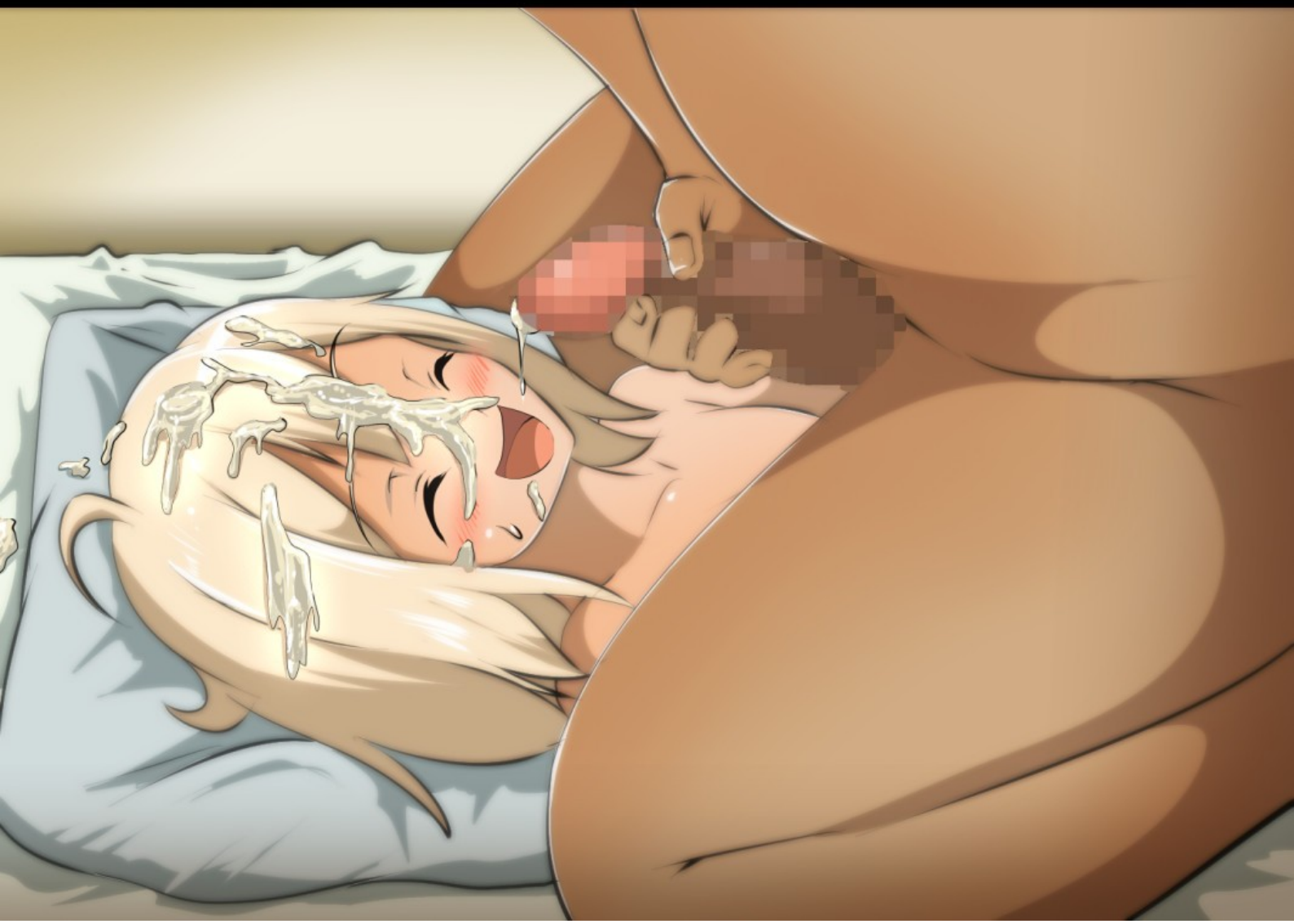
よー助「…みひろちゃん、これなんだか分かる？」
みひろ「…精子」
よー助「どう？」
みひろ「…あったかい…？」
よー助「俺の精子あったかいの(笑)？」
みひろ「…うん(笑)」
よー助「ｗｗ」



みひろはよー助とのやり取りにこ慣れてきているというか、どういった返答をしてほしいのかを分かった上で会話する。

とんでもないことをされているのにみひろは嫌がるような素振りは全く見せていない。笑顔ですらいる。

二人の間には妙に和気あいあいとした空気が流れていた。



数分の休憩を挟んだ後、二人は再びベッドに向かった。
先ほどとは逆に今度はみひろが上で跨る姿勢になっている。

みひろ「…っ」
よー助「〜…!!」

お互いの局部に頭を埋めていた。
目の前にあるお互いのソレを思うままにする。

よー助は遠慮なく貪っているが、みひろも割と躊躇することなくソレを咥えていた。



カポカポと口を動かし、何となくのイメージで行為に励んでいるようだ。
するよりされる方が恥ずかしいという認識なのか、よー助が過剰に音を出したりして弄ると、みひろも照れ隠しのように行為を続ける。この場合照れ隠しというのも違うのだろうが。

よー助「…んぉ!!」
みひろ「…ん」
よー助の方がかなり激しめに弄っていたが先にイッたようだった。



よー助「ハァハァ…ごめん先にイっちゃった…みひろちゃん上手すぎて我慢できなかったよ」

みひろ「…んっ…っ」

よー助が話しかけてきたのでみひろは口に排出された粘液の処理が先だと、暗に急かされるような形で当たり前のように呑みこんだ。

みひろ「…嘘。初めてだしよく分かんなかったし、上手いわけないよ…」

よー助「だって俺めっちゃ早く出ちゃったし、みひろちゃん達人じゃんWフェラチオのプロ！」

みひろ「ふぇらちお？」



よー助「ちんこ舐めること」
みひろ「あ、そ、そうなんだ…」
知らなかったとはいえそんなことを聞いてしまったみひろは恥ずかしがっていた。
名すら分からない行為をさせられていた幼馴染。
よー助「ていうか精子普通に飲んじゃってたね」
みひろ「え？駄目だったの！」
よー助「いや逆っていうか、飲んでもらえるの男なら全員100パーセント嬉しいと思うよ。初めてでよく飲めたね」



みひろ「そ、そうなんだ…、ちょっと飲み込みにくいというか喉に引っかかる感じはあったけど別に…結構平気って感じ…？」

よー助「みひろちゃん、イラマチオもやってみよ！」

みひろ「イラマ…？」

よー助「どんな感じか分かる(笑)？」

みひろ「…フェラチオの、パワーアップ版みたいな…？」

よー助「さあ？やってみないと分からないな～ｗ」

みひろ「…」



みひろ「～～～ッ!!」

再びよー助が馬乗りになり、そのままみひろの口にソレを突っ込んだ。

よー助の巨躯がみひろの体にのしかかっている。本気で体重を乗せているわけでもないのだろうが、見るからに重そうだった。

脚をばたばたと動かすが、身動きが取れず何の抵抗にもなっていない。



みひろ「んぐっ…！ごぉ…!!」

呻き声とも異なる、喉から漏れ出るような音。

あのみひろの口から出ている声とは思えなかった。

よー助「みひろちゃん！これが楽しみにしてたイラマチオだよ！通はちんこを喉で味わうんだよ！喉！喉!!」

みひろ「～～～ッ!!」



よー助「最初はちょっと苦しいかもしれないけど、この苦しさが癖になるからね！がんばれみひろちゃん！俺が立派なイラマチオクイーンにしてあげるからね!!」

そんなことを一方的に言い放っているよー助。

当のみひろは言わずもがな、言い返せる状態ではない。

ひたすらガンガンとみひろの口にソレを何度も打ちつけている。

一時的にペースが早くなったと思ったら、最後の一突きといわんばかりにみひろの喉奥まで思いっきり入れ込んだ。



みひろ「ごぉ…ぉおお～～っ…!!」

とどめを刺された怪獣の断末魔のような呻き声だった。

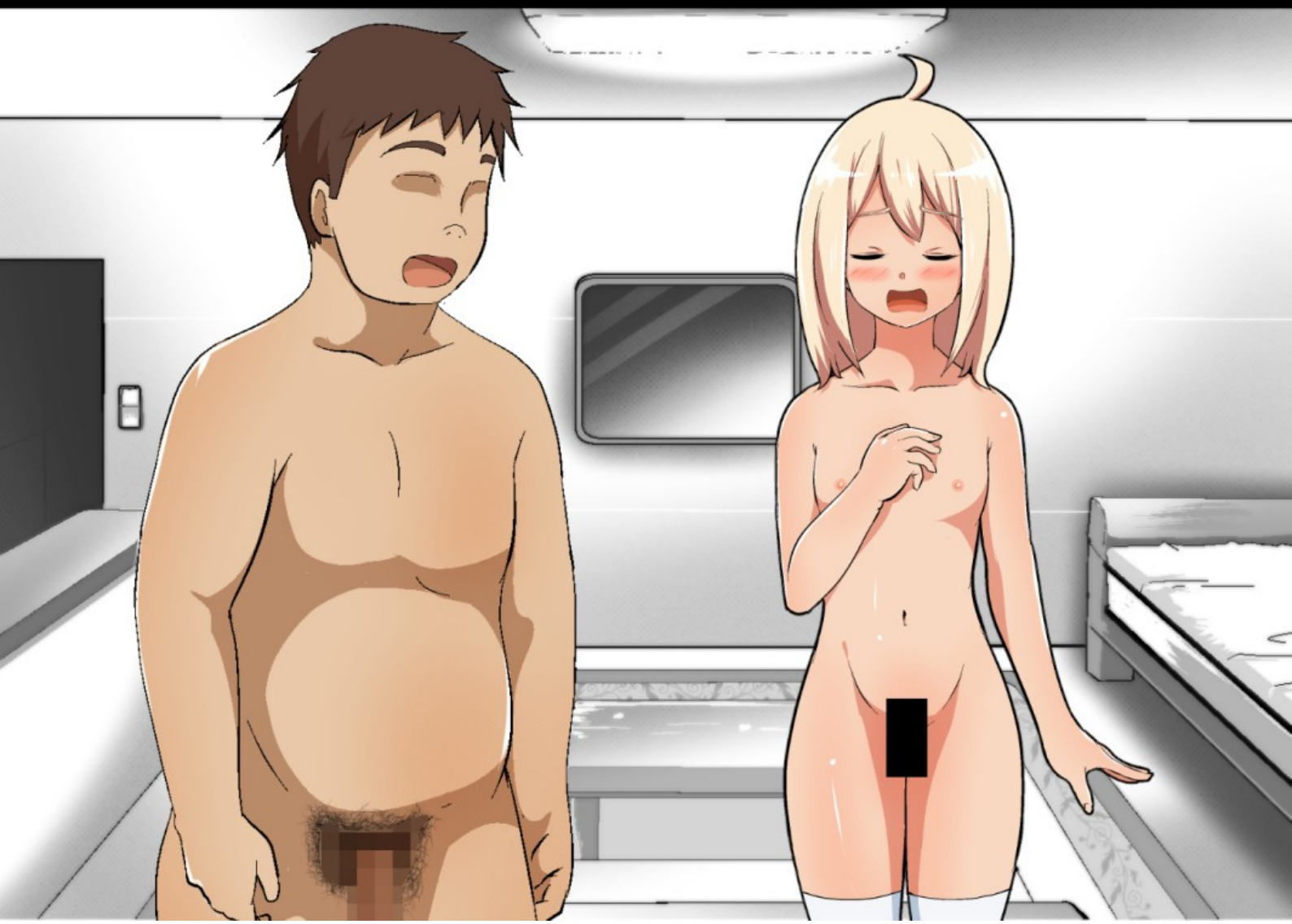


数秒してからよー助がソレを口から抜く。

よー助「ハァハァ…ごめんみひろちゃん！最高に気持ちよすぎて…止まらなくなっちゃった…！」

みひろ「ゴホッゴホッ…！はぁはぁ…」

よー助「飲み物持ってくる」



サッとベッドから飛び出し冷蔵庫からペットボトルを一本持ってくるよー助。

みひろは律儀に「ありがとう…」と掠れた声でお礼を言うと、それをゆっくり飲んだ。

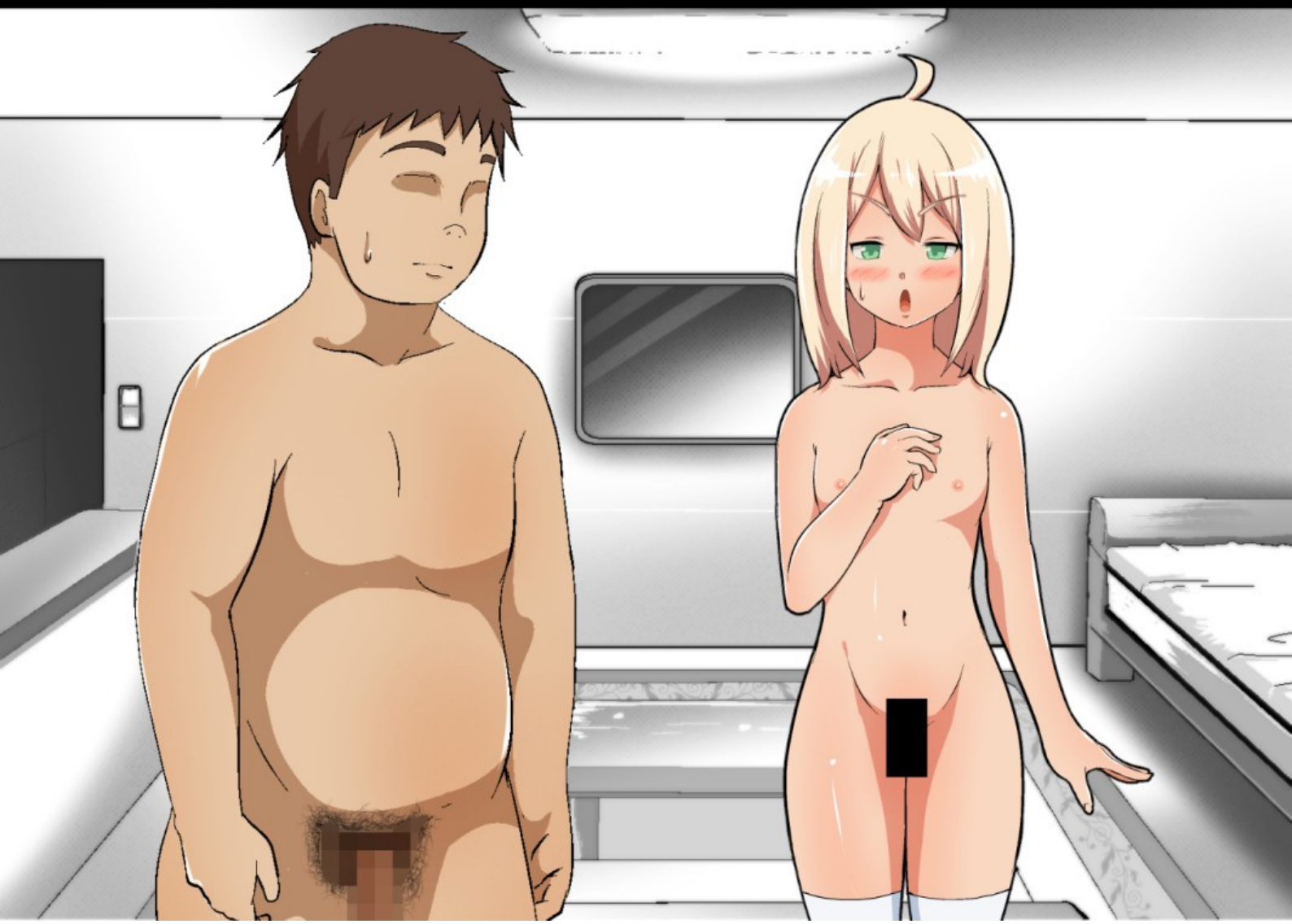
ある程度落ち着きをとり戻すみひろ。

みひろ「ふぅ……よー助くん、やりすぎ」

よー助「すみませんでした」

みひろ「…土下座すればこいつなんでも許してくれるしな～って思ってない？」

よー助「…ギクッ」

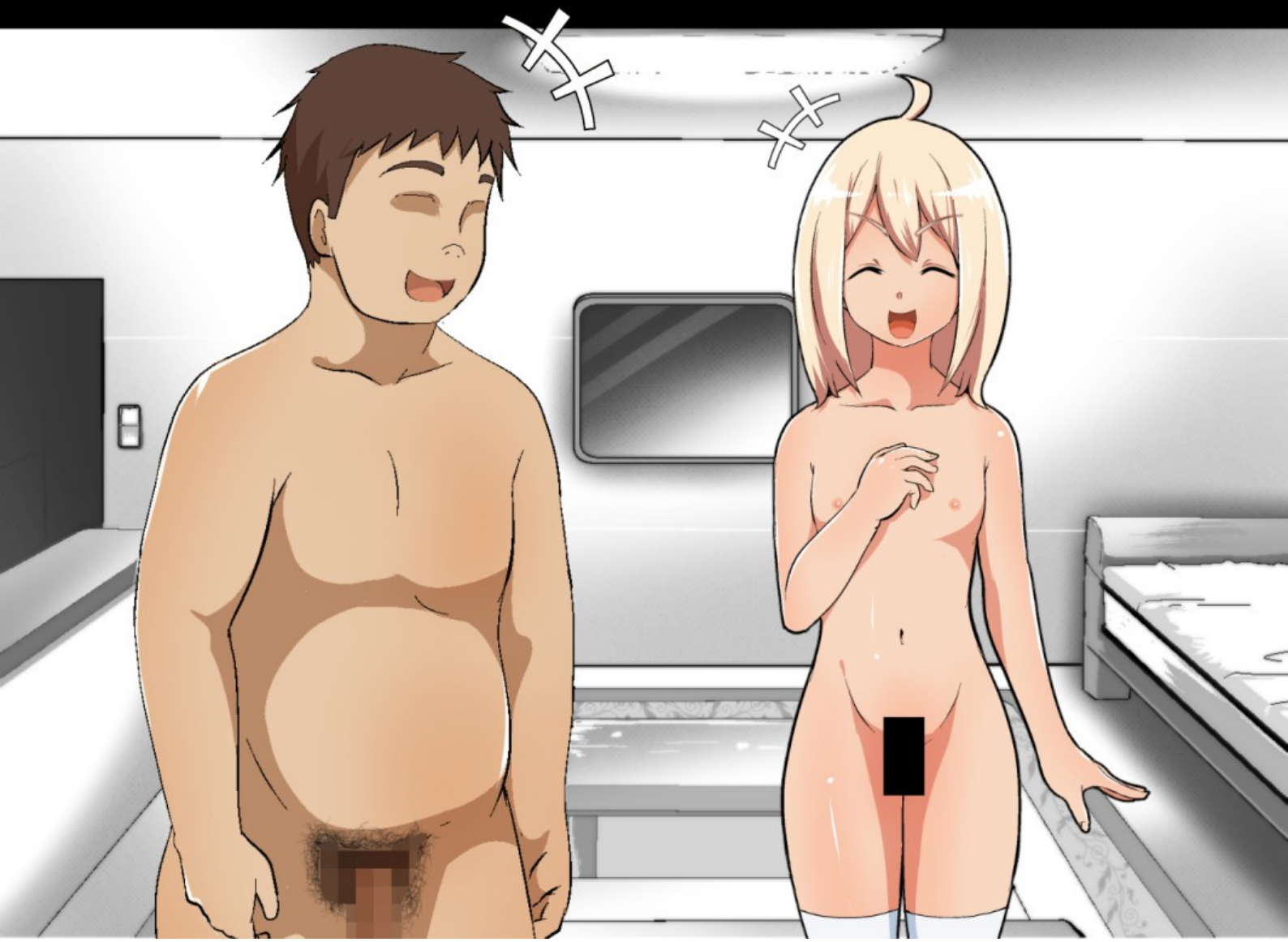


みひろ「こらー！」

よー助「ｗｗ」

友馬「…」

あれほどまでの行為をさせられて、なぜか空気は軽かった。



それから二人にとってその行為は当たり前のように生活に取り込まれた。

みひろが「やるならご飯前にしよう？後だと…戻しちゃうかもしれないから…」とリアルなことを言っていたのが何とも心がざわつくいた。

よー助は相変わらず遠慮することなくガンガンとみひろの喉を突く。

頭を押さえ固定し、喉奥まで串刺しするように激しく動く。



よー助「ふんっふんっ、…ふんっ!!」
みひろ「ごぉ…おぉ……おっ!!」
みひろは呻き、苦しそうではあるが、
手足をバタつかせるようなこともせず、
その行為をまっすぐ受け入れている。
よー助「…イくっ！イく…みひろちゃん
出す…!!」
みひろ「んぐぉ……、っ…」



よー助は果てるとき自身のソレを根元までずべてみひろの口に突っ込む。

みひろは喉奥まで侵入してきたソレをキュウっと心地よい圧で歓迎する。

恐らくよー助の様子から見るに射精している。

この時、みひろは目を細めてぼやけた表情をする。

友馬にはウットリしているように見えた。



次の日も当然のようにしたのだが、食事を済ませる際、ただでさえ小食のみひろがあまり食べなかった。

みひろ「…よー助くんの精子、結構お腹にたまるというか…」

それを聞いて滾ったよー助はタガが外れたようにみひろの口内で自身のソレを思う存分暴れさせた。

数分してから「おぇっ…！」と呻いた声と共にトイレに駆け込んだみひろに結構本気目で怒られていた。



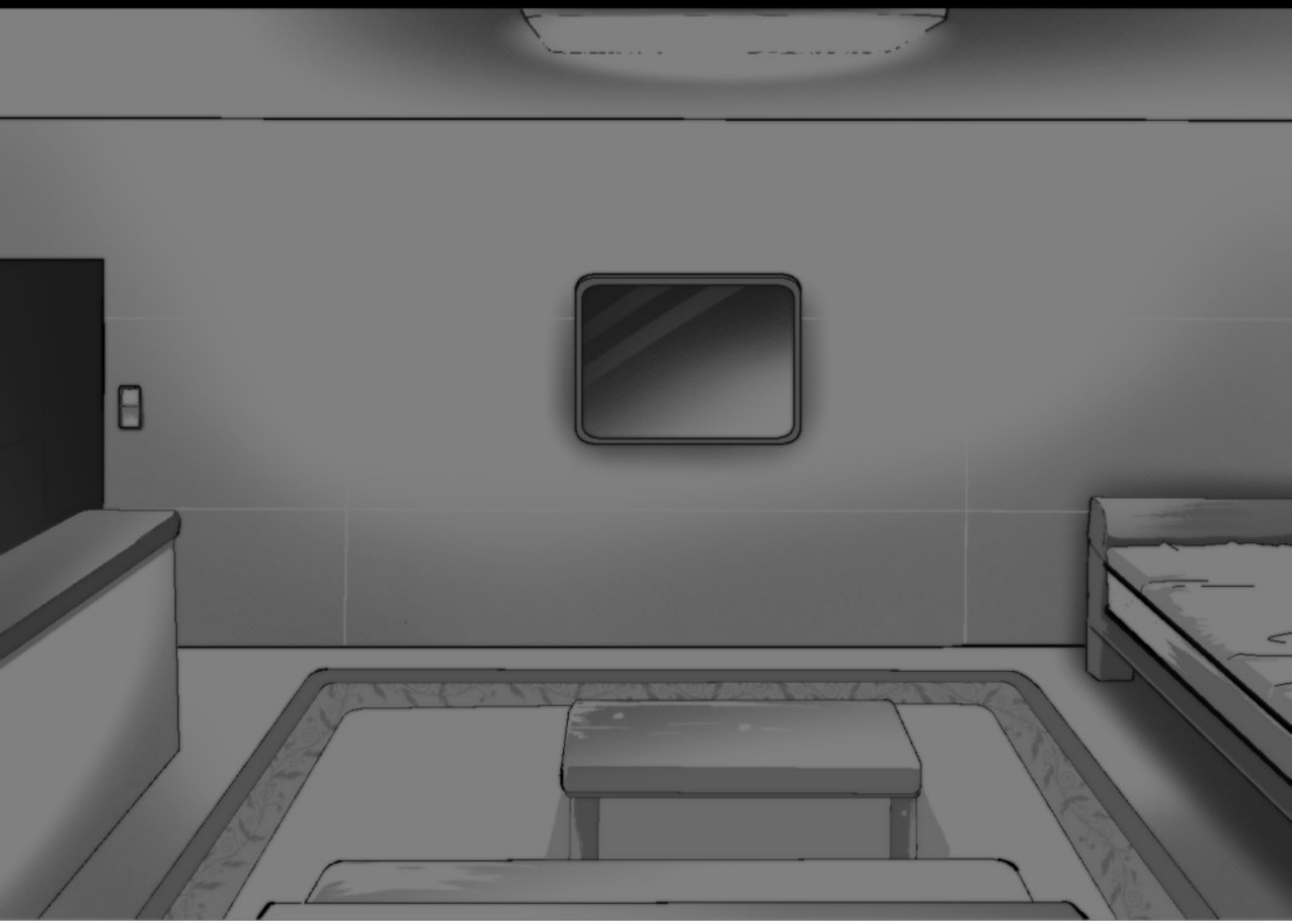
友馬「…」

恐らく深夜の時間帯。

友馬は目を覚ました。

なぜこんな時間に？と思った。

尿意を感じるわけでもない。



友馬「…」

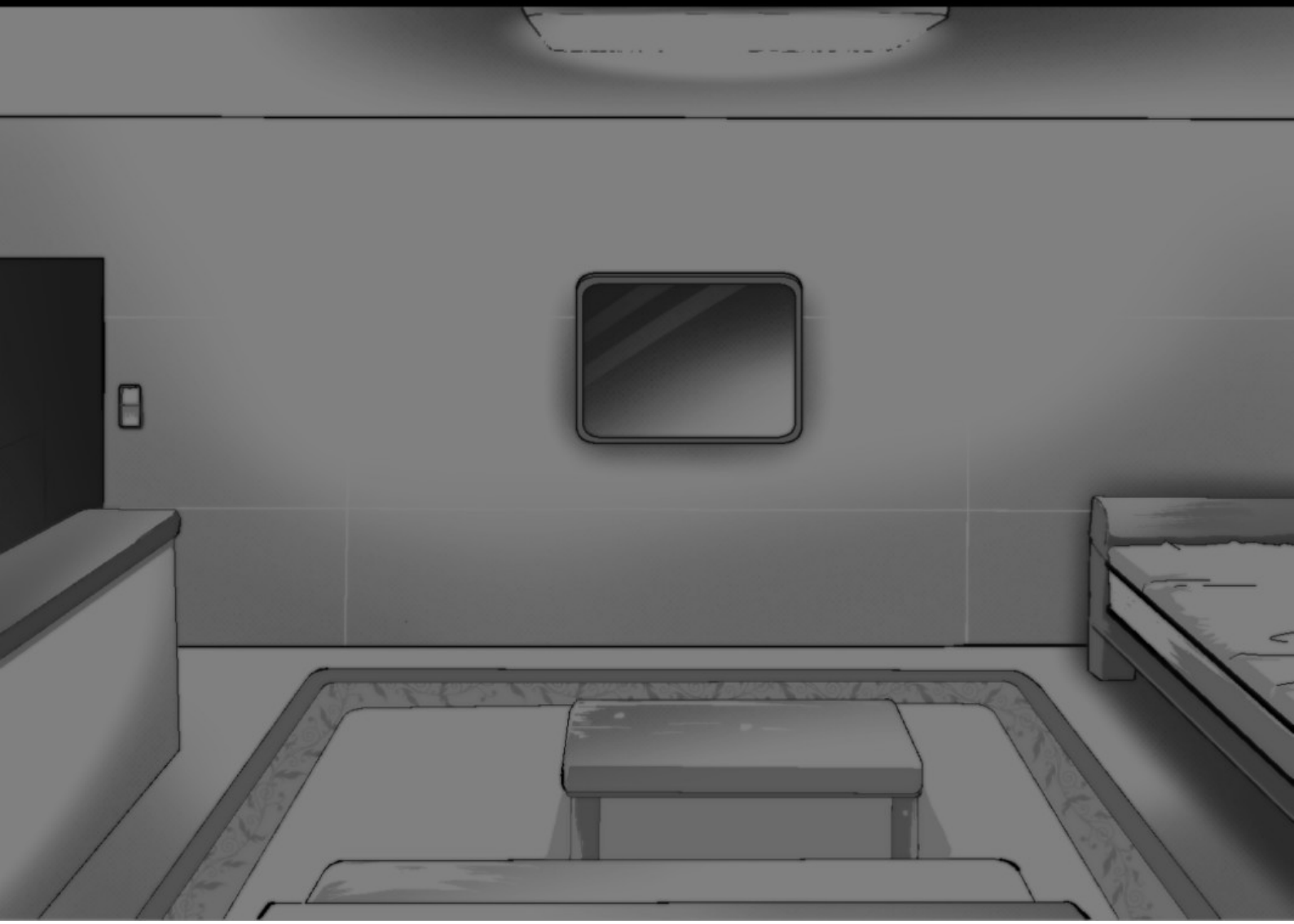
何かこの部屋で変化があったのだろうか。

意識的にそれを感じ取り、目が冴えたのだろうか。

友馬はとりあえず一番気になっている、見えない壁に近づこうとする。

友馬「ん…？」

すると、物音がした。

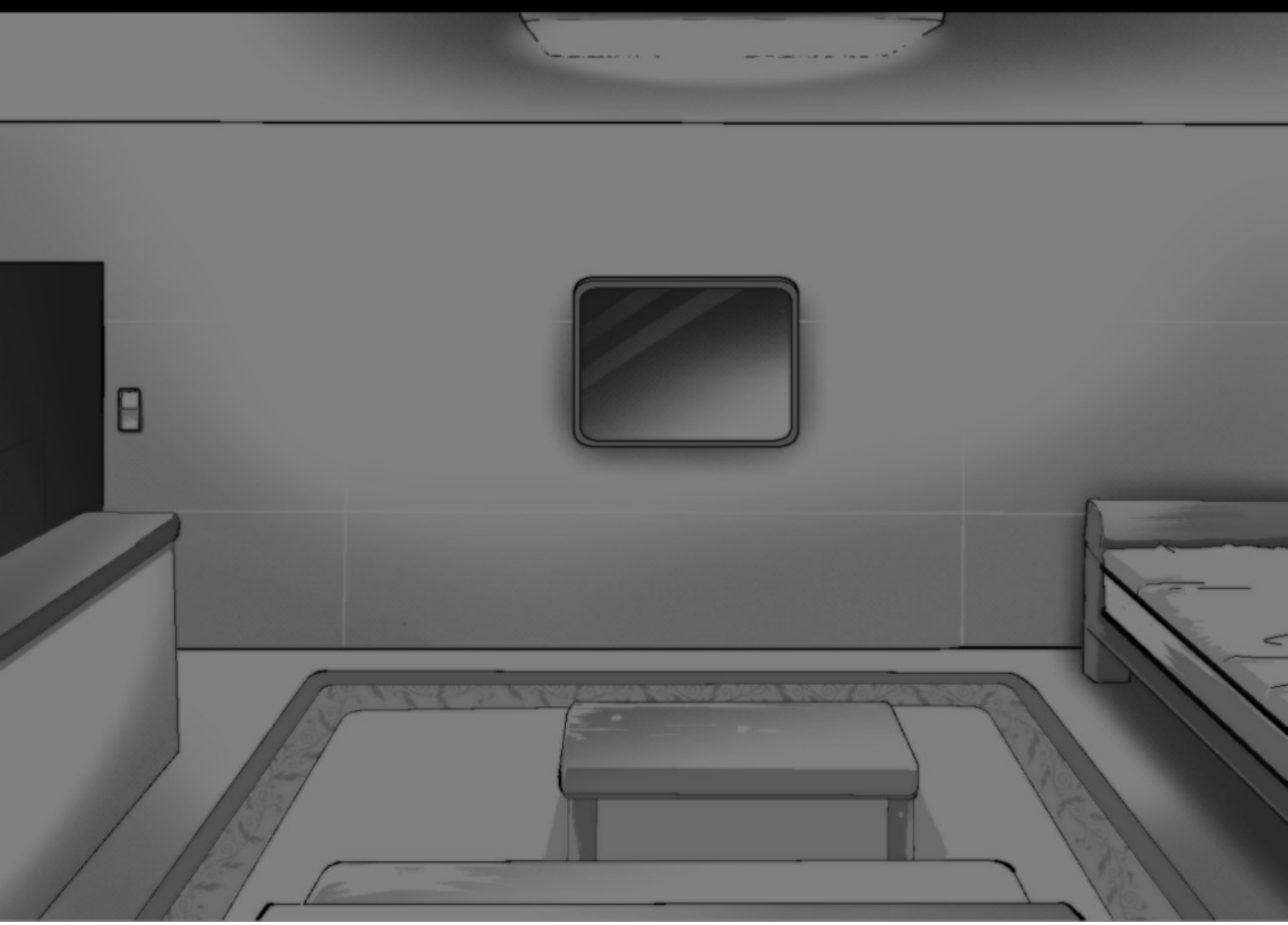


「～～～っ！」
「～～～ッ!!」

二人の部屋からだ。

友馬「…」

結果として見えない壁は何も変化していなかった。



が、その壁の向こうで二人が当たり前のようにセックスしていた。

よー助「ぉおおお！…おおっぉ!!」

みひろ「よー助くん…！よー助くんっ！」



よー助はひたすらうなり声をあげている。
みひろはそのよー助の名前を何度も呼んでいた。

よく見るとベッドの端にはすでに使用した後のゴムが二つあった。
そんなものあったのかと思ったが後日、友馬も備品室を探ったら隅の方にしっかり陳列されていたのを発見した。
…一人だけで生活する部屋に置かれてもどうしようもないが。



友馬は(よかった、ちゃんとゴムはしてるんだな)と変に安心してしまった。
目の前で十数年来の幼馴染がクラス一のエロ馬鹿男子と身体を重ねているのを見ながら。
表情を見ると頬は紅潮し汗ばんではいたが、痛みや苦しいといった感じはなさそうだった。
よー助が「みひろちゃん気持ちいい?」とちょうどいい感じのタイミングで聞いてくれた。
みひろ「…うん、何か…イラマチオと比べたら苦しいってことない、かな」



よー助「先にあんなハードプレイ経験しちゃったから変にこ慣れちゃったのかな(笑)」

みひろ「えっイラマチオってそんなにキツイことだったの？」

よー助「フツー嫌がるというか、あんな嬉しそうにしてくれるみひろちゃんがヤバいんだよｗ」

みひろ「う、嬉しそうになんて別に！よ、よー助くんの方が嬉しそうにするでしょ！」

よー助「うん！めっちゃ嬉しいよ、みひろちゃんのイラマ♪この後もやろうね」



みひろ「嬉しそうになんてしてないからね…～～っ！」

よー助「はいはいｗｗ」

みひろが言い訳するようにまだ何か言おうとしていたがよー助がペースを早めて意識を力ずくで打ち消す。

よー助「おらっ♪おらっ♪」

みひろ「あっ！あっ…あぁ」



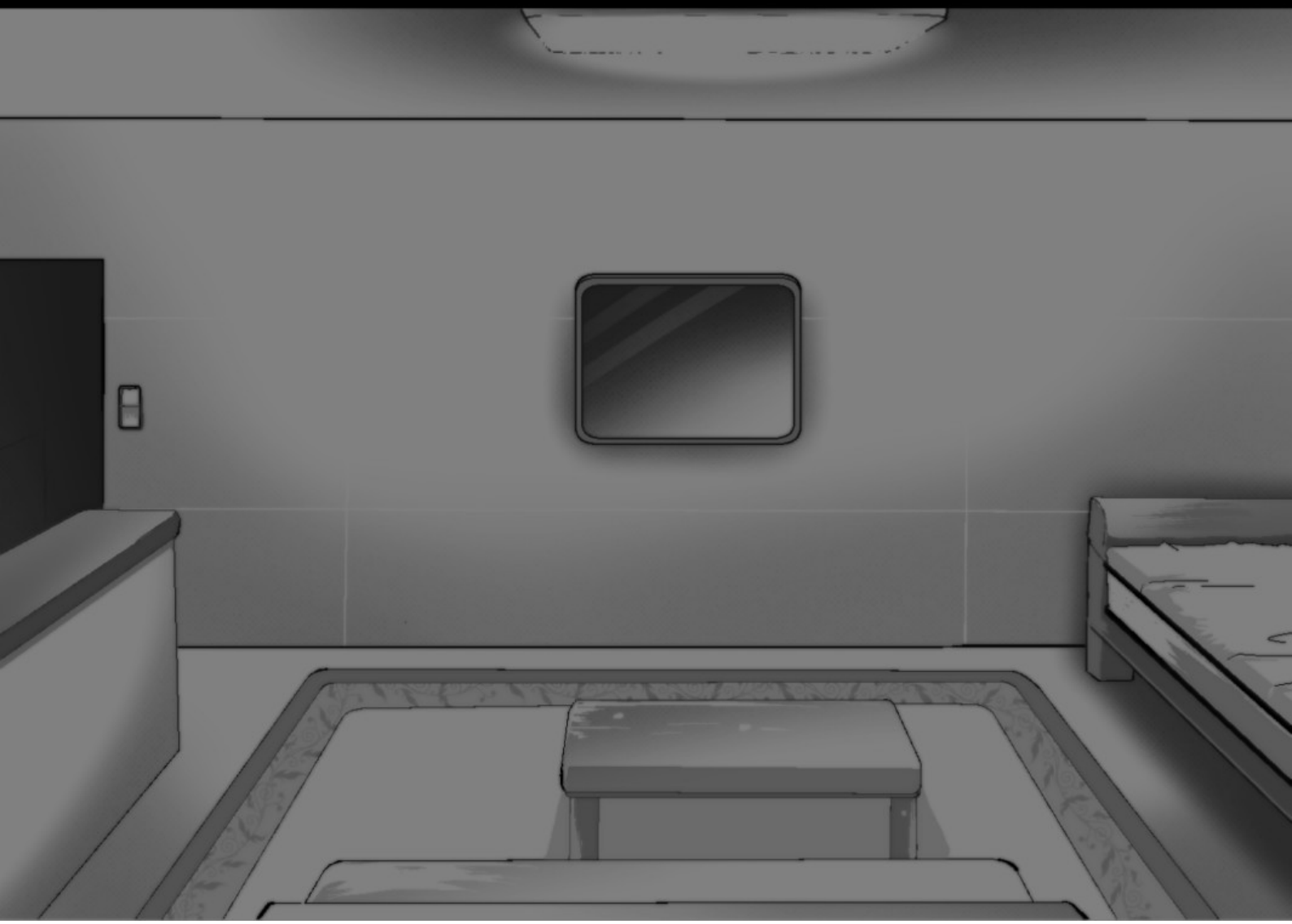
友馬「…」

隣であんなことをされていて寝られるだろうかと思った。

しかし友馬はベッドに身体を滑り込ませると、スッと眠りについた。

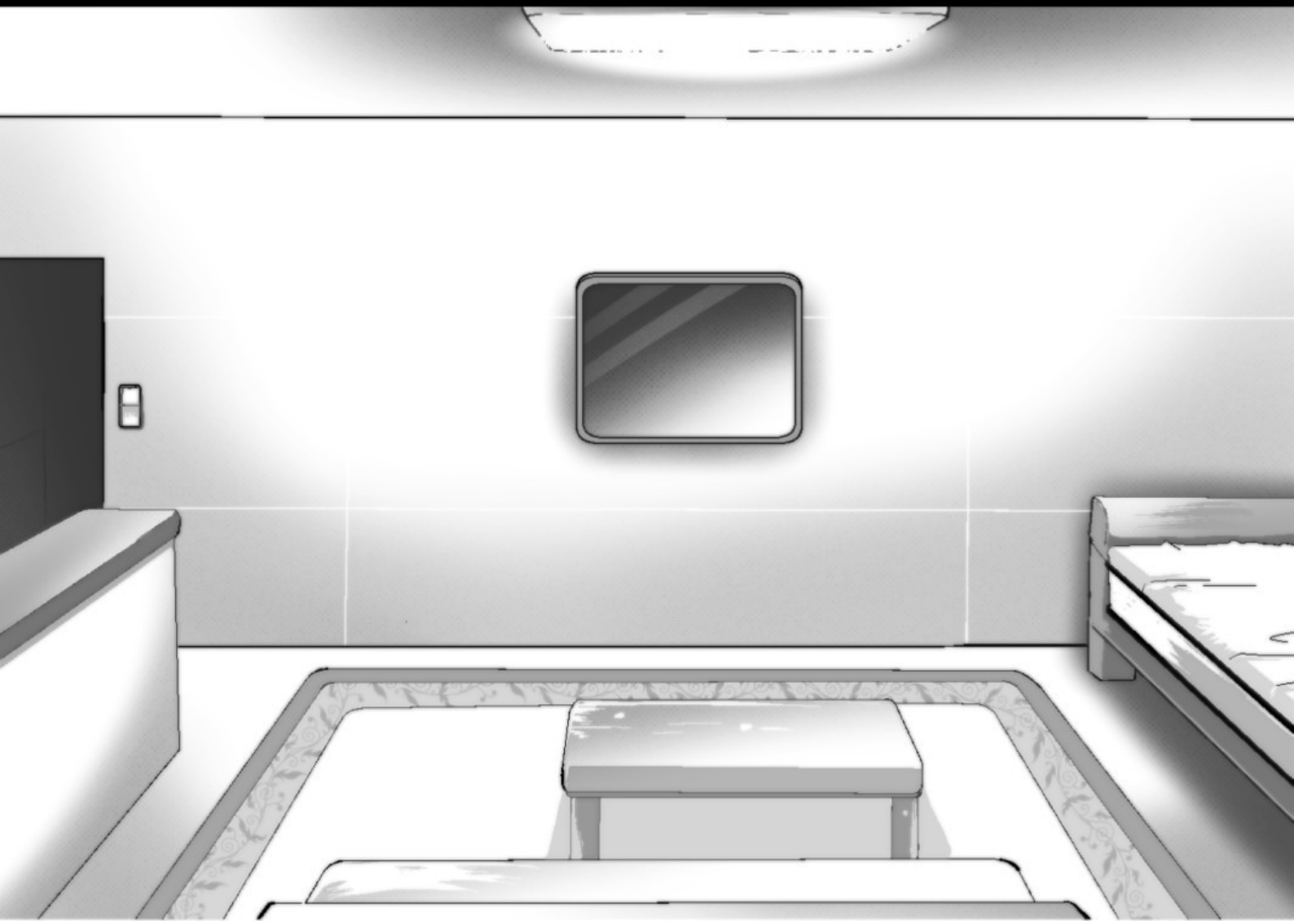
これは夢だったんじゃないか、など現実から目を背けたわけではない。

友馬「……」



次の日、友馬は少し遅くに起きた。

昨夜の出来事は夢だったんじゃないか。



…と、思う間もなく向こうの様子を見たら、当たり前のように二人はセックスしていた。

よー助「みひろちゃん、気持ちいい？」

みひろ「え!?…えっと、その…うん」

「慣れるまで結構かかるのかなって思ってたけど、思ってたより普通に気持ちいいというか…」

よー助「セックス好き？」



みひろ「…よー助くんなんでそういうの言わせたがるの？」

よー助「だってあのみひろちゃんの口からそんな言葉が出るのがヤバくてさ」

「セックス大好き！って言って！お願い!!思ってなくても言うだけでいいから！」

みひろ「…セックス大好き～…」

よー助「もっともっと！連呼して!!」



みひろ「セ、セックス大好き、セックス大好き、セックス大好き…」

言われた通り、律儀にその言葉を繰り返し口にするみひろ。

よー助はその言葉を満足気に聞きながら腰を振る。

ベッドの軋む音、互いの肉体を打ち付け合う音、みひろの声。

それらの音がしばらくなっていた。

耳をすませば僅かに空調音が聞こえる程度の空間だったので、部屋中どこにいても聞こえていた。



みひろ「セックス大好き！セックス大好き！セックス大好き!!」

よー助「みひろちゃん…！そんなにセックス好きなの？」

みひろ「うん…セックス大好き…！大好きぃ…!!」

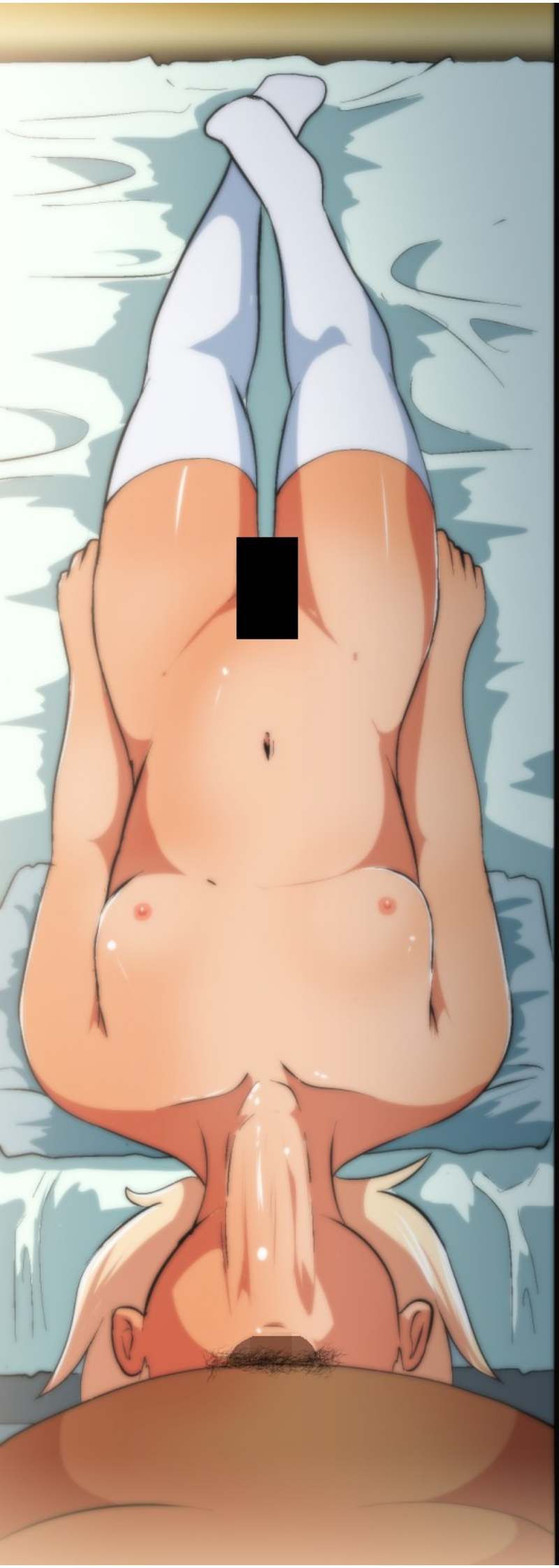
行為中によー助は度々聞く。

みひろは律儀に、返答する。



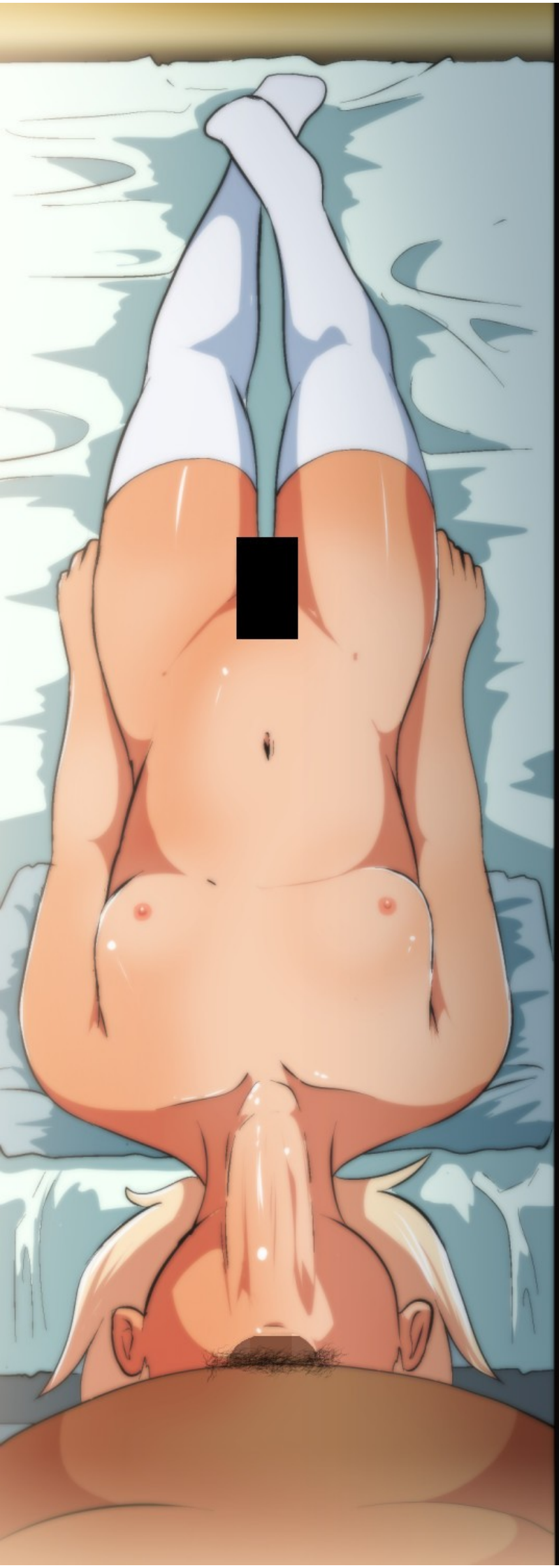
言うだけでいいから、と要求されただけにしてはずいぶん熱が入っているような気がした。





よー助の言った通り、口内に侵入させたソレを前後に動かすと、同じ感覚でみひろの喉元がモコっと盛り上がる。
それが行ったり来たりしている。

みひろ「んっ…んぐ…っ」
よー助「改めてみるとすごいな」
みひろを仰向けに寝かせ、当然のようにその行為を始めたよー助。
よー助「ちんこ突っ込むとその分だけみひろちゃんの喉がボコって膨らんでるわ」



よー助「こんなのが気持ちいいなんてみひろちゃん変態じゃん」

みひろ「っ！ん～～～！んぐぅ～～！」

みひろはよー助の腿を軽くペチペチ叩いて何か訴える。

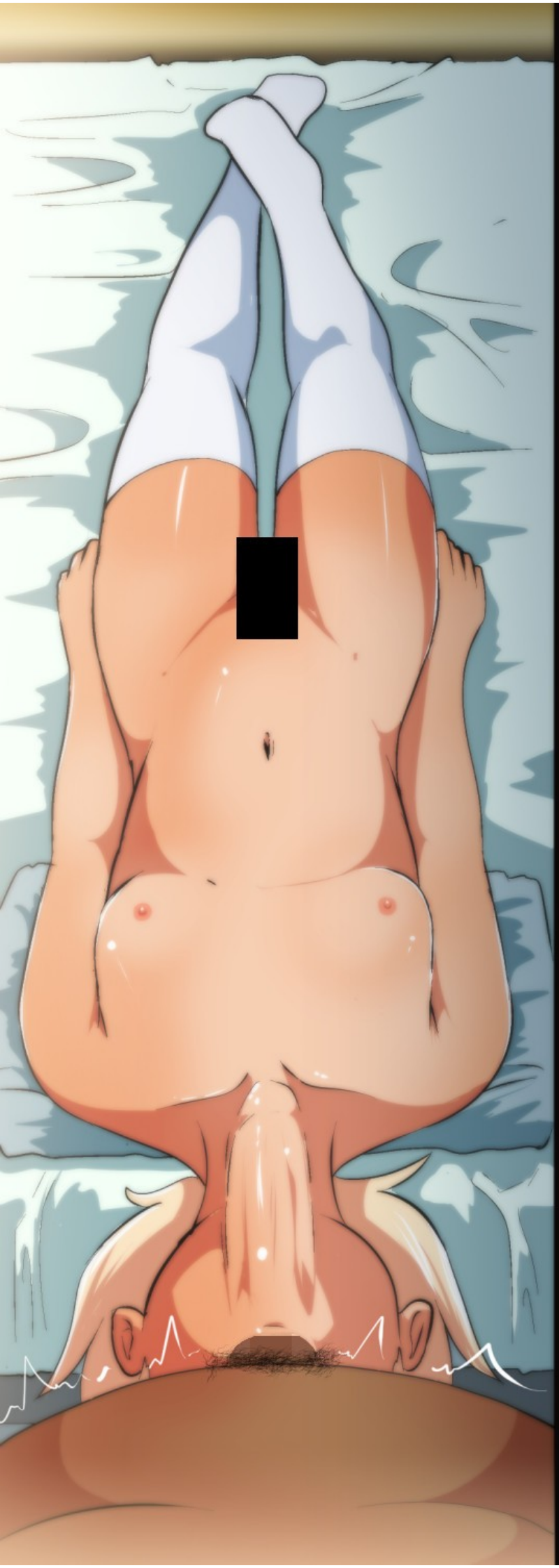
よー助はしっかり意思疎通できている感じでやり取りしている。

よー助「ん？なになに？私は変態じゃない？」

みひろ「んんっ…」

よー助「変態じゃなくて華麗なイラマチオクイーン？なるほどなるほど！」

みひろ「！んん～～っ！」



よー助「私のキツキツ喉まんで骨抜きにしてあげるわ?言ったな!この…♪」

みひろ「んんん~~~っ!」

勝手な通訳で話を盛り上げるよー助。

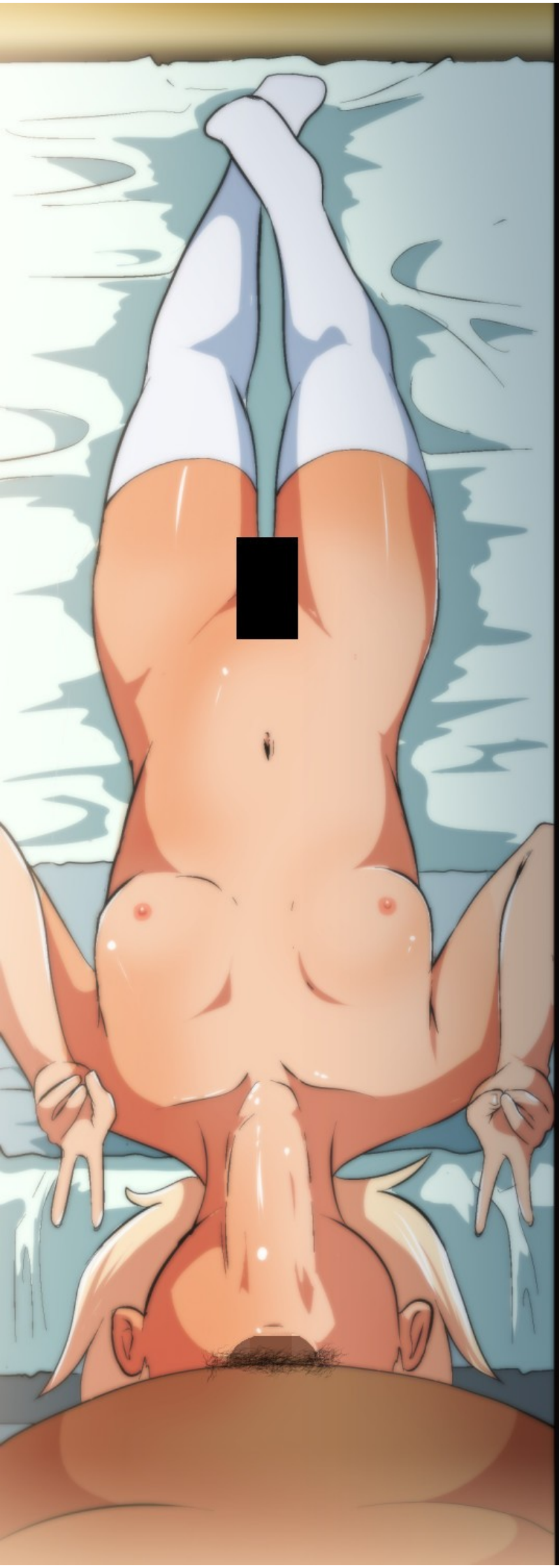
ガンガン腰を打ち付ける。

よー助「~~~っ!イくっ!イく…!イラマチオクイーンに搾り取られるぅ…!!」

みひろ「…」

一方的にはしゃいでいただけに見えた一連の行為。

しかしよー助がみひろとそのままの形でやり取りを続ける。



よー助「ハァハァ…気持ちよかった？みひろちゃん…？
もしそうだったらピースして(笑)？」

みひろ「…」

顔面に巨躯でのしかかられている幼馴染は両手で
しっかりピースしていた。

よー助「みひろちゃん体柔らかいな」

みひろ「えへへ、運動は苦手だけど柔軟性はけっこうあるんだ～」

会話だけ聞けば何という事もない同級生同士の会話だが、二人はしっかり体を重ね合っている。



みひろ「…イラマチオもそうだけど、よー助くんってこういうのしかかる系好きだよね」

よー助「あー言われてみたらそうかも…何か気になった？」

みひろ「えっと、その…実は私も割と好きかもしれないというか…」

「…なんか、逃がさないぞ～って感じがすきっていうか」

よー助「…」

みひろ「お前は俺の女だ～、絶対誰にも渡さないぞ～って感じでドキドキするかも…」



よー助が急にペースを早める。ホールドしていた体勢が崩れないようにぐっと力を入れて固める。

よー助「お前は俺の女だ～！誰にも渡さねーぞ!!絶対逃がさないからな～！」

みひろ「あ～ん♪誰か助けて～♪」

こ芝居をいれてふざけ半分の感覚で行為を続ける二人。

もうただのそういったカップルのようなノリだった。

よー助「みひろちゃん！恋人ごっこするぞ！分かったか**みひろ**！」

みひろ「っ！(呼び捨て…♪)」

「…はーい♪…、**よーくん**♪」



よー助「みひろぉ！俺の女！俺の女ぁ!!」

みひろ「あぁん♪よー君激しいよぉ～♪」

変に熱が入ってきたようで二人はお互いを呼び合いながらはしゃぐ。

よー助「幼馴染の平野のことなんか忘れさせてやる！」

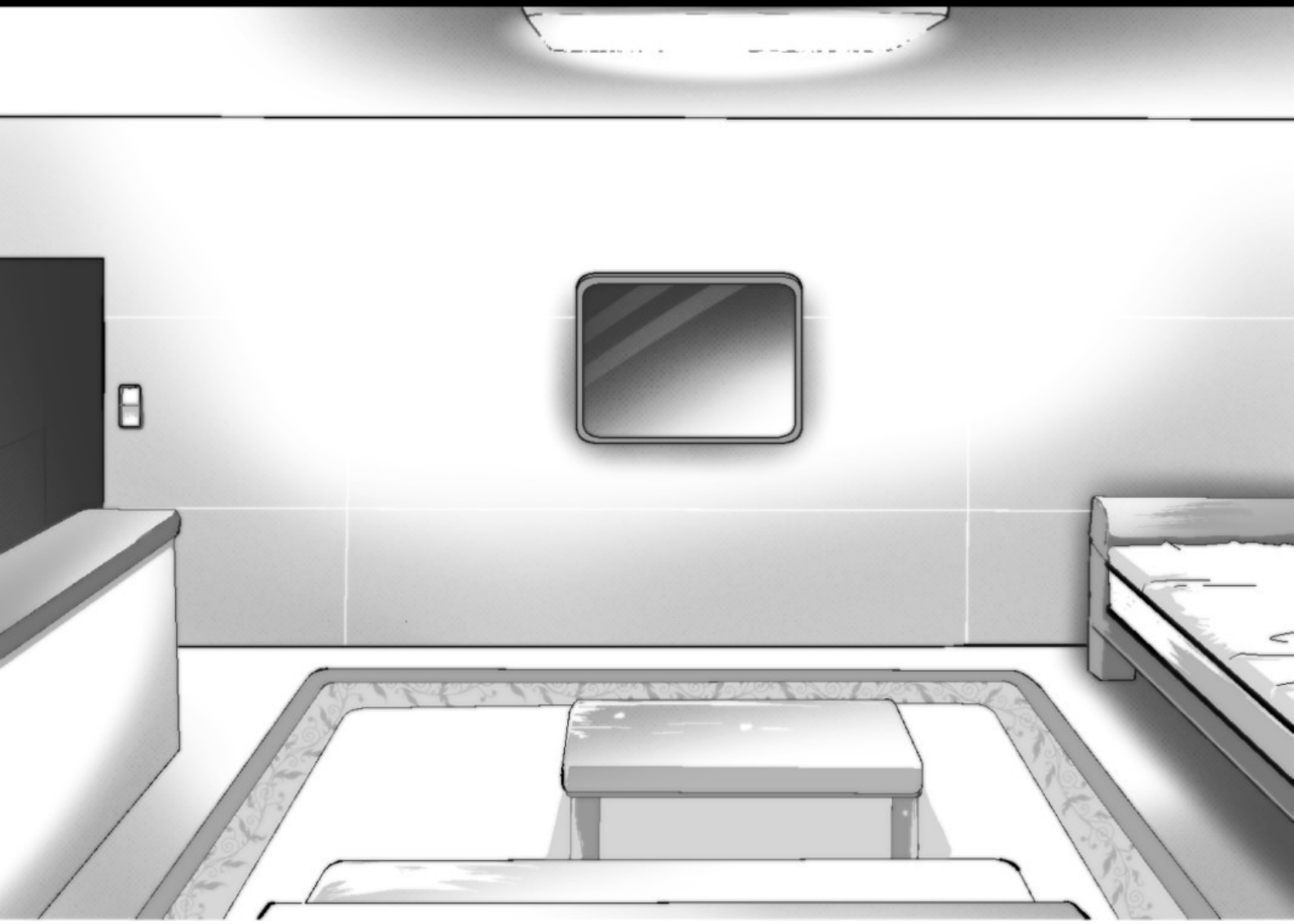
みひろ「あぁ…♪友馬君ごめんね…私もうよー君にぃ…♪」



「…」

友馬「…ん？」

みひろ「…え」



みひろがフと顔を上げたと思ったら、その状態のまま固まった。

比喩ではなく魔法で固められたかのように本当にピタッと止まっている。

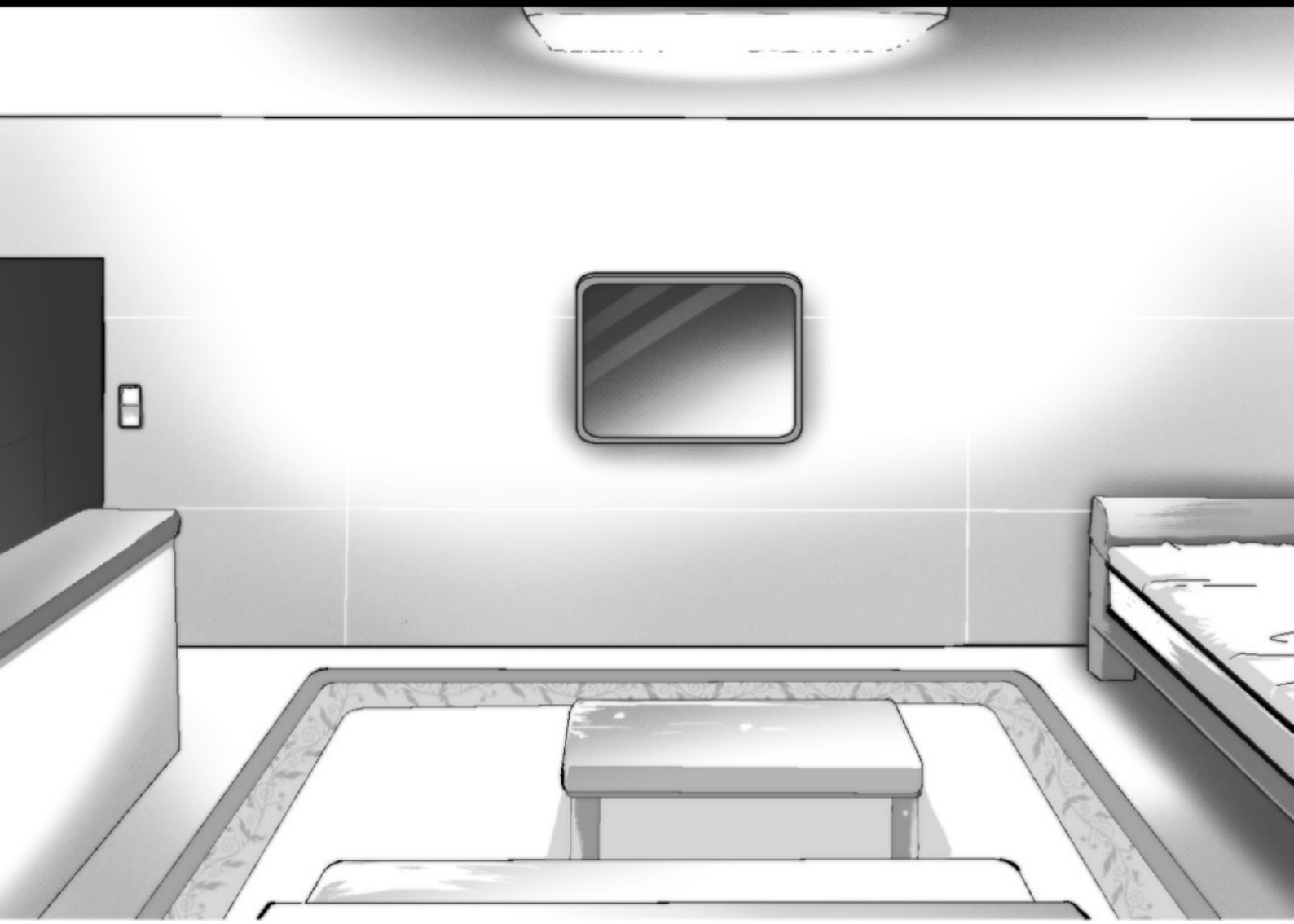
遅れてよー助も顔を上げた。

が、同じように正面を見てガチっと固まった。

正面…というより友馬のいる見えないはずの壁の方向。

二人からはただの壁としか認識されていなかったはず。

なのに、しっかりと壁越しの友馬と目が合っていた。



友馬「…ぁ」
みひろ「え…ぁ……え？」
よーすけ「お…」

もう完全に認識できているのが分かった。
目を合わせたまま、口だけパクパクと動かすみひろ。
何故このタイミングで急に見えるようになったのか、この状況をどう処理すればいいのか。
どう処理できるのか。



友馬からしてもやっと二人とコンタクトをとれるようになれたが、今、何をすべきなのか全く判断できない。

ゆっくり手を前に伸ばす。ピタッと分厚いガラス面の感触があった。

向こうからも確認できるようにはなったが、壁がなくなったわけではないようだった。

友馬は少しだけホッと安心してしまった。

「・・・」

三人が全く動けなくなった状態が続く、かと思った。





よー助「…みひろぉ!!」

みひろ「…おっ！」

友馬「！」

よー助がみひろとの行為を再開した。



みひろ「よ、よー助くん…！今はダメ…！」
よー助「どうしたみひろぉ！さっきみたいによー君って呼んでくれよ」
みひろ「さ、さっきのはそういうごっこ遊びで…」
よー助「**…好きだみひろ！**」
みひろ「！」

行っていることはどう見てもごっこ遊びの範疇ではない。が、みひろはそれほどまで動揺していたのだろう。
それよりも、よー助の叫んだことに、みひろと友馬はピクッと意識を向けた。



よー助「…こんな密室にみひろみたいな可愛い子と二人きりで閉じ込められて…最初はどうやってエロい事しようかとしか考えてなかった」

みひろ「…」

よー助「みひろの優しさにつけこんで、そういうことする関係になって…」

友馬「…」

よー助「…でも、みひろは優しすぎて…一緒に過ごすうちに本気で可愛いなって、守ってやりたいって思うようになってた」

みひろ「…」

よー助「幼馴染の平野がいないこの状況で、こんなことを言うのは卑怯だって分かってる。でも、それでもみひろが好きだ！」



よー助が言っていることに友馬は何か引っかかった。
どう考えてもよー助にも友馬の存在が認識できているはず。
みひろ「…」
しかしみひろは、よー助の心情を察してしまった。

みひろ「…そんなこと言われても」
「…もし友馬君にこんなところ見られてたら、どう説明すればいいか分からないよ！」
友馬「……みひろ…？」



みひろ「私もね…初めはよー助くんと二人きりで一緒に過ごすなんてどうしようって思ってた」

「…エッチな事するようになって、恥ずかしかったり激しすぎて大変だなって感じたりもしたけど…」

「…なんだかんだ、よー助くんとそういうことしてるの、楽しかったの！」

友馬「みひ…ろ…」

みひろ「…友馬君のことだって最初の頃は毎日想ってたけど、段々よー助くんとの毎日で塗り替えられていく気がして…」



二人はまるでここにはいない友馬に向けて発するような言い方をする。

その本人は目の前に見えているはずなのに。

再び自分の姿が見えなくなってしまったのか、それとも見えるようになったのは気のせいだったのか。

…そうではない。友馬は感じとった。

二人は見えないふりをしている

突然目の前に現れた友馬を見なかったことにしている



よー助「平野への想いを塗り替えるなんて考え方しなくていい」
「幼馴染との思い出は残してていいんだ」
みひろ「…」
よー助「…俺たちで新しい関係を築いていこう、みひろ」
みひろ「…うん」
「よーくん♡」



よー助「好きだ、みひろ」

みひろ「…私も、よーくん」



二人はそこからは、ただひたすら愛し合った。

・・・・・・

なにもない壁に向かって異様に幼馴染の名前を多用しながら愛を披露した。

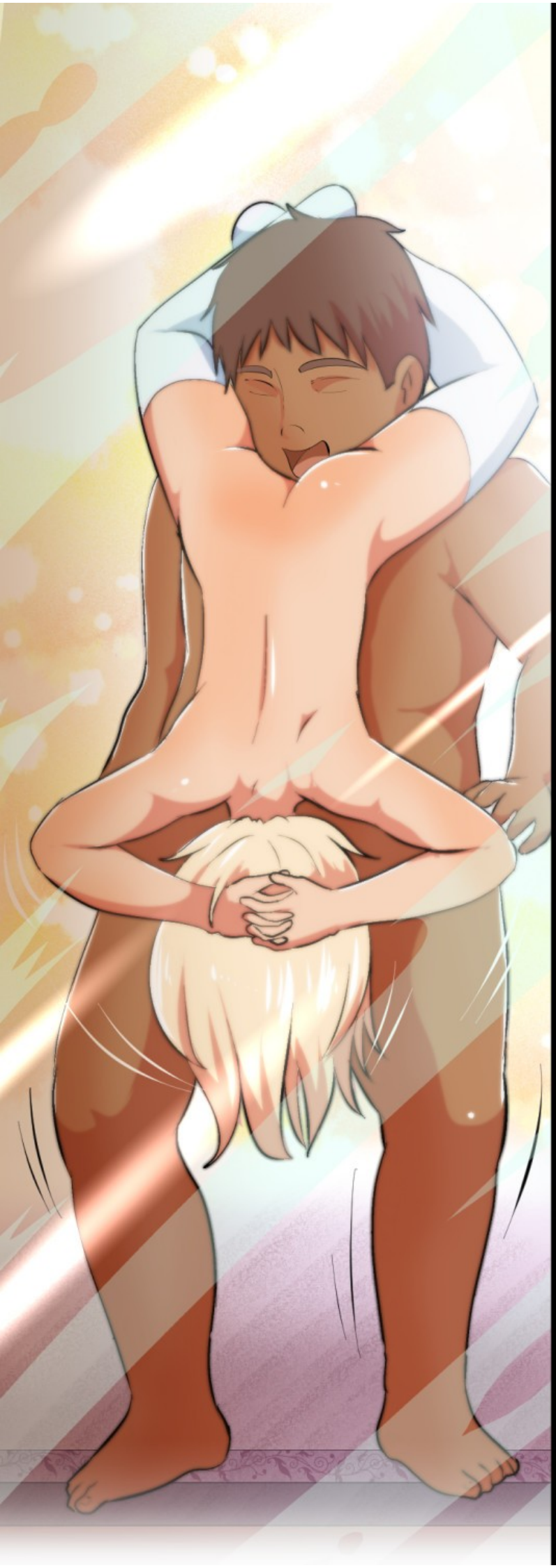
ヤケになったわけではない。

溢れて止まらない愛をとにかく他の誰でもない幼馴染に見ていてほしかった。

・・・・・・・・・

そこに友馬なんているはずがないのに。





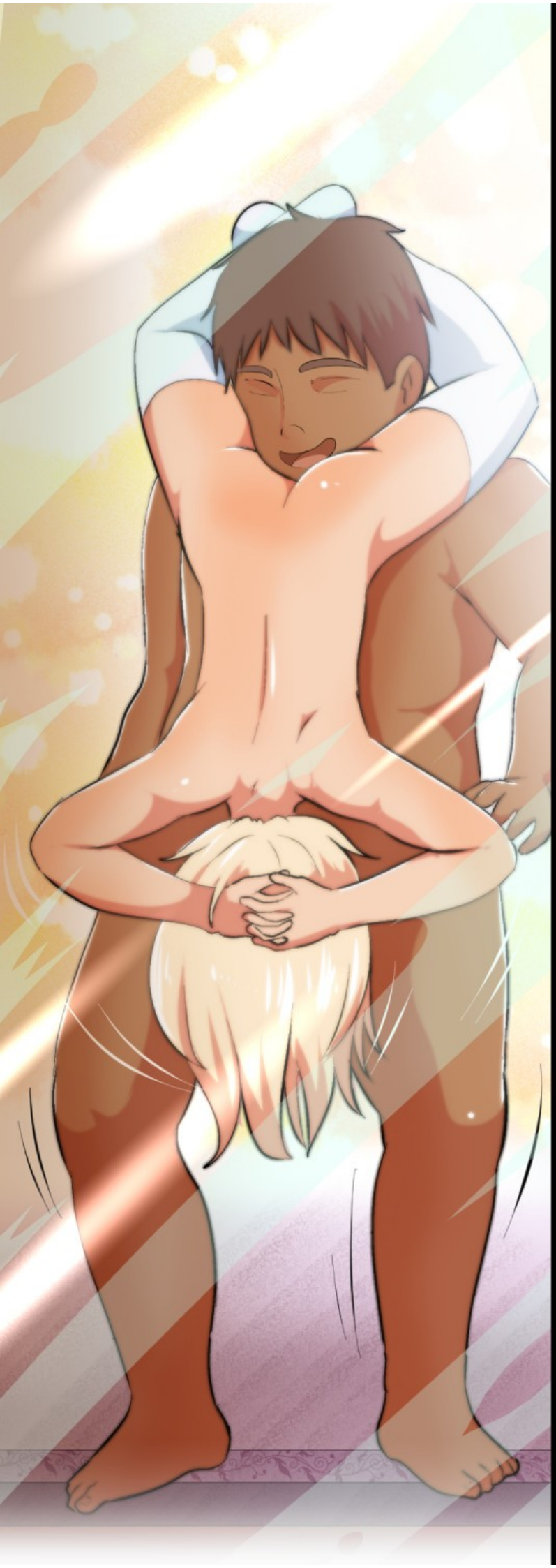
よー助「みひろの振り子イラマめっちゃ気持ちいいよ♪」

「こんなことできるの余程の変態だからかな」

みひろ「ん～！」

よー助「あー！ごめんごめん！みひろは変態じゃなくてイラマチオクイーンだったなｗ」

みひろ「んっ♪」

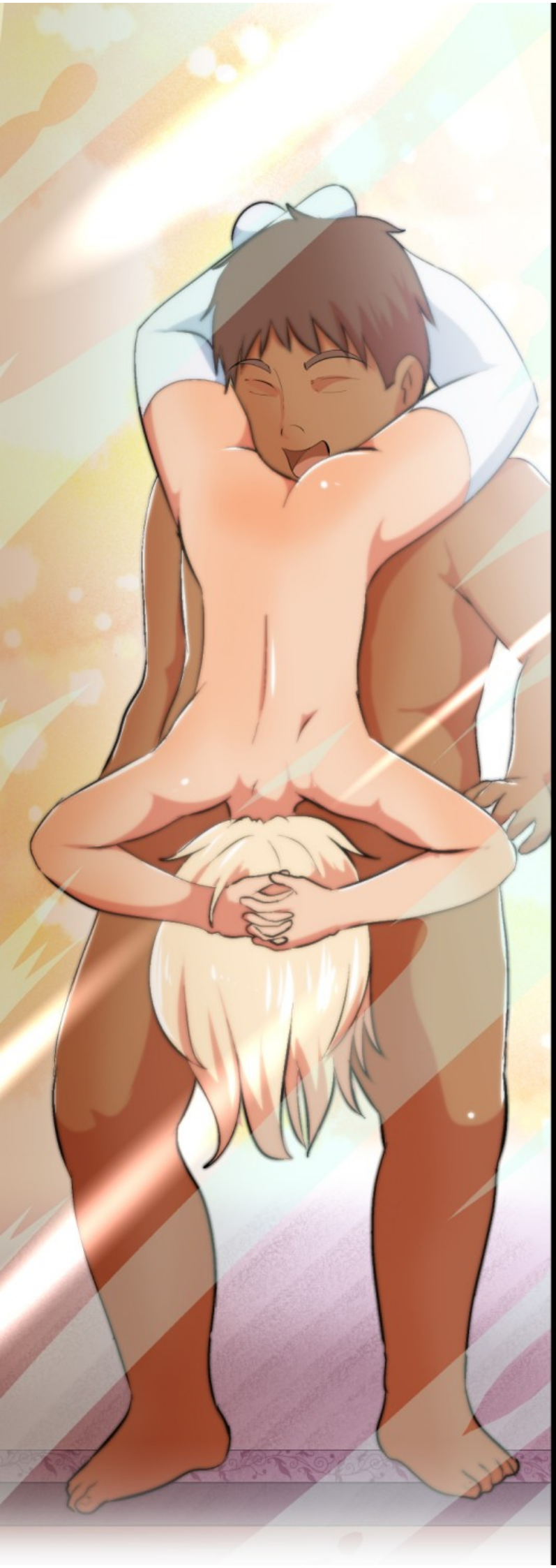


よー助「もし平野がこれ見たらなんて思うだろうな」

「きっしょ！もうお前なんか幼馴染じゃねーわ二度と話しかけんな変態女！」

「…なーんて言うわけないか！あいつ優しいもんな。俺みたいなやつにでも気さくに話しかけてくれるし…ｗ」

よー助「平野に俺たちの関係を打ち明けるときはちゃんと言おうな！」



よー助「よー君のなが～いちんちんで
堕とされました～って(笑)」

みひろ「…ん(笑)♪」



みひろ「んっ…」

よー助「みひろ軽いから簡単に持ち上がるな」

みひろ「何この格好…カエルさんみたい…」

よー助「ゲコゲコｗｗ」

みひろ「も～ｗよー君なにしてるの(笑)」

よー助「みひろもやってｗｗゲロゲロ～ｗカエルセックス(笑)」

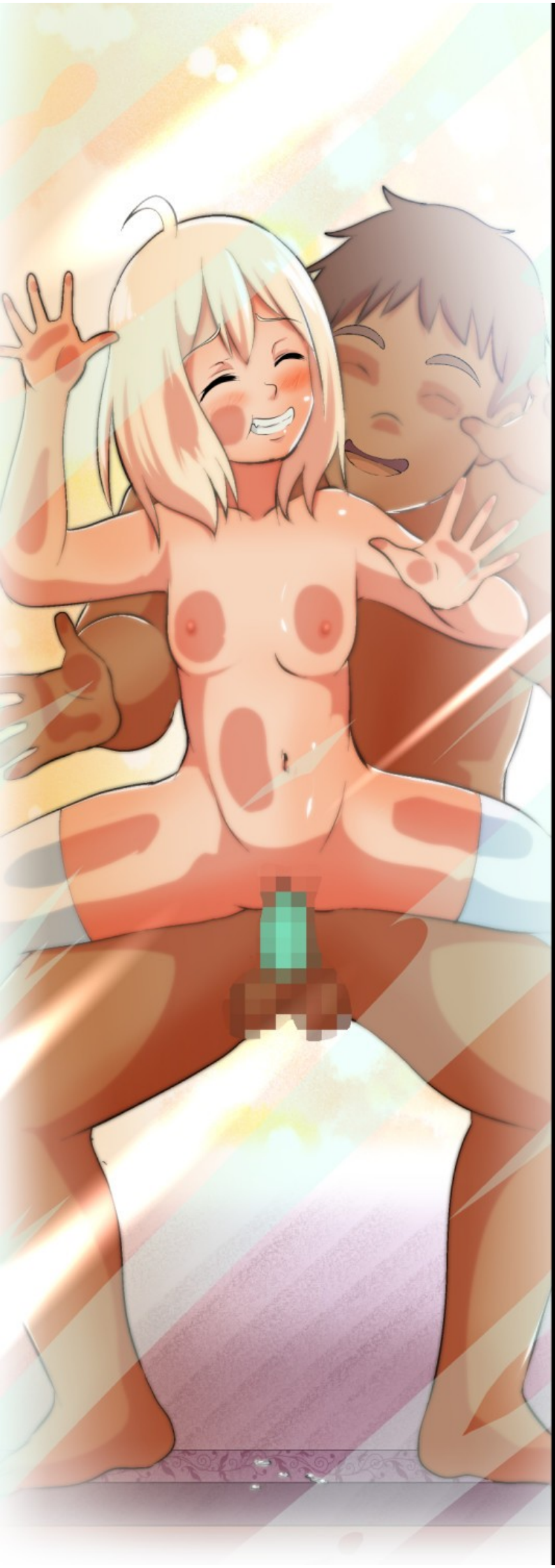


みひろ「…けろけろ♪」
よー助「かわいいw」
みひろ「けろけろ♪げこげこ～w」
よー助「みひろ愛してるゲコ～w一生セックスしてようゲコ～w」
みひろ「よー君だ～い好きけろ～♪私も愛してるけろ♡」
よー助「もし平野が見てたらなんか伝えたいことあるゲコ？w」



みひろ「友馬く～ん♪私はこんなおバカなごっこ遊び感覚でセックスするエロ女になっちゃいました～ｗこれからはよー君と新しい関係を築いていくから心配しないでね～ｗｗ」

よー助「幸せにしま～すｗｗ」



二人「～～～っ♡!!」

二人は見えない誰かに伝えるようなやり取りをしながら、
カエルセックスとやらをしばらく続けた。

ジョボボボボ――――

みひろ「～～～っ」

よー助「はぁあ…みひろ…みひろぉ……愛してるぞみひろぉ♡」

みひろ「～～～～♡」



よー助「なんでこんなことまでしてくれるんだ～？」

みひろ(そんなの…よー君を愛してるからだよ♪)

よー助「みひろ…結婚してくれ、俺と」

みひろ「！っ…」

よー助「もうみひろ以外の女なんて考えられない…マジで俺の女にするからな」

みひろ「…」



みひろ「…おしっこ飲ませながらプロポーズって…」

よー助「引いた？」

みひろ「……」



みひろ「…素敵♡」

よー助「さすが俺の惚れた変態女♡それでこそみひろだ♡」

みひろ「こんな女にした責任、ちゃんととってね♡」

よー助「当たり前だ♪」

「ほら、交代だ♪今度はみひろのおしっこ飲ませろ♪」

みひろ「やぁん恥ずかしい♪よー君のエッチ♡」



友馬「…」

二人はそのまま一緒に浴室に入っていった。

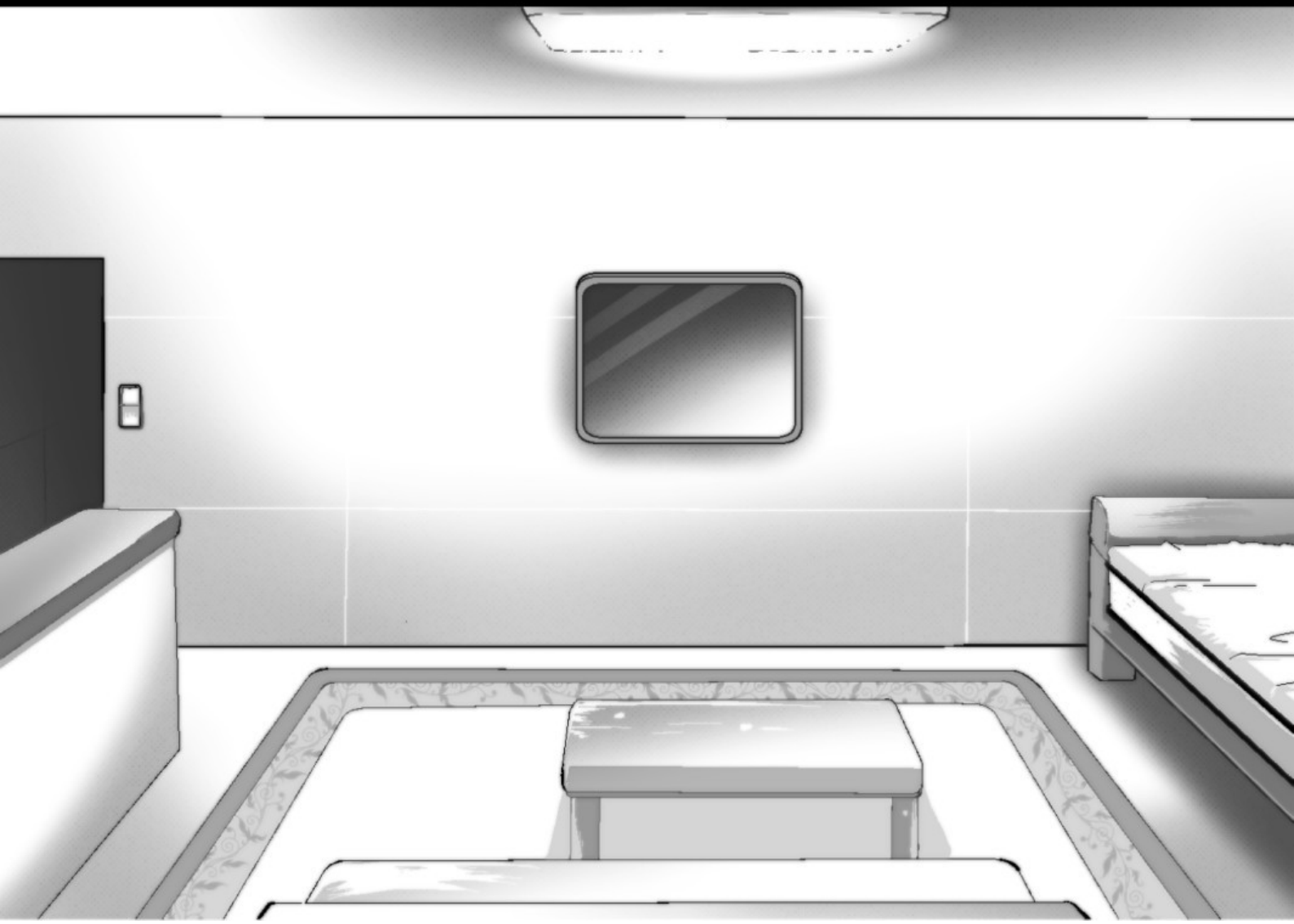
傍観していた友馬。

一人残された者。

ピーっと電子音が鳴る。

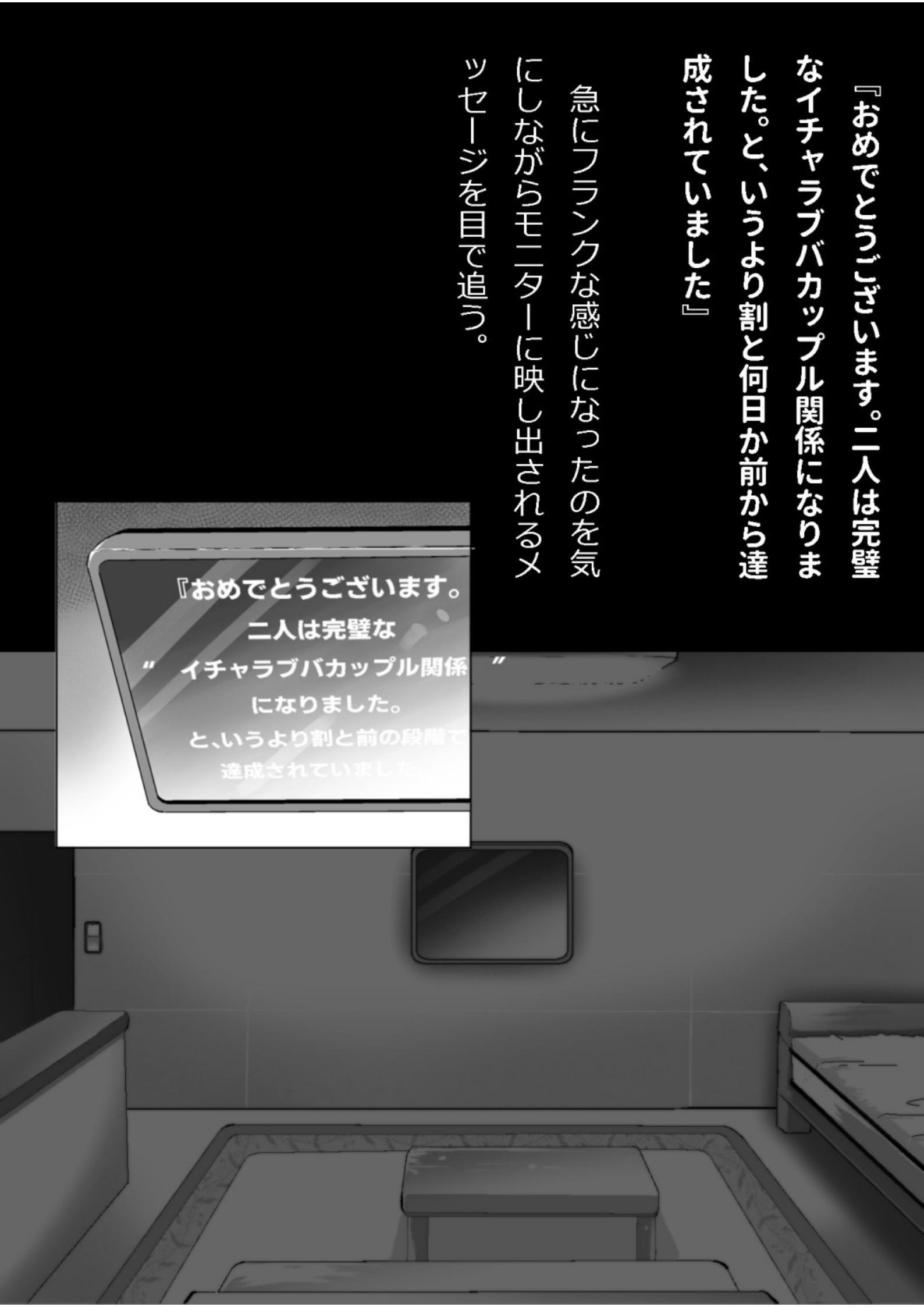
何事かと自分の空間に視線を移すと、

久しぶりにテレビモニターがついているようだった。



『おめでとうございます。二人は完璧なイチャラブバカップル関係になりました。と、いうより割と何日か前から達成されていました』

急にフランクな感じになったのを気にしながらモニターに映し出されるメッセージを目で追う。

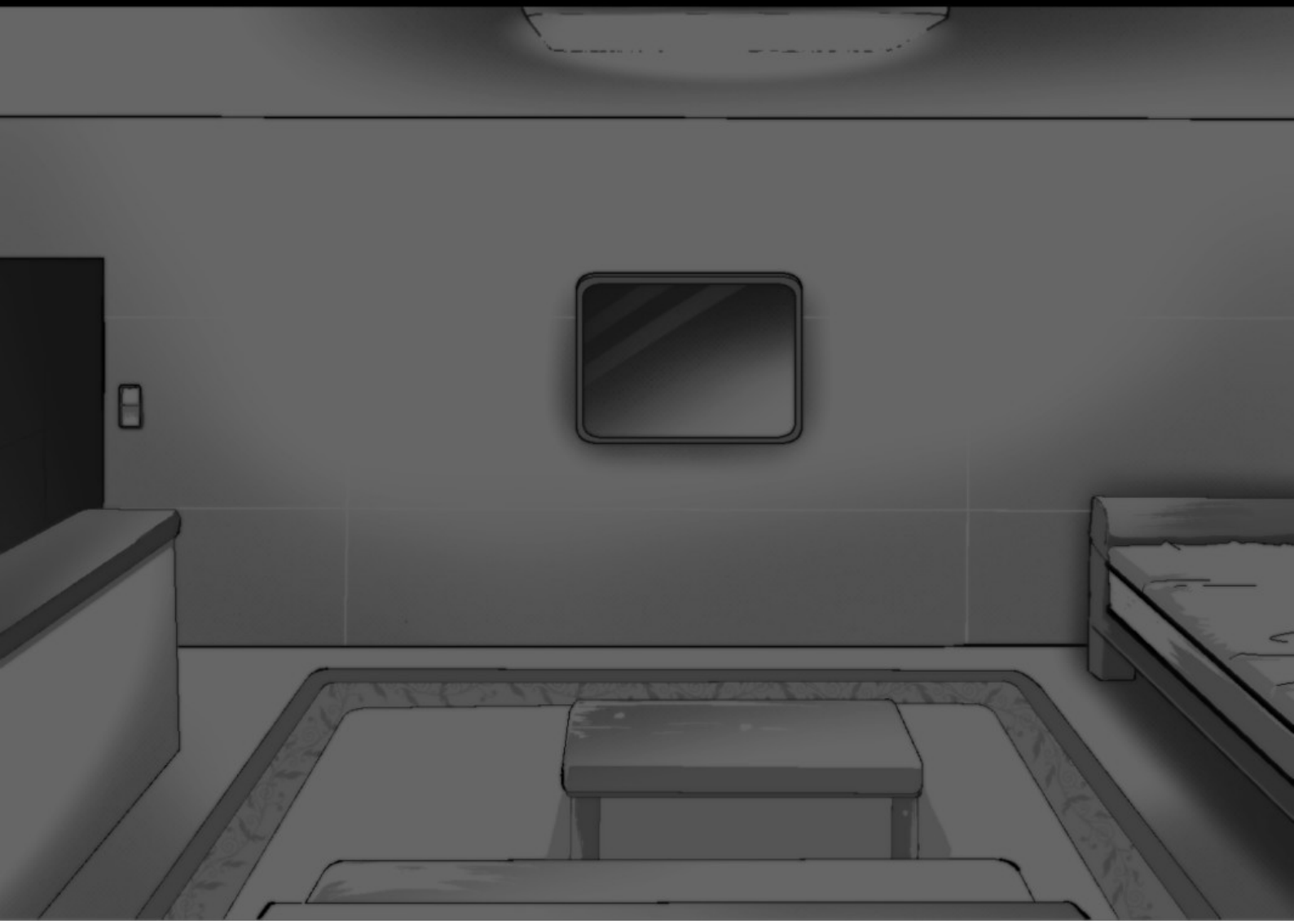


あなたたちをこの空間に連れてきたわたしはいわゆる生命体ではありません

あなたたちの認識としては神さまといわれる概念と捉えてもらうのが一番手っ取り早いと思います

二人は本来夫婦になるはずでしたしかし僅かなタイミングのズレから運命の糸が少しずつほころび、関係性が変化してしまったのです

そのため多少無理やりではありつつも二人がコミュニケーションをとる場を与えました



選択肢を与えます

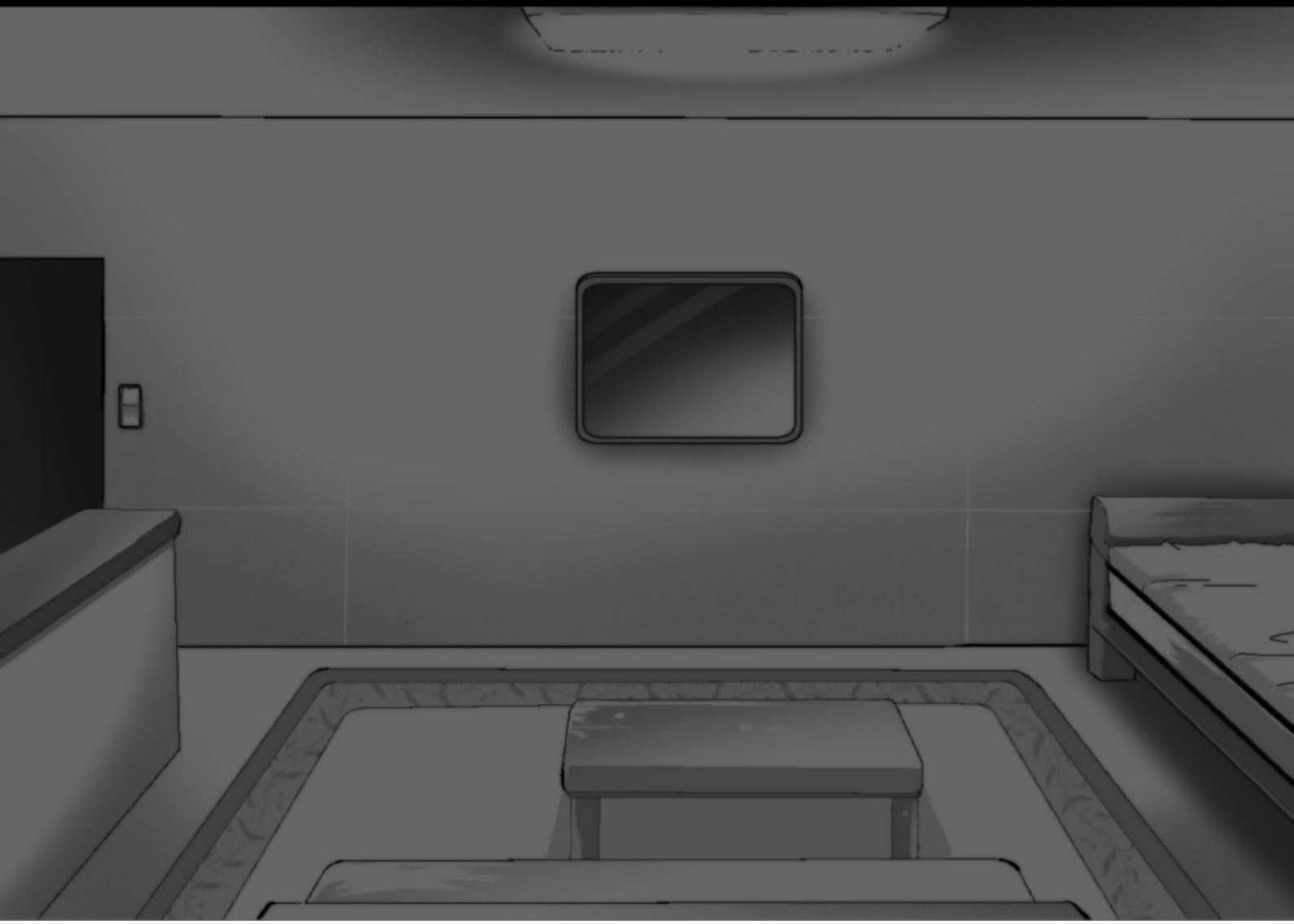
二人は関係を築き上げましたが、現実に戻ればお互いに学校や家庭での環境、立場を踏まえる必要があります

何より幼馴染として人生のほとんどを一緒に過ごしたあなたにとっても重大な選択になるでしょう。

『選択肢』

↓　記憶はそのまま　二人の築き上げた関係を現実に繋げる

↓　記憶の抹消　ここでの出来事はすべてなかったことにする



『私は決してあなたの選択を拒絶しません。どちらが正しいということは決してありません』

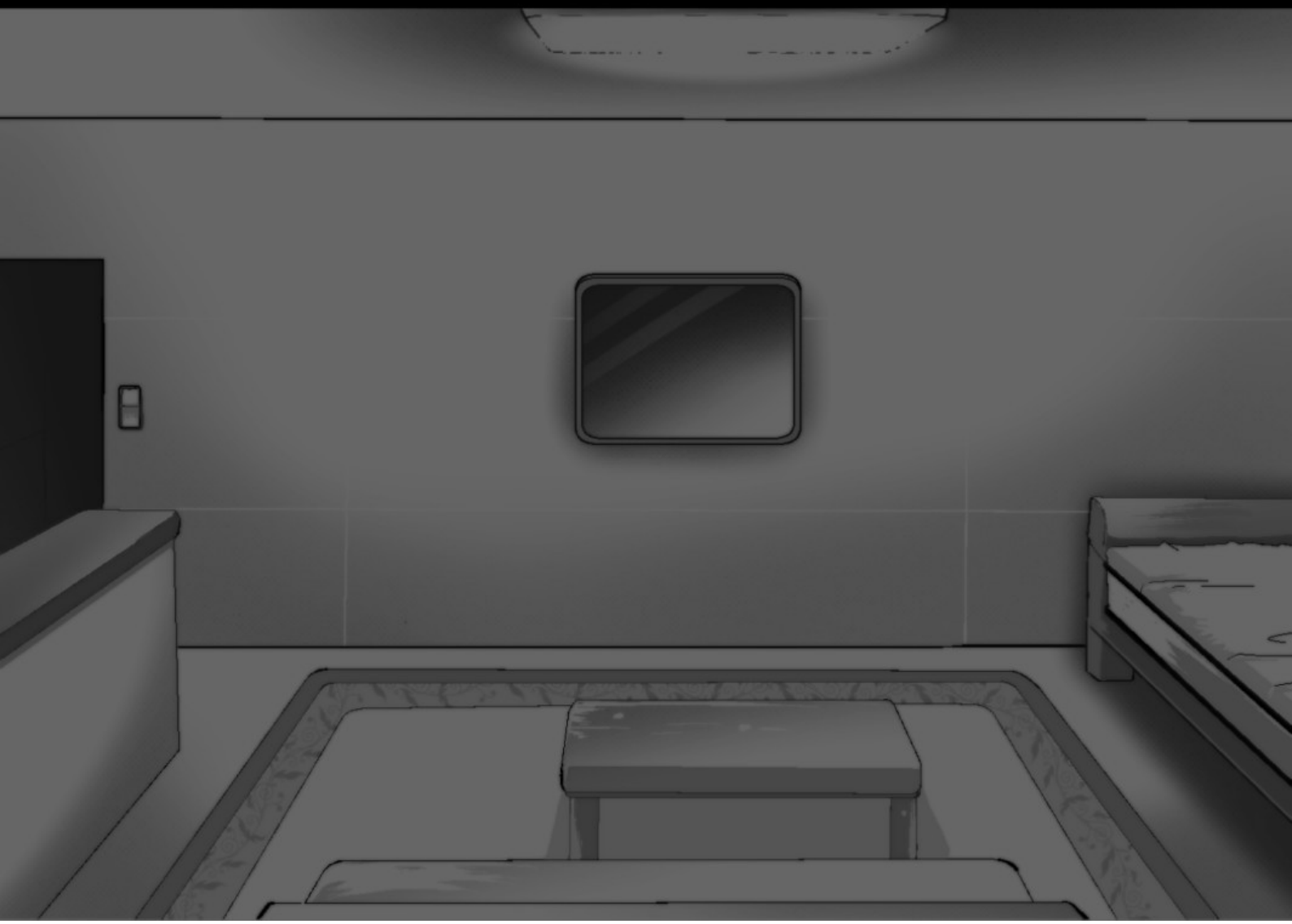
友馬「…」

二人は本来夫婦になるはずの存在だった。タイミングのズレから運命が変わってしまった。

急にそんなこと言われてもそうだったんですか、なんて納得できるわけがない。

しかし、なんだかんだよー助がみひろを大切に想っているのは本当だろう。

みひろも…そのよー助を同じように…。



友馬「…でも」

現実では、あの世界での幼馴染は間違いなく俺だ。よー助ではない。

俺だってみひろと築き上げてきた関係があるんだ。

一方的にこんなことを言うのもどうかと思うが、

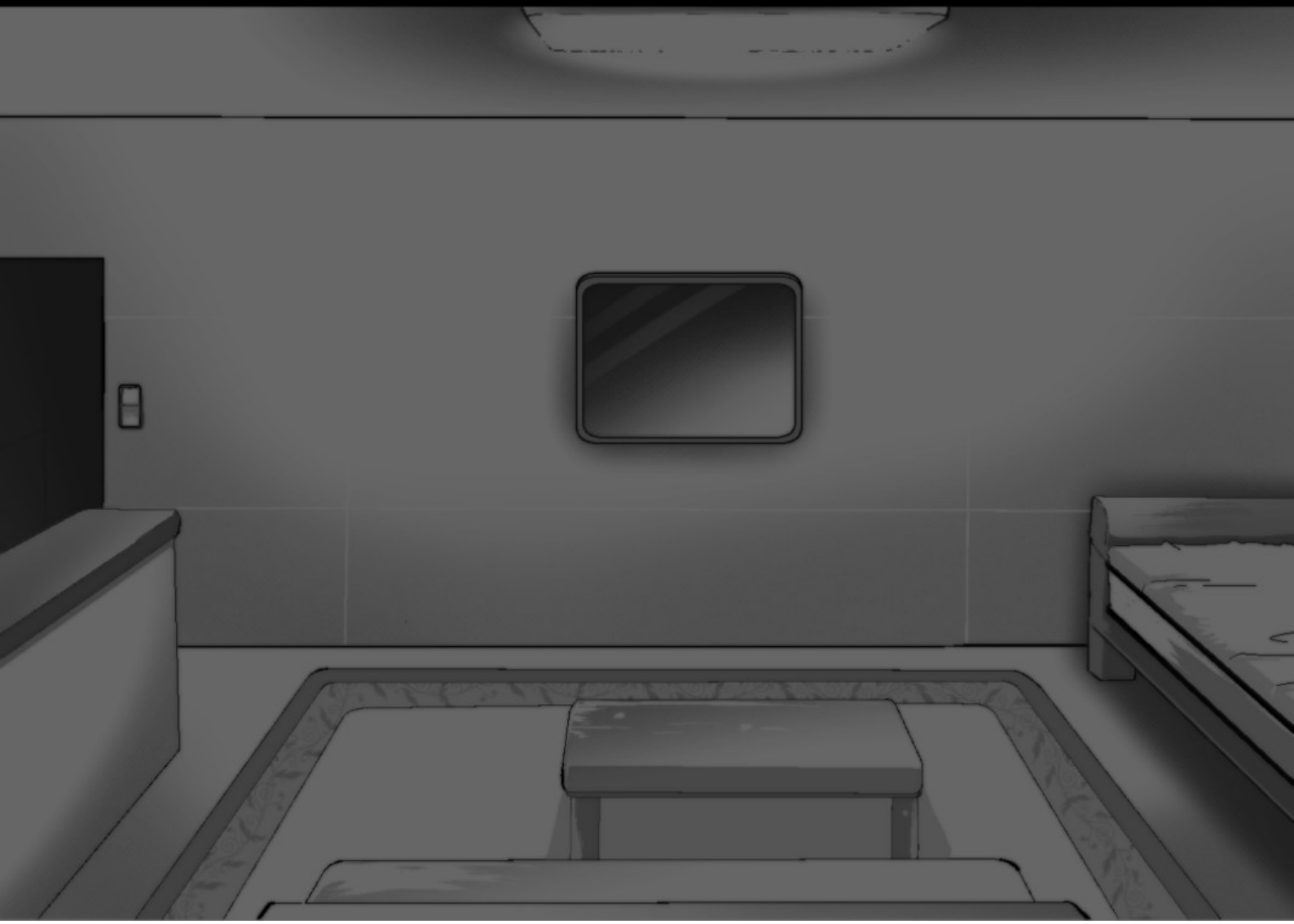
俺とみひろはそのうち自然と付き合ってはいただろう。

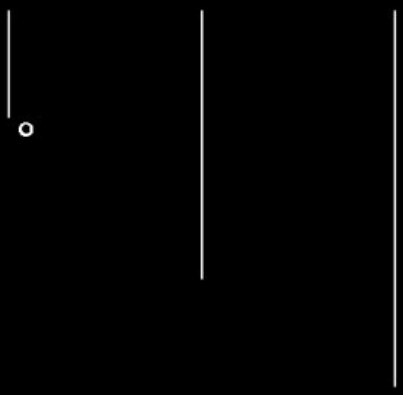
そのまま結婚だってしていたと思う。

みひろだって同じ気持ちだったはずだと自信を持って言えるくらいの

関係性だと思っている。

友馬「…俺は……」





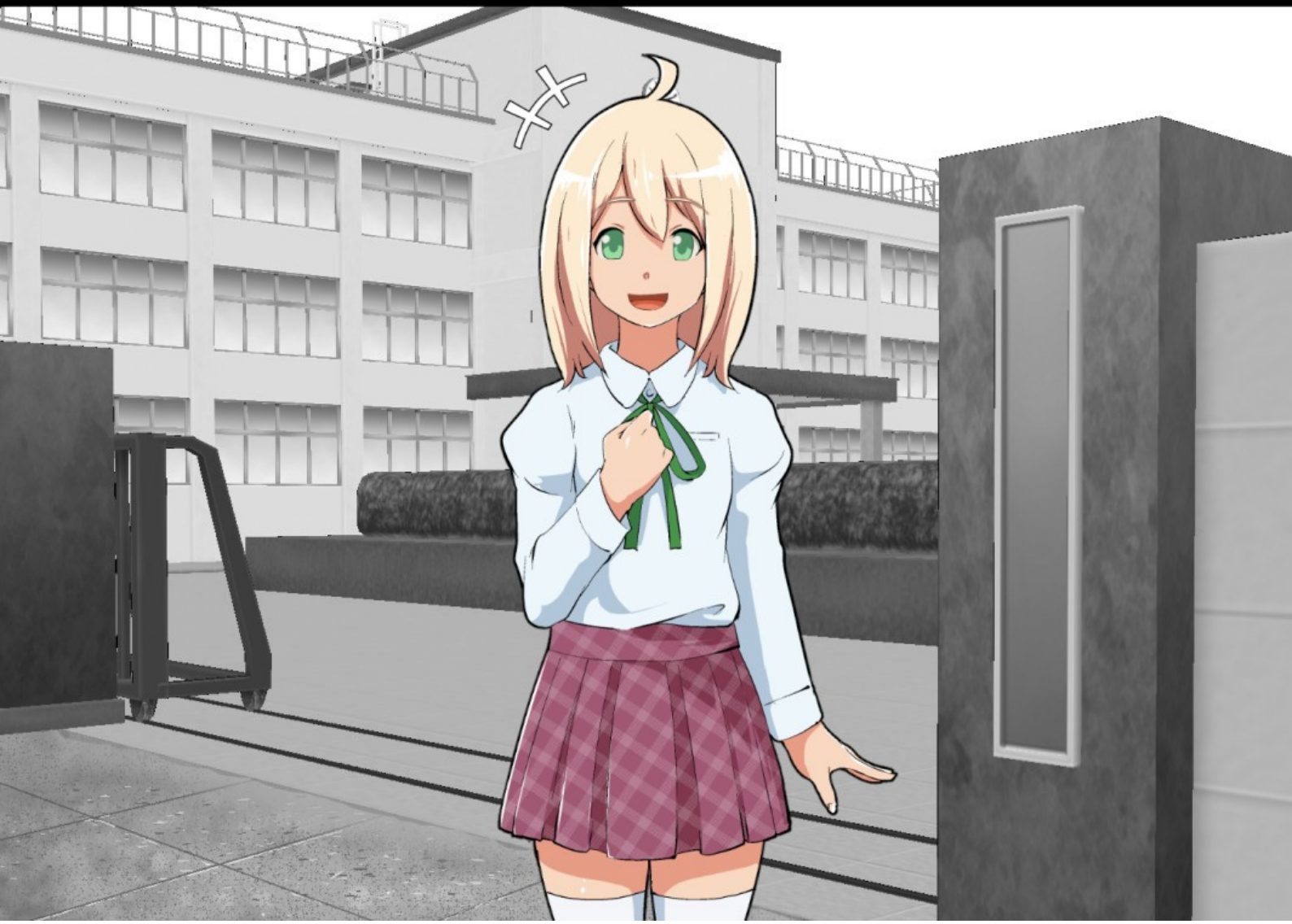
「友馬く～んおはよー。」

地元の学校へ通うごく普通の男子生徒、平野友馬。

その幼馴染である女の子、岩原美陽色(いわはら みひろ)。

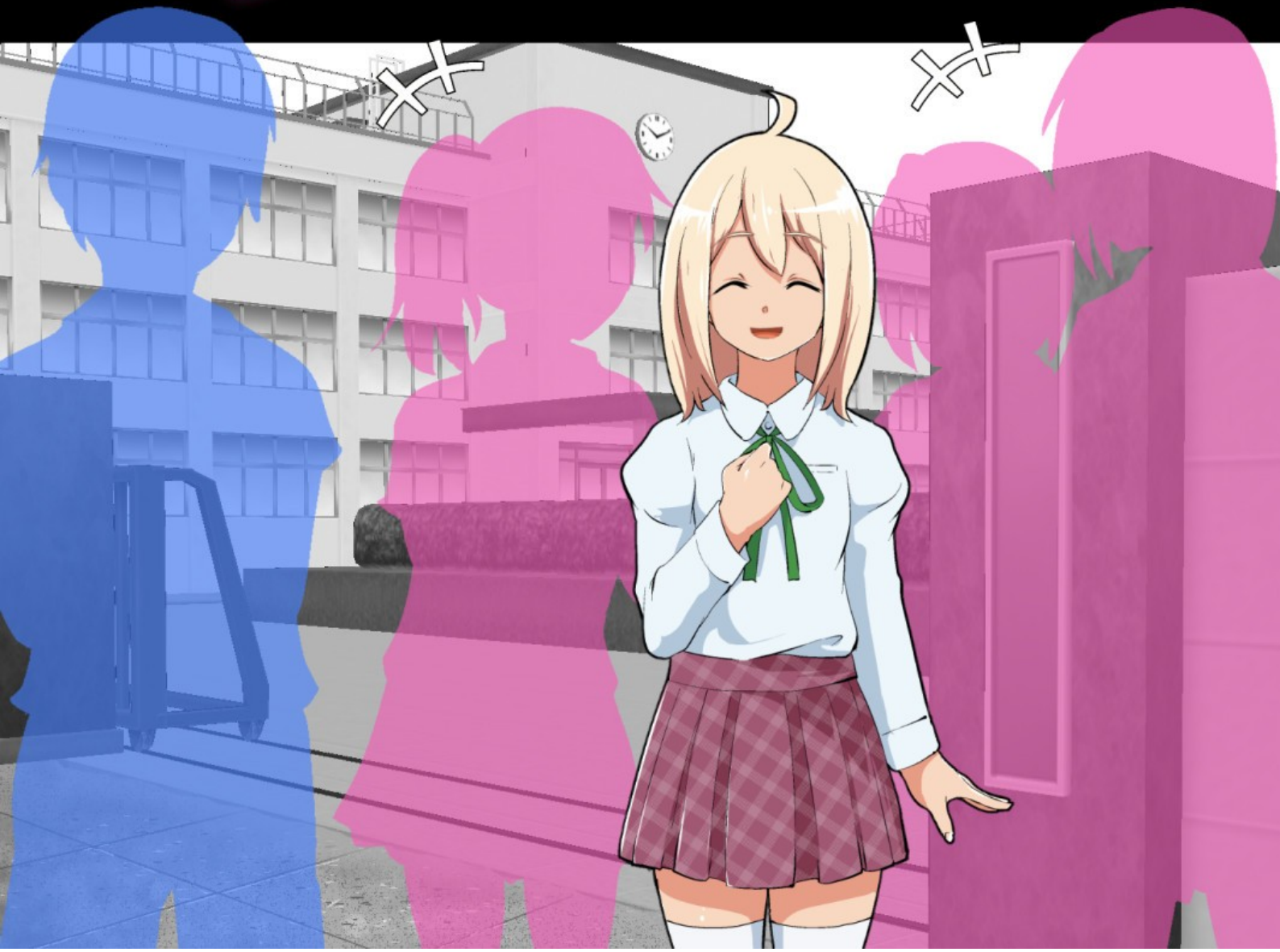
二人は家も隣同士で小さい頃からずっと一緒だった。

当たり前のように同じ学校へ進学し、当然のように一緒に登校する。



みひろは大人しく控え目な性格ではあったが、誰にでも優しく決して傷つけるようなことはしないので、クラス女子からは妹のように可愛がられている。

優しすぎて勘違いさせてしまうのか、男子の隠れファンが割といるらしい。



担任「えーと、雑務係は確か岩原と下川だったな。放課後ちょっとやってほしい事あるから残ってくれ」

みひろ「はい」

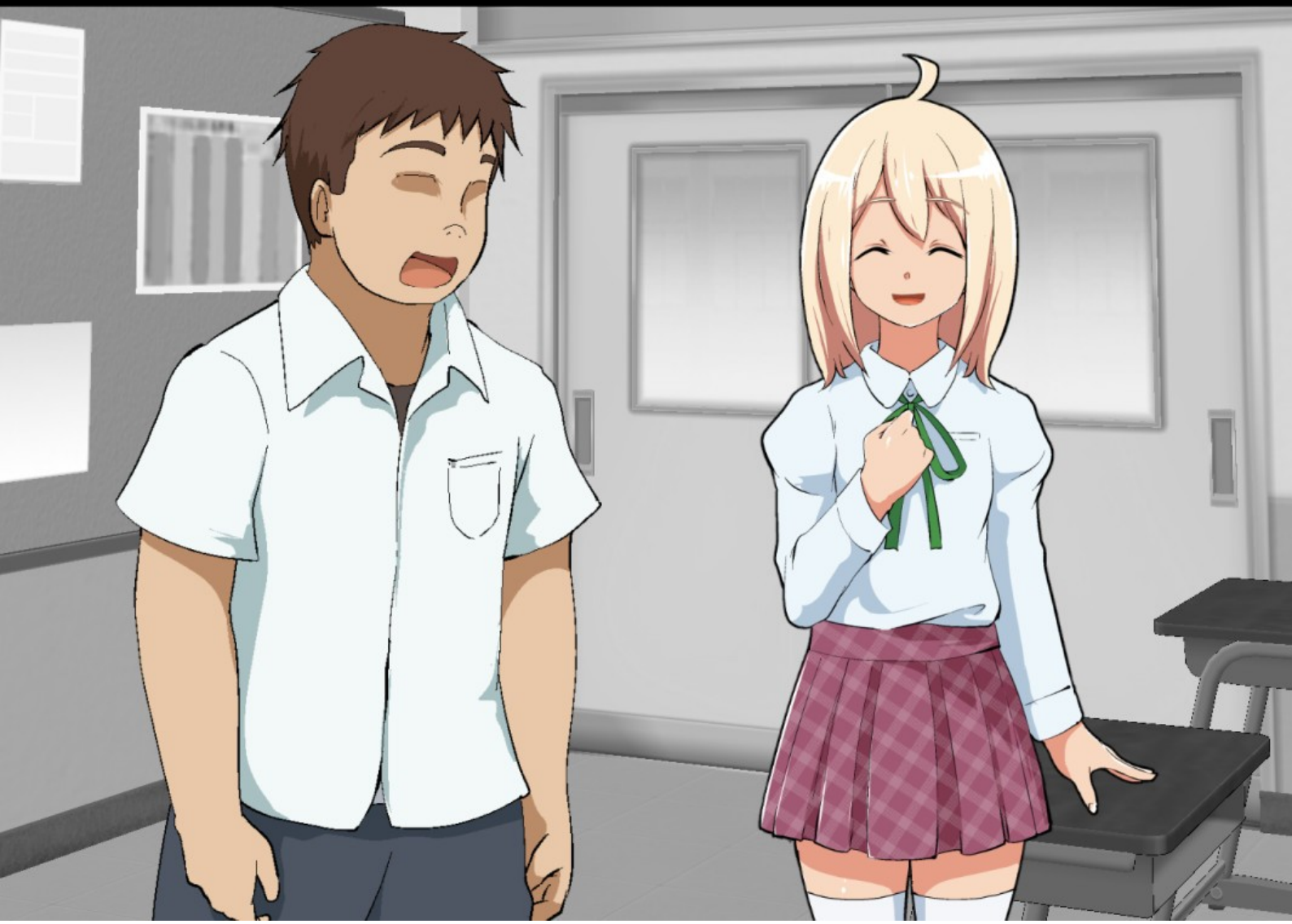
よー助「えぇ～めんどいなぁ」

みひろ「あはは…パパっと済ませちゃお下川君！」

よー助「…へへ、まあ岩原と一緒ならいいか！」

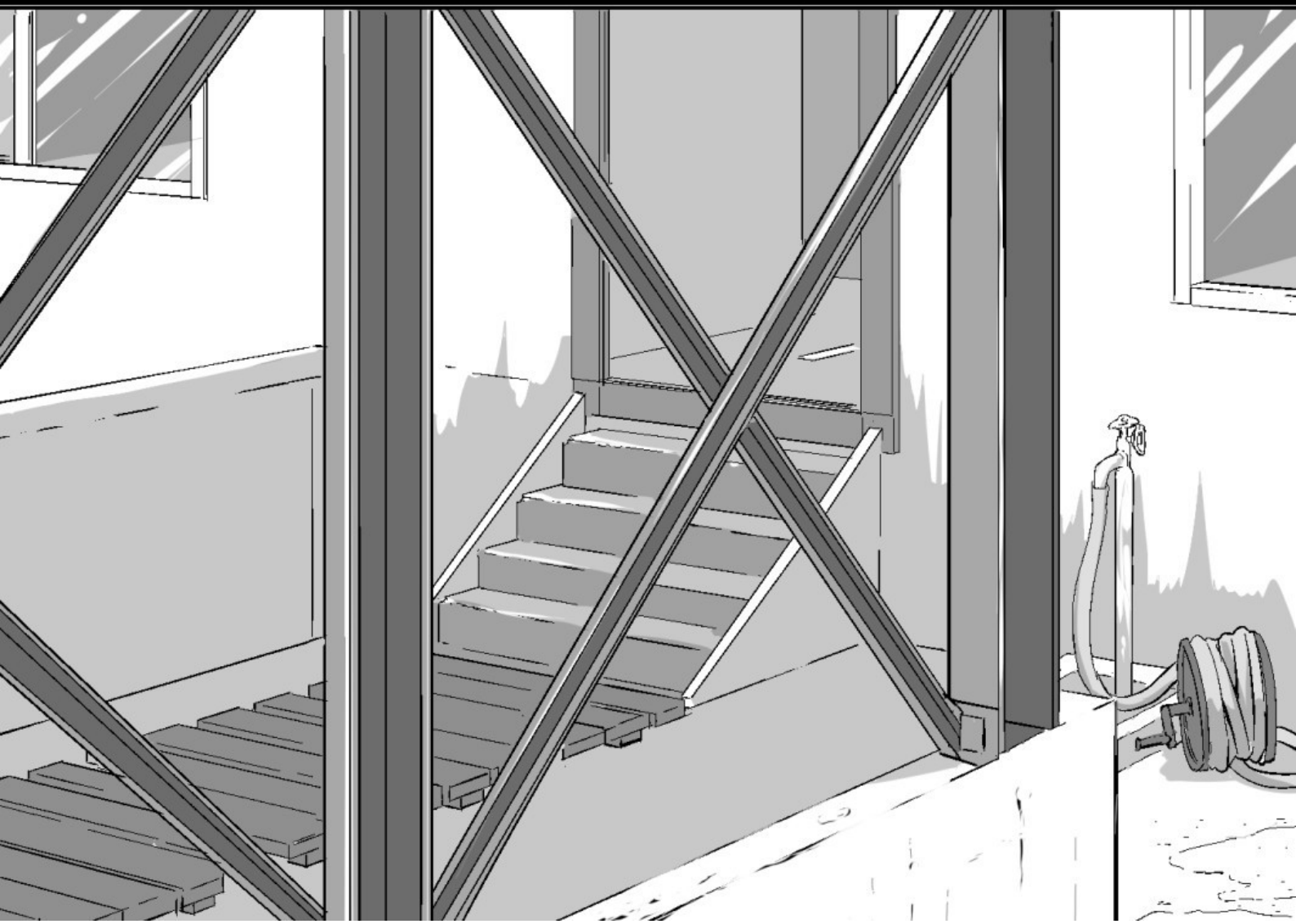
みひろ「もう、なにそれ」

よー助「ｗｗｗ」



放課後、担任に言われた通り係の務めを果たすみひろとよー助。
授業で使った教材を旧校舎の空き教室まで持っていった。

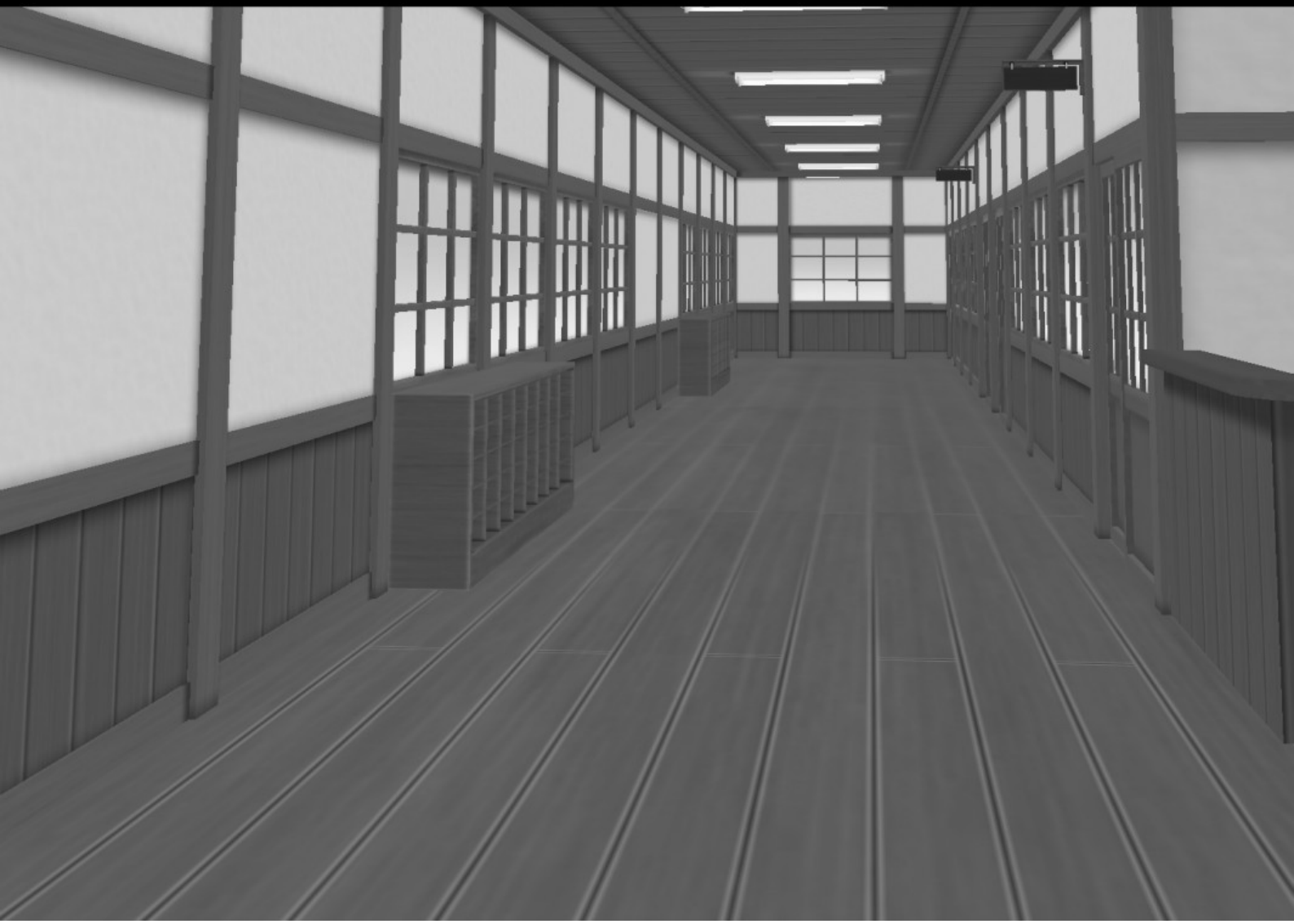
友馬「…」
友馬は校内の自販機で買ったペットボトルの飲料を二本カバンに詰めて、旧校舎に向かう。
放課後にもなれば生徒も教師もほぼ立ち寄ることはないであろう旧校舎。



古い廊下を進んでいく。ギッギッと床が鳴る。

やはり人の気配などせず自分のその足音だけが聞こえる状態だ。

…と思っていたら、キシキシと自分が鳴らすモノとは別の音が聞こえてくる。





ガラッ…。

友馬「…飲み物買ってきたぞー」

よー助「サンキュー♪」

みひろ「あ、ありがとう友馬君…んっ」



みひろは持ち上げられる形でひょいと後ろから軽く抱きかかえられている。
下半身が浮いたままプラプラと足が揺れている。
みひろ「よー君っ友馬君見てるからちょっと休も…」

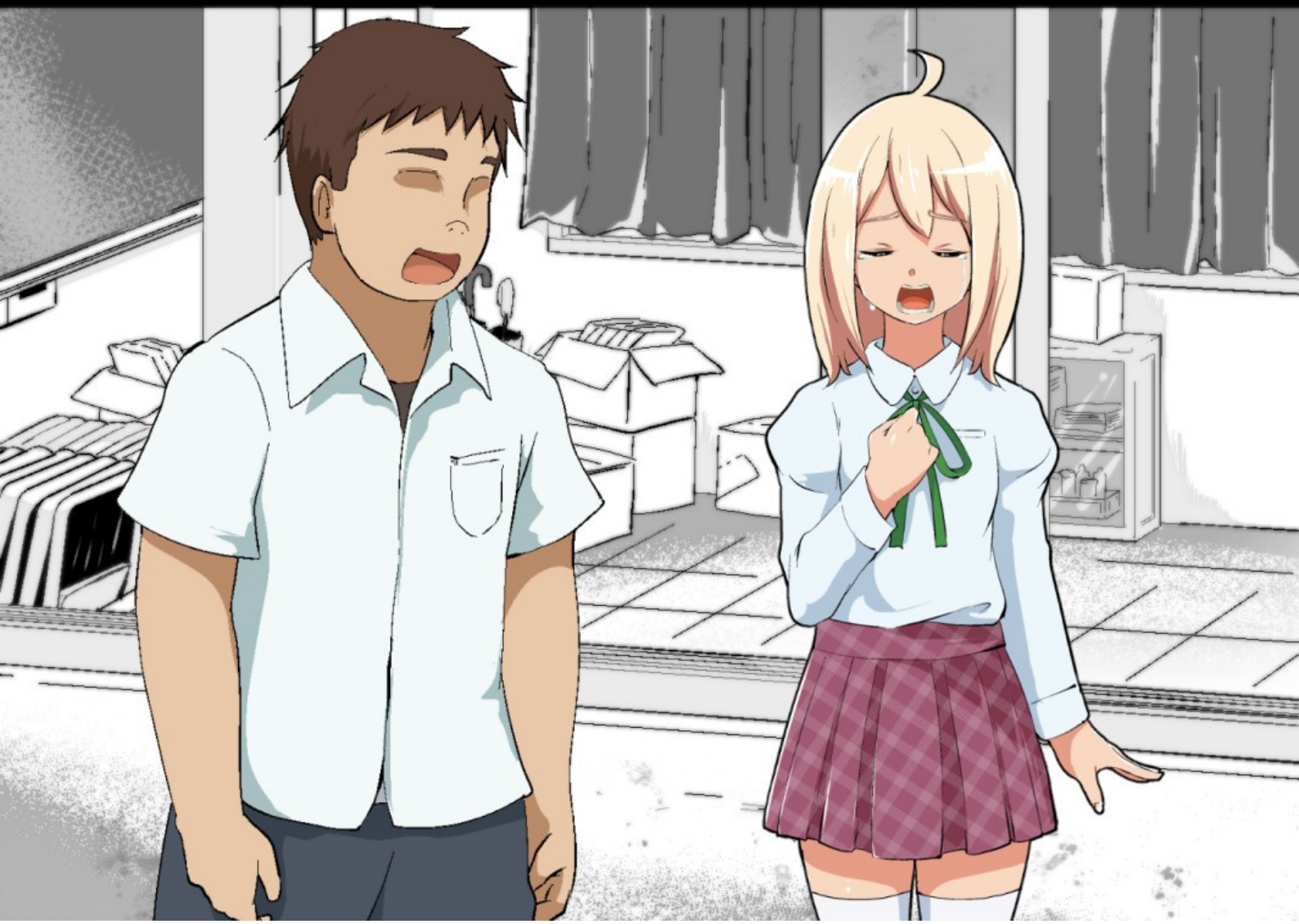
よー助「えぇ～俺は一回おっぱじめたら止められないんだよ、別にこのままでもいいじゃんな」
友馬「…ああ、構わずいちゃついててくれ」
みひろ「ゆ、友馬君っ」
よー助「ほら、幼馴染の了承も得たことだし…w」
友馬「…」

あの日、俺がこの選択肢を選び、無事に元の場所へ帰ってきた後2人と対面した。

みひろは泣いていた。

よー助も頭を床につけて気の済むまで殴ってくれと言ってきた。

それは形だけの土下座ではなかったんだと友馬は感じた。

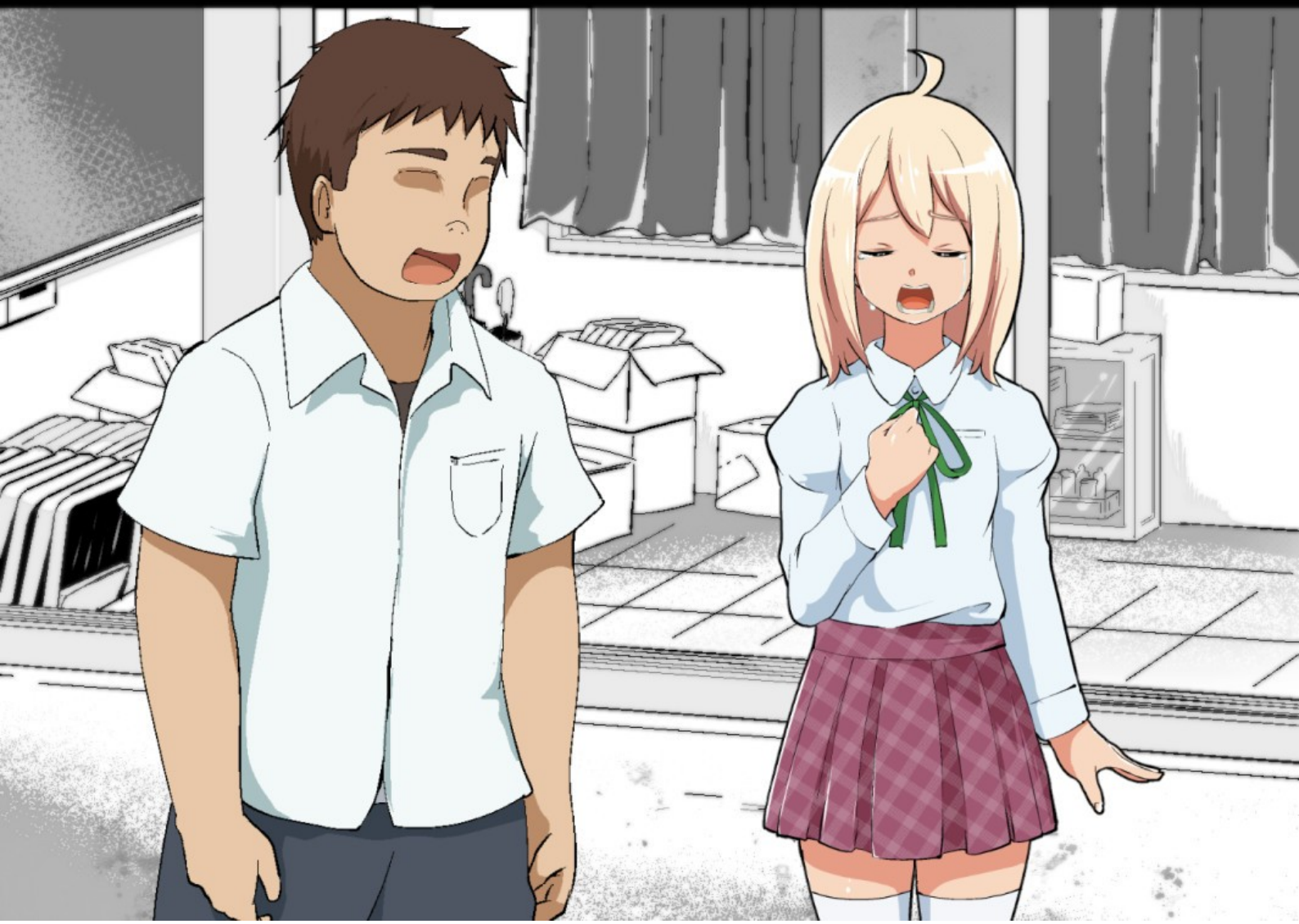


恐らく二人は今、友馬に何をどう説明すればいいのか分からずにいる。
ただひたすらに愛し合うこと以外していなかったために。

友馬「…」

2人はごく自然と近い距離にいる。

友馬は「まあ、好きになったなら仕方ないんじゃないか」と切り出した。



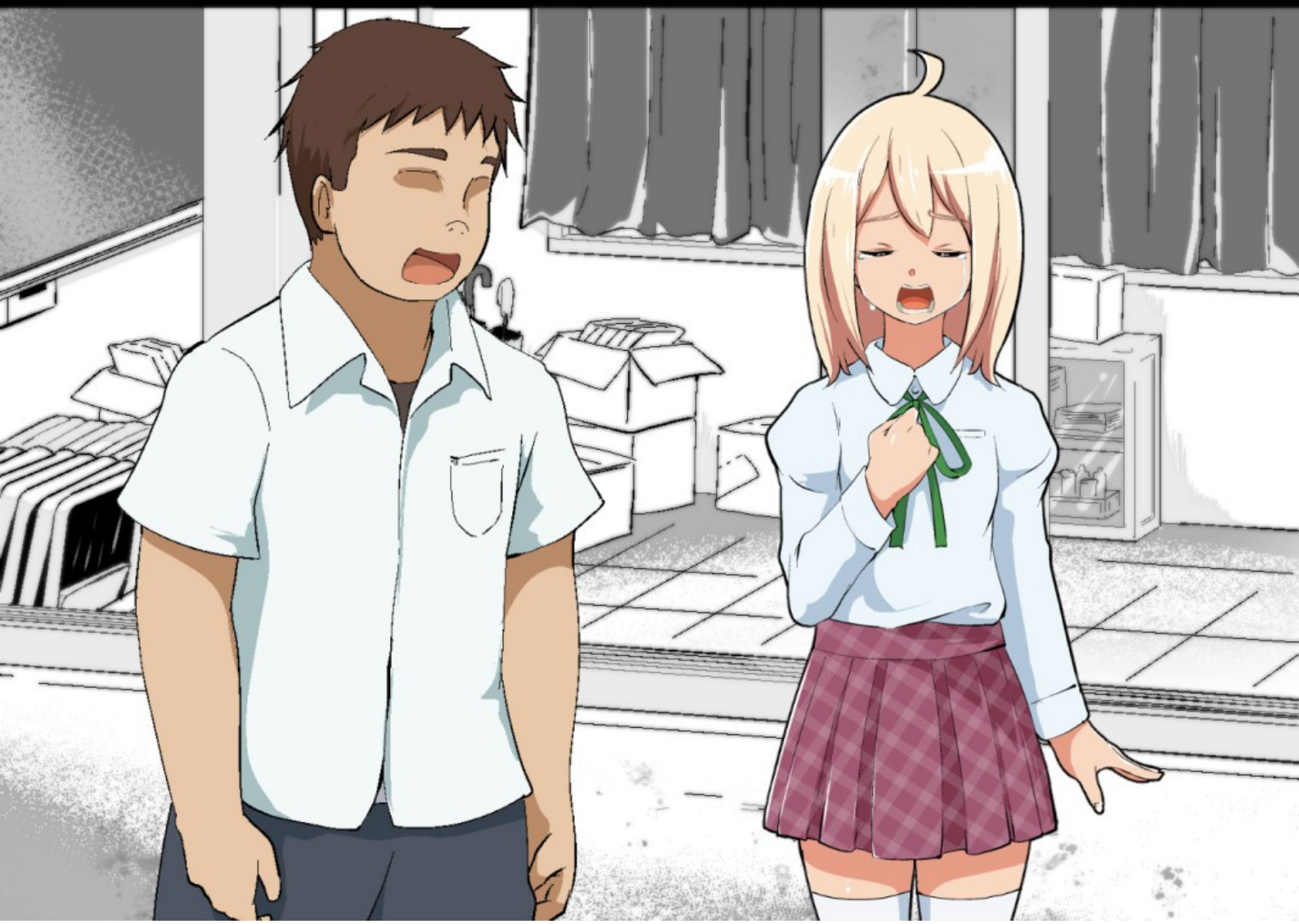
閉鎖空間に閉じ込められるという精神的に窮屈な環境下での魔が刺した行為だったのかもしれない。

しかし、2人が想い合ったのは事実。

「じゃあ俺からは何も言わない。
ただ、幸せになってくれ。」

それだけ言った。

あと、いない者扱いされたのは普通に寂しかったと伝えた。(ごめんと普通に謝られた)





よー助「あ、そういやゴム今使ってるので最後だったな」

みひろ「えっもう!?数日前に買ったばかりなのに…！」

よー助「俺たち毎日愛し合ってるからなｗｗ」

みひろ「じゃあ、今日はこれでおしまいだね…」

よー助「…断る！今日はまだまだやりたい気分だ！」

みひろ「で、でもゴムないと」

よー助「コンビニでも売ってるだろ」

「あ～、誰か買いに行ってくれたりとか…」

みひろ「そ、そんな…ダメだよそんなの…」

友馬「…」



みひろはチラッと友馬に視線を向ける。
ダメとは言ったが言葉に圧がないというか、力を抜いたような言い方だった。
よー助「近くのコンビニならダッシュで10分くらいで行けるなぁ」
みひろ「…」
遠回しにそんな言い方をするよー助。

みひろは何も言わなくなったが、無言でいることが何かを暗に訴えているようだった。
二人でチラチラ友馬に視線を送る。
何か言ってほしい言葉を待っているかのように。



友馬「俺、買ってこようか」

よー助「え!マジで!?いや～なんか悪いなぁ～♪でもそういってくれるなら甘えるわ!平野サンキュ～♪」

みひろ「わ、悪いよ友馬くん…でも…頼んじゃってもいいかな?ホントにごめんね?」

二人は友馬がその言葉を口にすると待ってましたと言わんばかりに急に捲し立てた。

よー助「やべw120円くらいしかない(笑)」

みひろ「もー、あんな変なもの買ったからでしょ?無駄遣いしないようにね」

よー助「無駄じゃないって!みひろの喉まん強化のための極長ディルド…」



みひろ「ちょっと…！あ！んじゃ友馬君!!これで買ってきてもらえるかな？ごめんね？？」

友馬「…ああ」

みひろが自分の財布を友馬に渡す。

手がピクピクと小刻みに痙攣していた。





よー助「平野！なるべく早くな！じゃないと…俺我慢できなくて生やっちゃうかも…ｗ」

みひろ「そ、それはダメだって…」

よー助「平野！俺たちを助けてくれ～(笑)ダッシュダッシュｗｗ」

みひろ「よ、よー君！友馬君にそんないい方しちゃ…」

タンッとドアが閉められた。

友馬に渡し損ねたみひろの財布が床に落ちる。

「みひろ♥みひろ♥みひろぉ!!♥」

「も～、よー君たら…♥あん…っ♥」

「♥♥♥♥♥」

ドアが閉められた瞬間二人きりの世界に戻ったように、いちゃつき出す二人。





友馬「…」

よー助なりにみひろのことは大事に思っている。

みひろもそんなよー助をなんだかんだ…。

きっと今は幸せ過ぎて周りが見えていない状態なのだろう

羽目を外し過ぎて大ごとにならないように俺が陰で見ていてやらないといけない。

だから幼馴染として、やれることはやらなきゃいけないんだ。



友馬「さあ、早く買いに行かないと…」

友馬は床に落ちているみひろの財布を拾い、
駆け足で旧校舎の廊下を渡った。

――おしまい――

